アンケート調査結果からみる

八女市の子どもをめぐる「生活困難世帯」の姿

（調査結果報告書）

令和　3年　9月

八　　女　　市

目次

１．調査の概要.....1

（１）調査の目的.....1

（２）調査の対象.....1

（３）調査の方法.....1

（４）調査の期間.....1

（５）回収の結果.....2

（６）報告書の見方.....2

２．本市における分析類型.....3

（１）相対的貧困.....3

（２）生活困難.....4

（３）ひとり親世帯.....5

３．調査結果.....6

（１）保護者.....6

（２）小中学生.....46

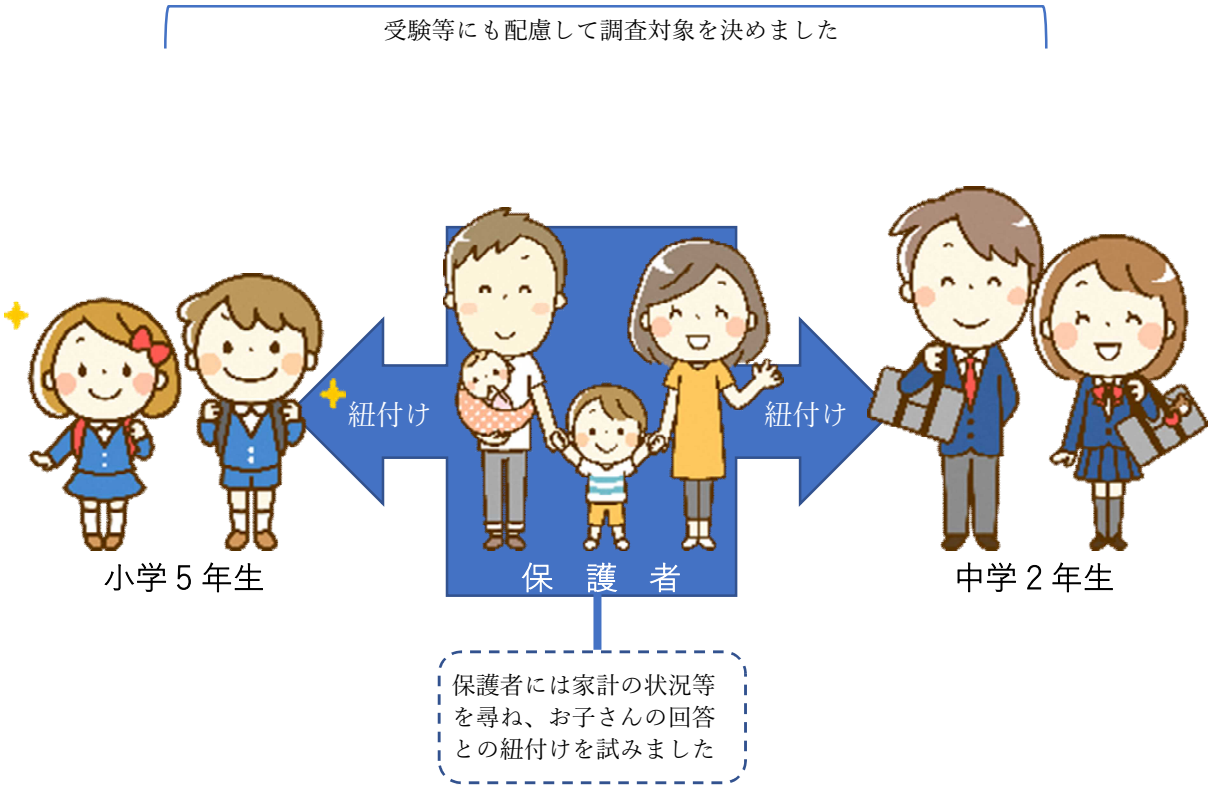
１．調査の概要

（１）調査の目的

子育て家庭の日ごろの生活や子育ての実態を把握することで八女市における子どもの貧困対策のあり方を考えるとともに、安心して子育てをするために必要な取組を検討し、「子どもの貧困対策推進計画」を策定するための基礎資料とすることを目的とします。

（２）調査の対象

市立学校に通う小学５年生、中学２年生のお子さんがいる世帯。



（３）調査の方法

学校を通じた配付、郵送による回収。

（４）調査の期間

令和３年７月８日（木）から令和３年７月 31 日（土）まで。
ただし、令和３年８月 22 日（月）回収分までを集計に含めています。

（５）回収の結果

	保護者	小学５年生	中学２年生
発送数	996 通	542 通	454 通
回収数	482 通	262 通	221 通
回収率	48.4%	48.3%	48.7%

（６）報告書の見方

- 回答は、各質問の回答者数（計）を基数とした百分率（%）で示しています。小数点以下第２位を四捨五入しているため、比率の合計が 100.0%にならない場合があります。
- 複数回答を求めた質問では、回答比率の合計が 100.0%を超えます。
- 回答があっても、小数点第２位を四捨五入して 0.1%に満たない場合は、グラフには「0.0」と表記しています。
- グラフやコメントにおいて、回答選択肢を簡略化して表記している場合があります。

（参考）今回のアンケート調査の特徴（前回調査からの変更点）

- 保護者用調査票を 500 部追加し、サンプル数をできるだけ多く確保するよう務めました。
- 国共通調査票に合わせ、小学５年生、中学２年生を対象としました。
- 各調査票に連番を印刷し、保護者と児童・生徒の回答を紐付けすることとしました。
- 設問を厳選し回答の負担を減らすとともに、学校を通じて配布しました。
- 調査の性質を考慮し、個人情報に最大限の配慮をして、保護者、小学生、中学生用調査票を別個に返送できるようにしました。それぞれの調査票と返信用封筒を同一の色で作成し、容易に識別できるよう工夫しました。

２．本市における分析類型

本調査では、下記３視点から分析を行いました。なお、下記の区分はこれまで光を当ててこなかった切り口から本市の現状を把握するためのひとつの目安として定義したものであり、類型に区分されたすべての世帯が実際に困窮しているということではありません。

（１）相対的貧困

厚生労働省が公表している算出方法では、等価可処分所得（世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得）の中央値の半分（貧困線）に満たない世帯を「相対的貧困層」としています。

本調査では、税込の年間収入を回答いただいていることから、下表に挙げる係数を用いて可処分所得を概算する必要があります。次頁に挙げる換算表を用い、相対的貧困世帯を定義づけました。

所得５分位階級ごとの係数（平均可処分所得に対する平均所得の比）

	１世帯あたり 平均所得（a）	平均可処分所得 （b）	係数 （a／b）
第Ⅰ（～203 万円）	125.2	110.7	1.13
第Ⅱ（203～350 万円）	277.9	237.7	1.17
第Ⅲ（350～540 万円）	441.1	363	1.22
第Ⅳ（540～820 万円）	667.7	535.8	1.25
第Ⅴ（820 万円～）	1249.8	949.6	1.32

※ 令和元年国民生活基礎調査結果より作成。

選択肢と可処分所得の換算表

N0.	選択肢	税込年収換算値 （c）	係数 （d=a/b）	概算可処分所得 （c/d）
1	50 万円未満	25 万円	1.13	22 万円
2	50～100 万円未満	75 万円		66 万円
3	100～150 万円未満	125 万円		111 万円
4	150～200 万円未満	175 万円		155 万円
5	200～250 万円未満	225 万円	1.17	192 万円
6	250～300 万円未満	275 万円		235 万円
7	300～350 万円未満	325 万円		278 万円
8	350～400 万円未満	375 万円	1.22	307 万円
9	400～450 万円未満	425 万円		348 万円
10	450～500 万円未満	475 万円		389 万円
11	500～600 万円未満	550 万円	1.25	440 万円
12	600～700 万円未満	650 万円		520 万円
13	700～800 万円未満	750 万円		600 万円
14	800～900 万円未満	850 万円	1.32	644 万円
15	900～1,000 万円未満	950 万円		720 万円
16	1,000 万円以上	1,000 万円		758 万円

（２）生活困難

低所得による経済的困窮だけでは貧困の実態を十分に捉えられるとは限らないため、本市独自指標として生活困窮の状況について多面的な把握に努めることとしました。

具体的には、経済的理由により、必要な「食料」や「衣服」が購入できなかったり「公共料金」の支払いができなかったりした世帯に加え、現在の暮らしの状況に対して「大変苦しい」と回答した世帯を含めて「生活困難世帯」と定義し分析軸に加えました。

（3）ひとり親世帯

困窮世帯が多いと言われている「ひとり親世帯」について、本市独自指標として分析軸に加えました。

分析に用いた３類型と出現率

類型	定義	調査結果
相対的貧困世帯	等価可処分所得※1 が中央値の 1/2 以下相当である世帯	20.4%
生活困難世帯	食料・衣服・公共料金の、何れかの支払いができなかった経験のある世帯に加え、現在の暮らしの状況が「大変苦しい」と回答した世帯	19.5%
ひとり親世帯	母親または父親の片方いずれかと、その子とからなる世帯※2	8.9%

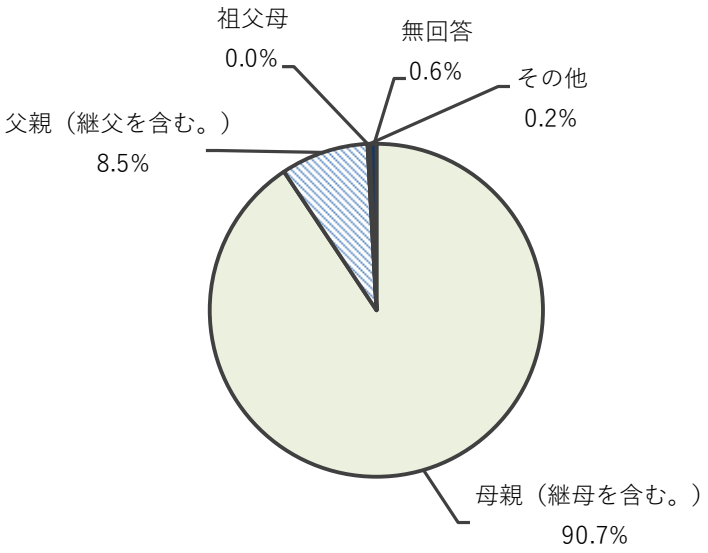
※1 厚生労働省「2019 年国民生活基礎調査」より、等価世帯所得の中央値は 253.4 万円であることから、相対的貧困は 126.7 万円未満。

※2 問 4（世帯の状況）で「1．母親」のみ又は「2．父親」のみと回答した世帯に加え、「1．母親」及び子どもの「4．兄弟姉妹」又は「2．父親」及び子どもの「4．兄弟姉妹」と回答した世帯。但し、問 5（婚姻の状況）で「1．結婚」していると回答した世帯は除いた。

３．調査結果

（１）保護者

問１　お子さんとあなたとの関係は、次のどれにあたりますか。お子さんからみた続柄でお答えください。



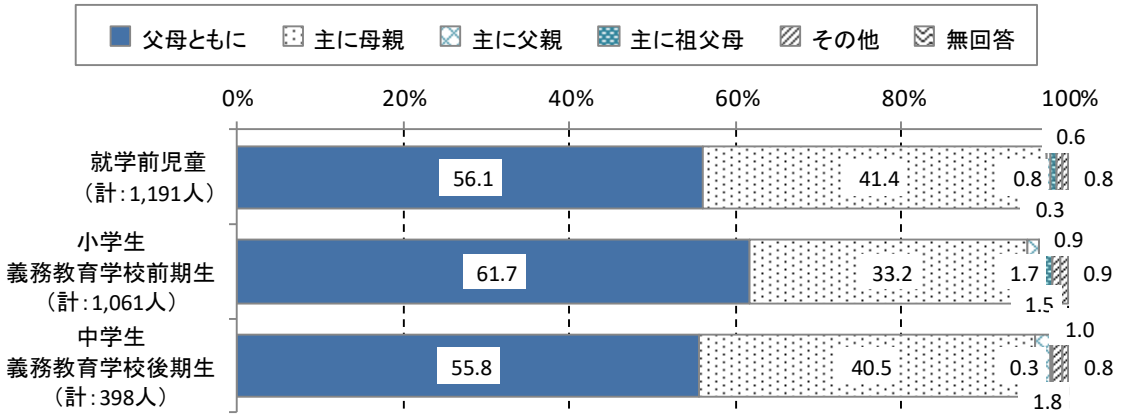
計：482人

●お子さんと回答者の関係についてたずねたところ、「母親（継母を含む。）」と回答した人の割合が最も高く、90.7%となっており、ほとんどの回答者が母親であることが分かります。

●問９で示すとおり、多くの家庭は共働き世帯となっています。また、平成 31 年 3 月に実施した「八女市 子ども・子育て支援事業計画作成のためのアンケート」によると、子育てを夫婦で協力しながらおこなっている世帯は概ね半数あるとの調査結果が得られています。しかしながら、本調査の回答者の 9 割以上が母親となっていることから窺えるとおり、「子育てに関することは母親が担うべき」という性的役割分担意識が市民の中で根強く残っていることが推察されます。

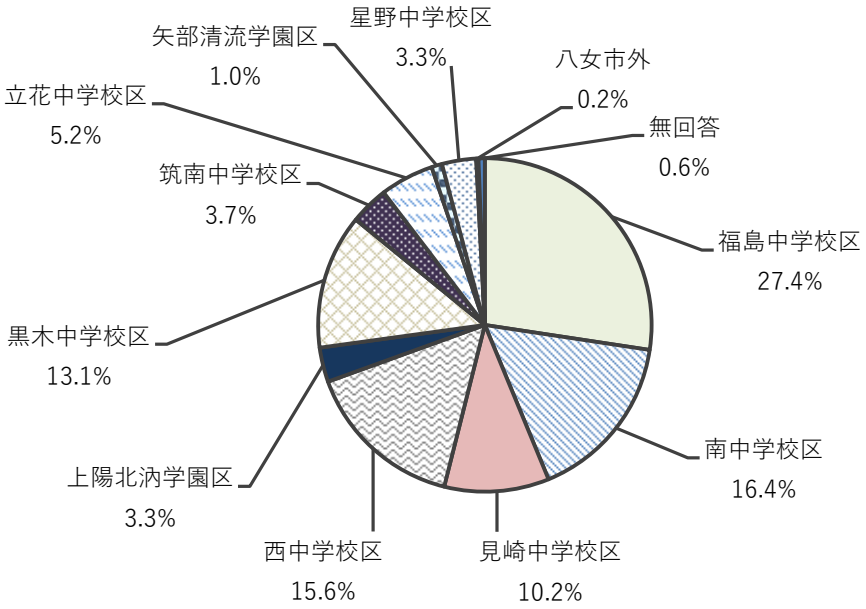
（参考）

宛名のお子さんの子育てを主に行っているのはどなたですか



八女市 子ども・子育て支援事業計画作成のためのアンケート（平成 31 年 3 月）

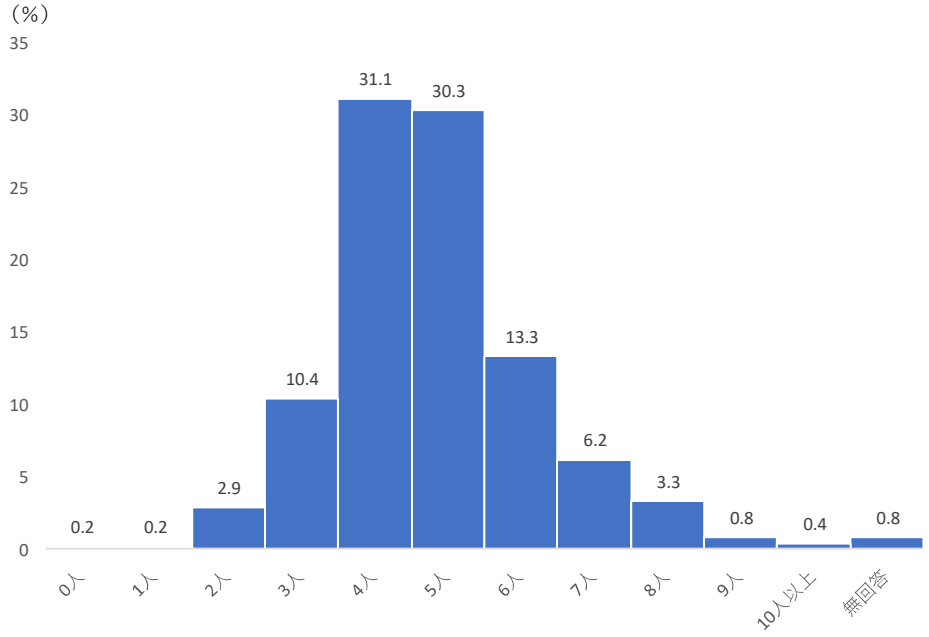
問２　あなたがお住まいの中学校の学区を教えてください。



計：482人

●お住まいの中学校の学区をたずねたところ、「福島中学校区」と回答した人の割合が最も高く、27.4%となっています。次いで、「南中学校区」（16.4%）、「西中学校区」（15.6%）と続いています。

問３　お子さんと同居し、生計を同一にしているご家族の人数（お子さんを含む。）を教えてください。単身赴任や入寮しているなど、同居していない人は含めないでください。

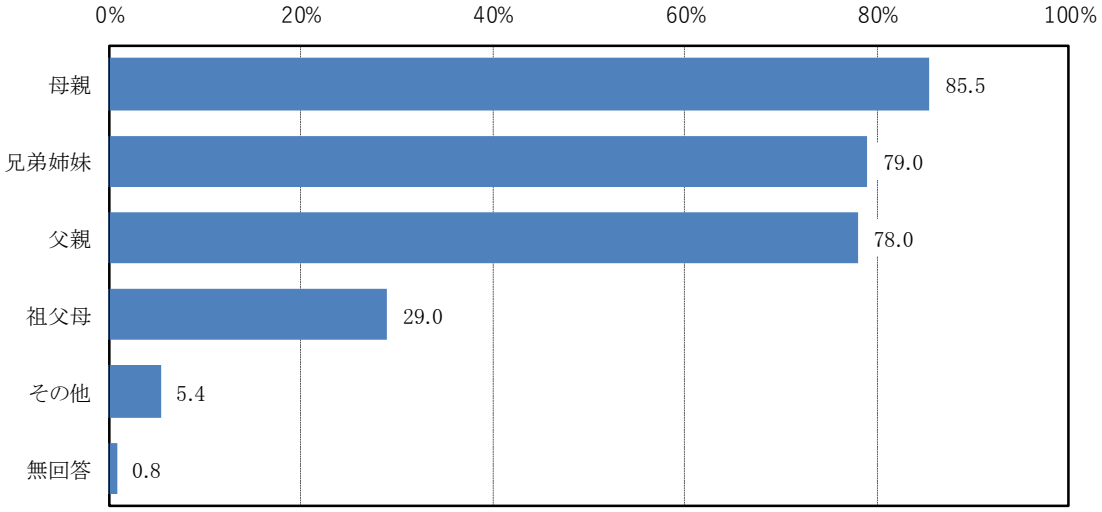


（計：482人）

●お子さんと同居し、生計を同一にしている家族の人数をたずねたところ、「4 人」と回答した人が最も多く、31.1%となっています。次いで、「5 人」（30.3%）、「6 人」（13.3%）と続いています。

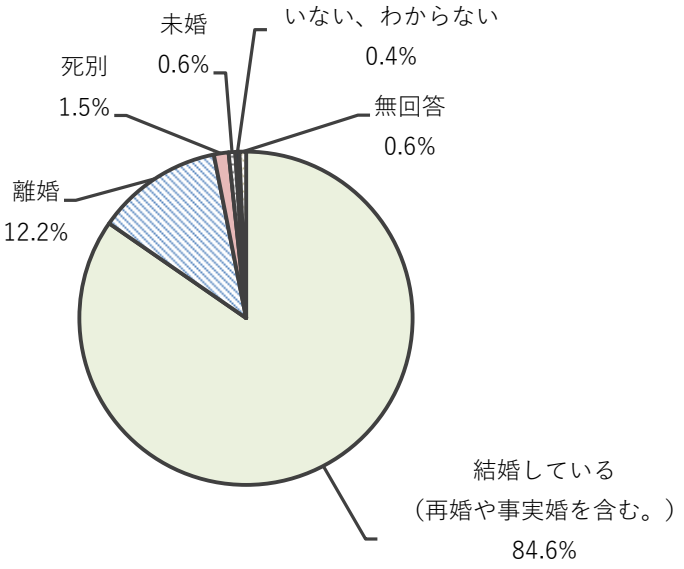
●お子さんから見てどの関係の方が含まれるかとたずねたところ、「母親」と回答した人が最も多く、85.5%となっています。次いで、「兄弟姉妹」（79.0%）、「父親」（78.0%）と続いています。

問４　前の質問で回答した「ご家族」には、お子さんから見てどの関係の方が含まれますか。（複数回答）



計：482人

問５　お子さんと同居し、生計を同一にしている父親や母親の婚姻状況を教えてください。



計：482人

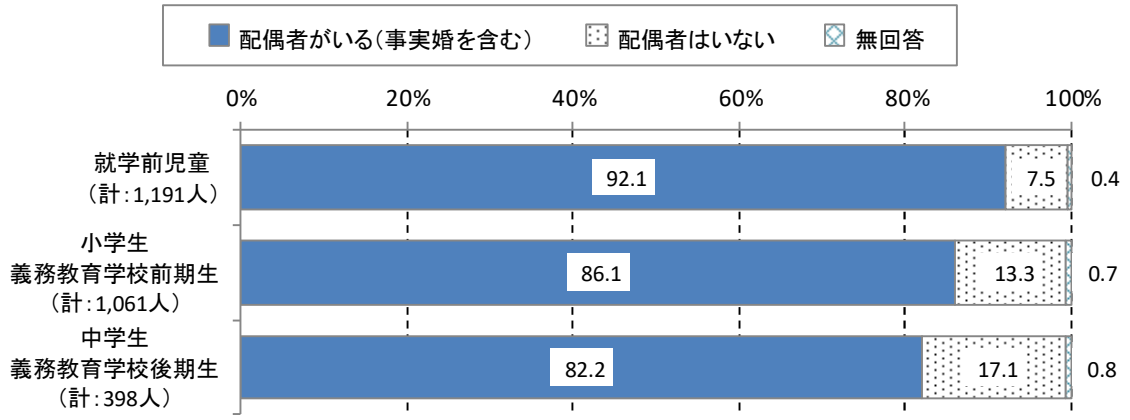
●お子さんと同居し、生計を同一にしている父親や母親の婚姻状況をたずねたところ、「結婚している（再婚や事実婚を含む。）」と回答した人の割合が最も高く、84.6%となっています。次いで、「離婚」（12.2%）、「死別」（1.5%）と続いています。

●平成 31 年 3 月に実施した「八女市 子ども・子育て支援事業計画作成のためのアンケート」の調査結果によると、配偶者がいない方の割合は、お子さんが成長するに従って増加する傾向にあり、中学生・義務教育学校後期生の 17.1%の世帯には配偶者がいないことが明らかになっています。今回の調査結果では、配偶者がいない人の割合（問 5 で「離婚」「死別」「未婚」と回答した人の合計）が 14.3%でしたが、調査対象者が小学 5 年生及び中学 2 年生であったことを踏まえると概ね同様の傾向にあることが分かります。

●「八女市 子ども・子育て支援事業計画作成のためのアンケート」の調査結果では、保護者の年齢が低くなるほど、配偶者のいない人の割合が増加傾向にあり、保護者が 35 歳以下の世帯の 4 世帯に 1 世帯には配偶者がいません。このことから、今後、困窮世帯が多いと言われているひとり親世帯が増加する可能性があるといえます。

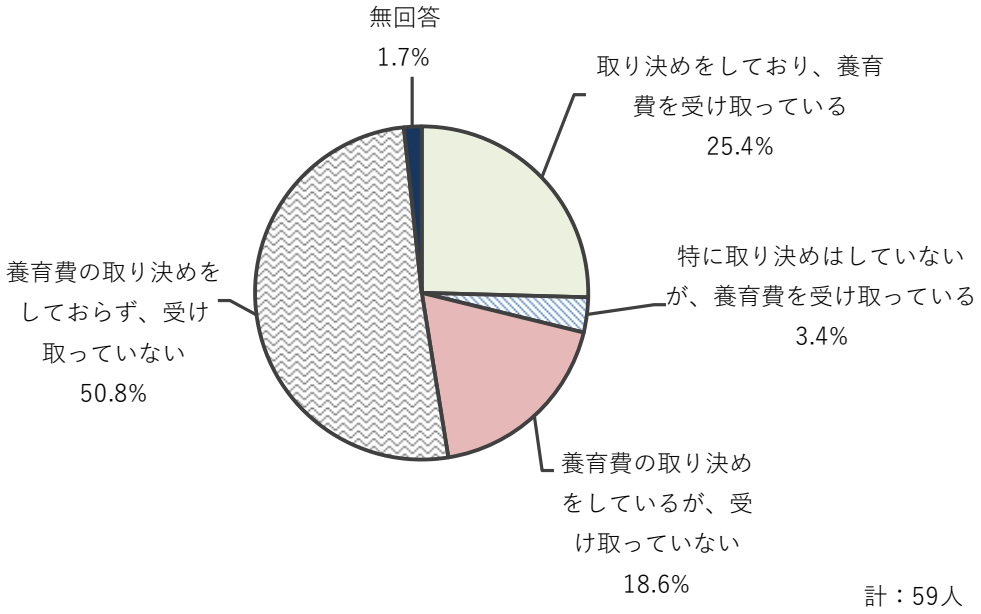
（参考）

このアンケートにご回答いただいている方の配偶関係についてお答えください



八女市 子ども・子育て支援事業計画作成のためのアンケート（平成 31 年 3 月）

問６　前の質問で「離婚」を選んだ場合、離婚相手と子どもの養育費の取り決めをしていますか。また養育費を現在受け取っていますか。

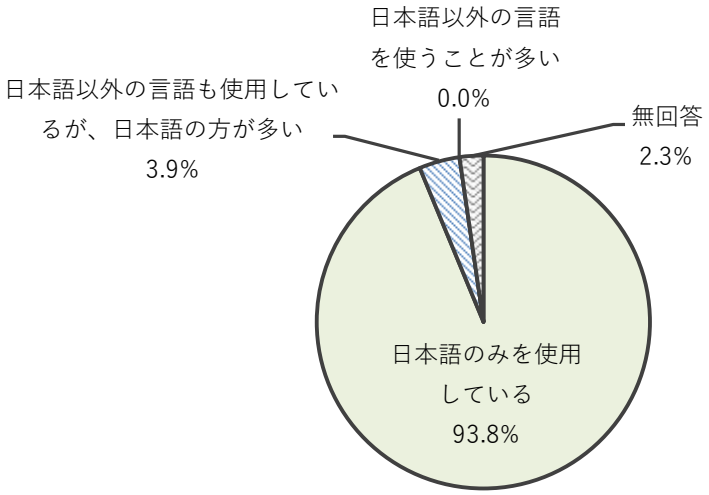


●離婚相手と子どもの養育費の取り決めをしているか、養育費を現在受け取っているかをたずねたところ、「養育費の取り決めをしておらず、受け取っていない」と回答した人の割合が最も高く、50.8%となっています。次いで、「取り決めをしており、養育費を受け取っている」（25.4%）、「養育費の取り決めをしているが、受け取っていない」（18.6%）と続いています。

●「平成 28 年度全国ひとり親世帯等調査」の結果によると、養育費の取り決めをしている割合は 42.9%であり、本市（44.0%）は全国水準と比較してほぼ同水準であることが分かります（但し、国調査は平成 28 年時点のデータであることに注意）。

●「平成 28 年度全国ひとり親世帯等調査」の結果からは、母子世帯の母が養育費の取り決めをしていない理由として、「相手と関わりたくない」が 31.4%と最も多く、次いで「相手に支払う能力がないと思った」が 20.8%、「相手に支払う意思がないと思った」が 17.8%となっています。本調査でも、離婚された方の約 7 割（69.4%）は養育費を受け取っておらず、また、養育費を受け取っていない人の 26.8%は取り決めをしているにも関わらず守られていないのが実態であり、単に養育費の取り決めをする割合を高めるだけでは問題の解決にならないことが分かります。

問７　ご家庭ではどれくらい、日本語以外の言語を使用していますか。



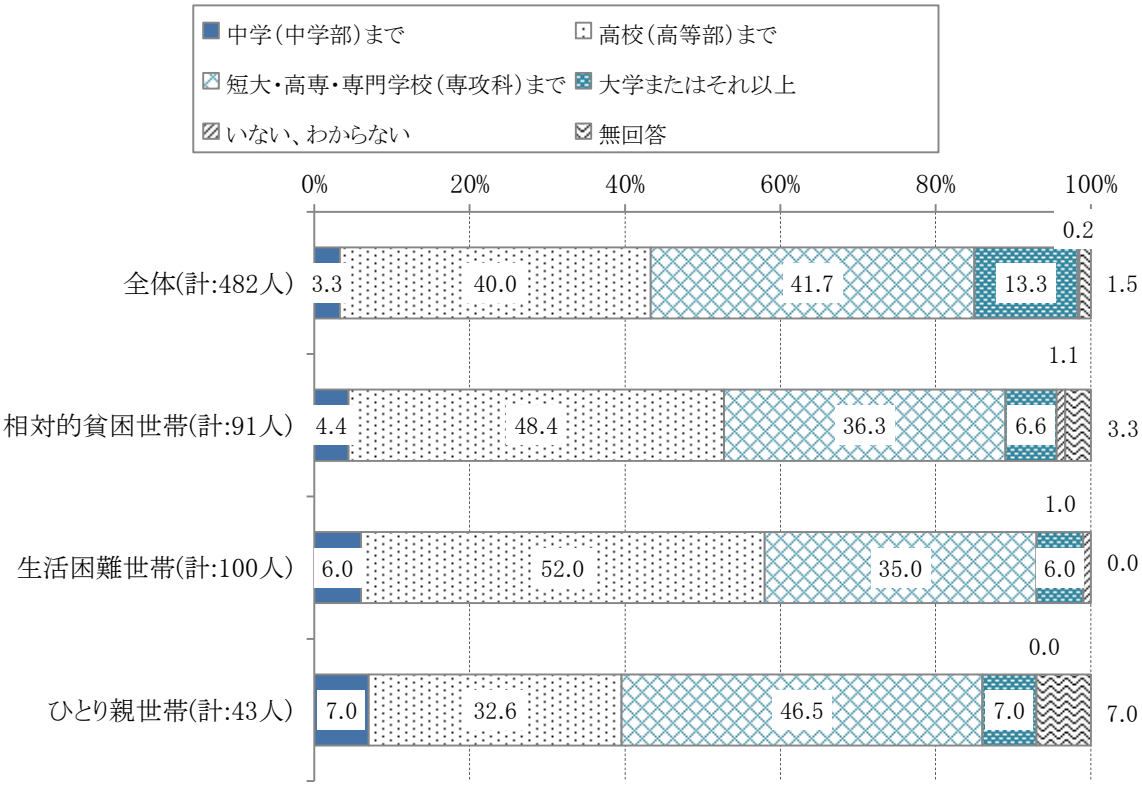
計：482人

●家庭ではどれくらい、日本語以外の言語を使用しているかとたずねたところ、「日本語のみを使用している」と回答した人の割合が最も高く、93.8%となっています。次いで、「日本語以外の言語も使用しているが、日本語の方が多い」（3.9%）が続いています。なお、「日本語以外の言語を使うことが多い」と回答した人の割合は 0.0%でした。このことから、日本語でのコミュニケーションが全くできない人の存在は本調査では確認できませんでした。

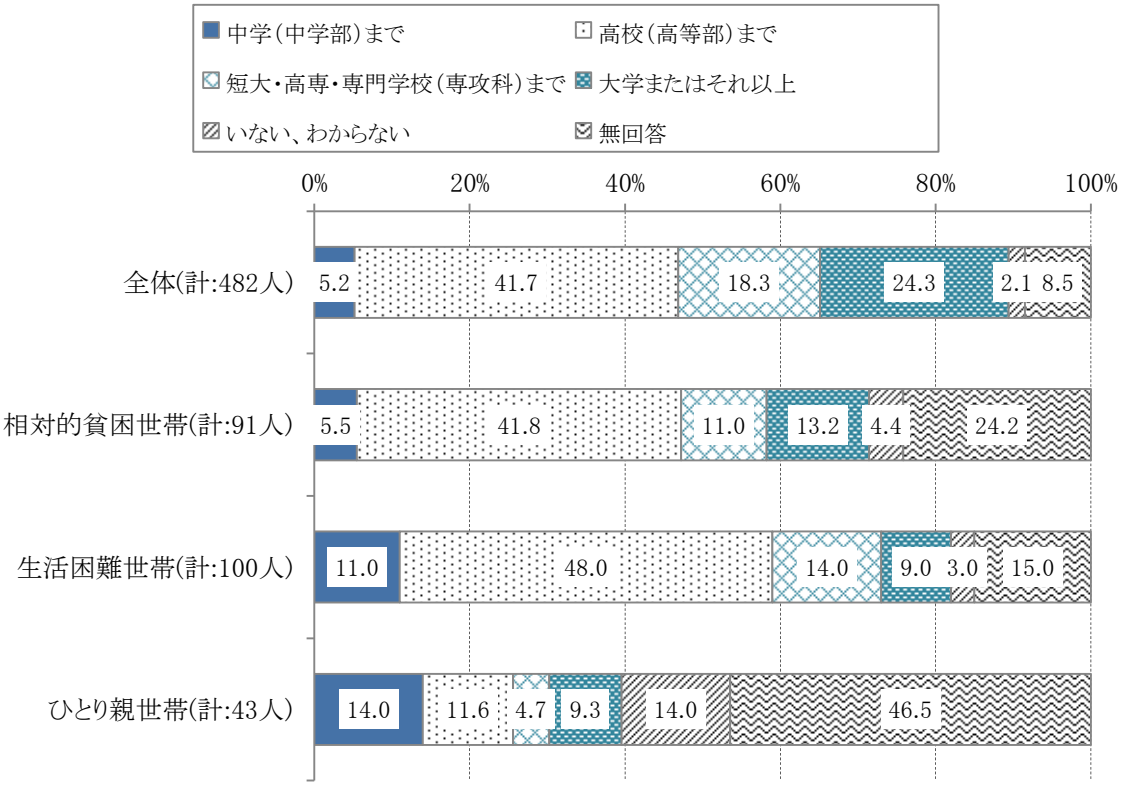
●しかしながら、外国にルーツを持つ子どもが直面する困難は、ことばの課題だけに留まりません。日本語がわからないこと、母語を失いやすいこと、教育機会自体が不足していることや孤立感を深めやすいことに加え、経済的な側面でもリスクを抱えやすい存在だといえることを踏まえて必要な対策を講じる必要があることは言うまでもありません。

問８　お子さんの親の最終学歴（卒業した学校）をお答えください。

①母親



②父親



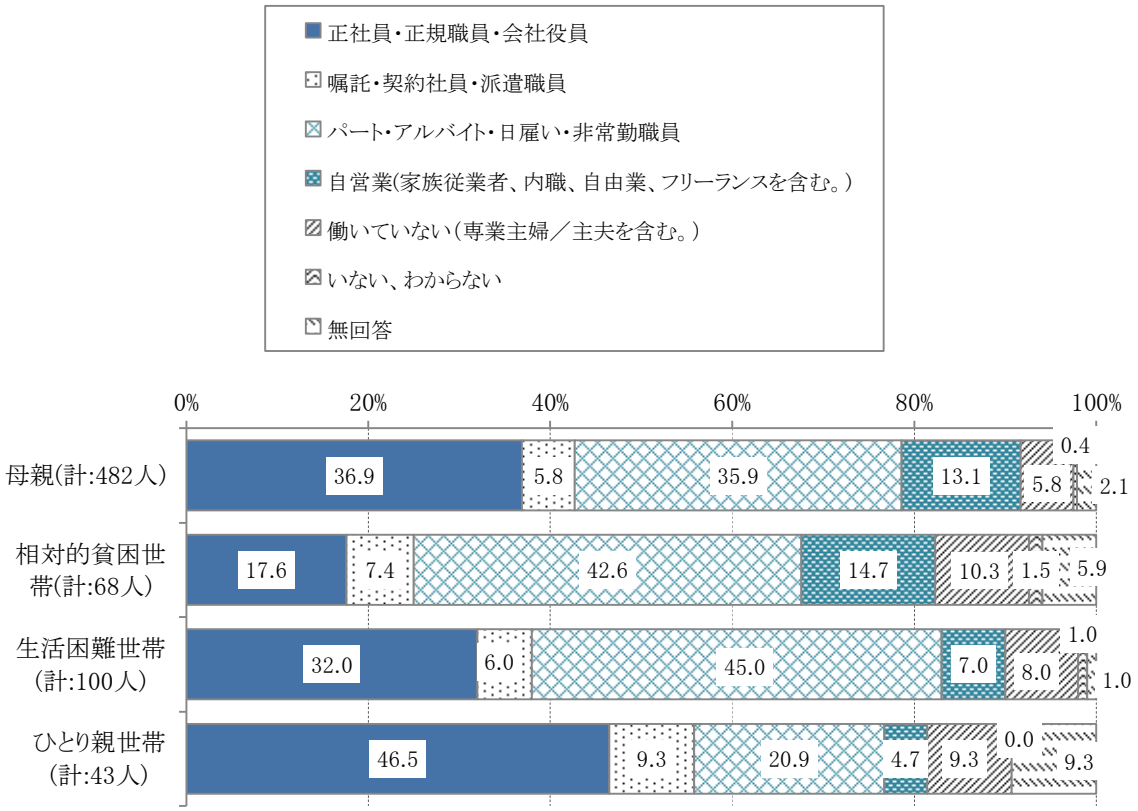
●母親の最終学歴（卒業した学校）をたずねたところ、「短大・高専・専門学校（専攻科）まで」と回答した人の割合が最も高く、41.7%となっています。次いで、「高校（高等部）まで」（40.0%）、「大学またはそれ以上」（13.3%）と続いています。

●父親の最終学歴（卒業した学校）をたずねたところ、「高校（高等部）まで」と回答した人の割合が最も高く、41.7%となっています。次いで、「大学またはそれ以上」（24.3%）、「短大・高専・専門学校（専攻科）まで」（18.3%）と続いています。

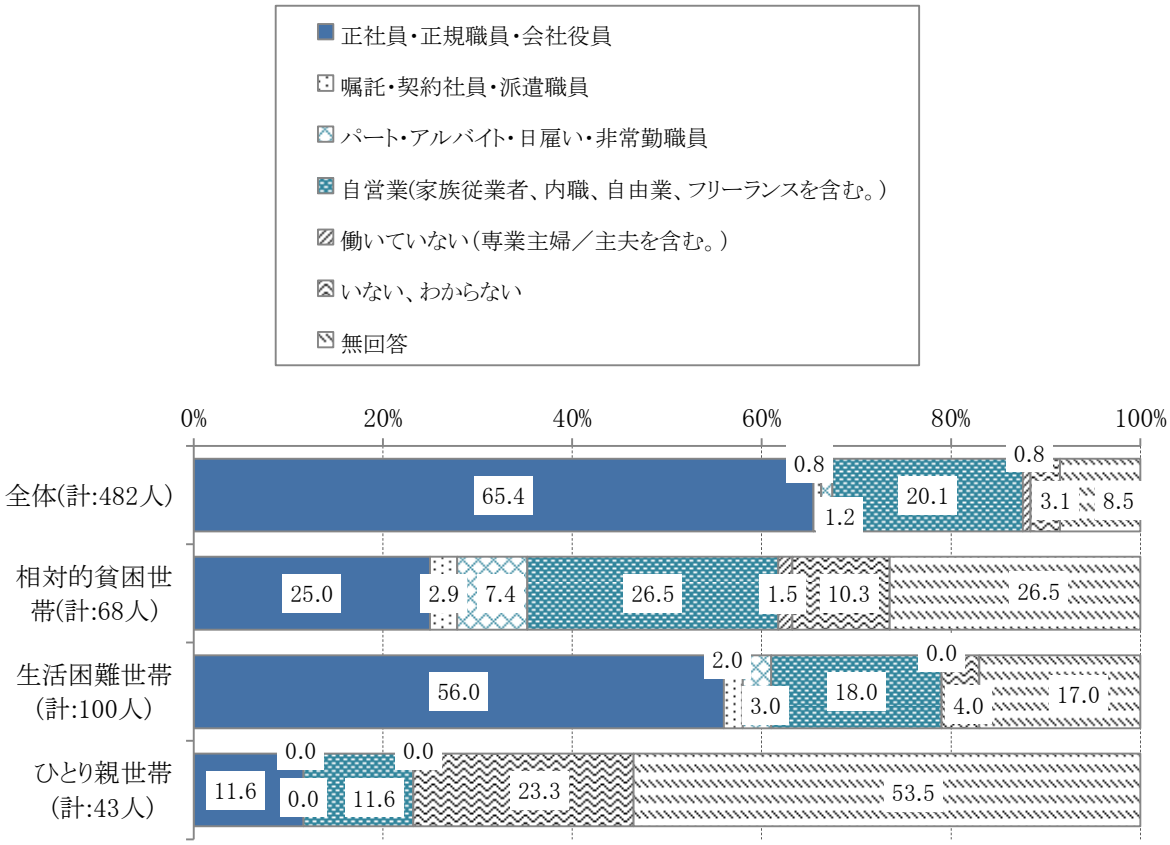
●学歴と貧困等の関係については、母親よりも父親の方が比較的大きな傾向がみられます。具体的には、父親の「短大・高専・専門学校（専攻科）まで」又は「大学またはそれ以上」と回答した人の割合は、全体では 42.6%であるのに対して、相対的貧困世帯では 24.2%、生活困難世帯では 23.0%となっています。

問９　お子さんの親の就労状況について、あてはまるものを回答してください。

①母親



②父親



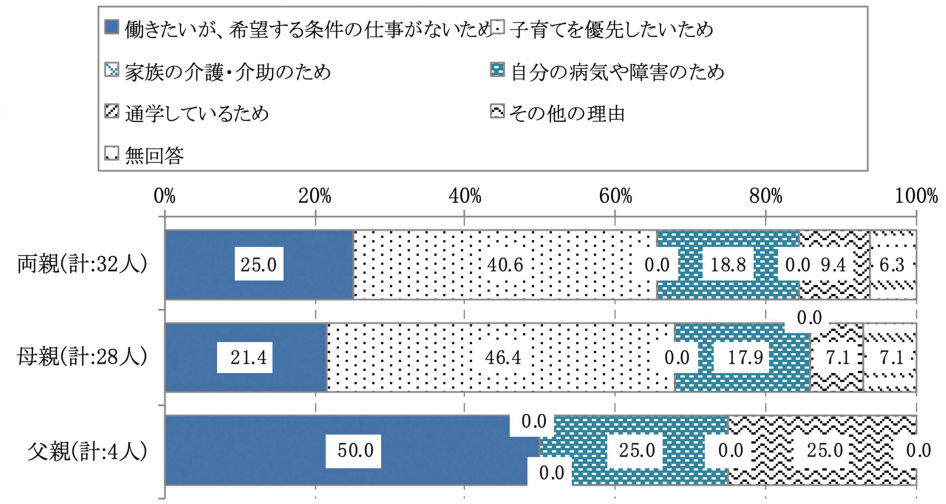
●お子さんの親の就労状況についてたずねたところ、母親は、「正社員・正規職員・会社役員」と回答した人の割合が最も高く、36.9%となっています。次いで、「パート・アルバイト・日雇い・非常勤職員」（35.9%）、「自営業(家族従業者、内職、自由業、フリーランスを含む。)」（13.1%）と続いています。

●母親のひとり親世帯では、「正社員・正規職員・会社役員」と回答した人の割合が46.5%となっています。

●父親は、「正社員・正規職員・会社役員」と回答した人の割合が最も高く、65.4%となっています。次いで、「自営業(家族従業者、内職、自由業、フリーランスを含む。)」（20.1%）、「パート・アルバイト・日雇い・非常勤職員」（1.2%）と続いています。

●「働いていない（専業主婦／主夫を含む。）」と回答した人の割合は母親、父親とも相対的に低いことが分かります。

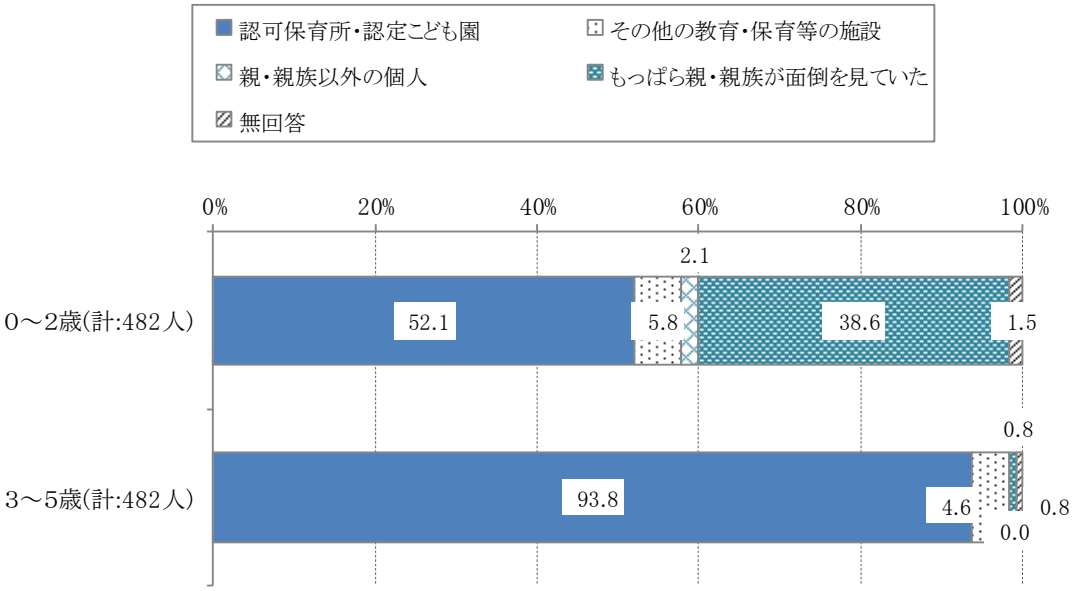
問１０　前の質問で「働いていない」と答えた場合、働いていない最も主な理由を教えてください。



●問９で、「働いていない」と答えた場合、働いていない最も主な理由をたずねたところ、母親は、「子育てを優先したいため」と回答した人の割合が最も高く、46.4%となっています。次いで、「働きたいが、希望する条件の仕事がないため」(21.4%)、「自分の病気や障害のため」（17.9%）と続いています。

●一方、父親は、「働きたいが、希望する条件の仕事がないため」と回答した人の割合が最も高く、50.0%となっています。次いで、「自分の病気や障害のため」(25.0%)、が続いています（基数が４人であることに注意）。

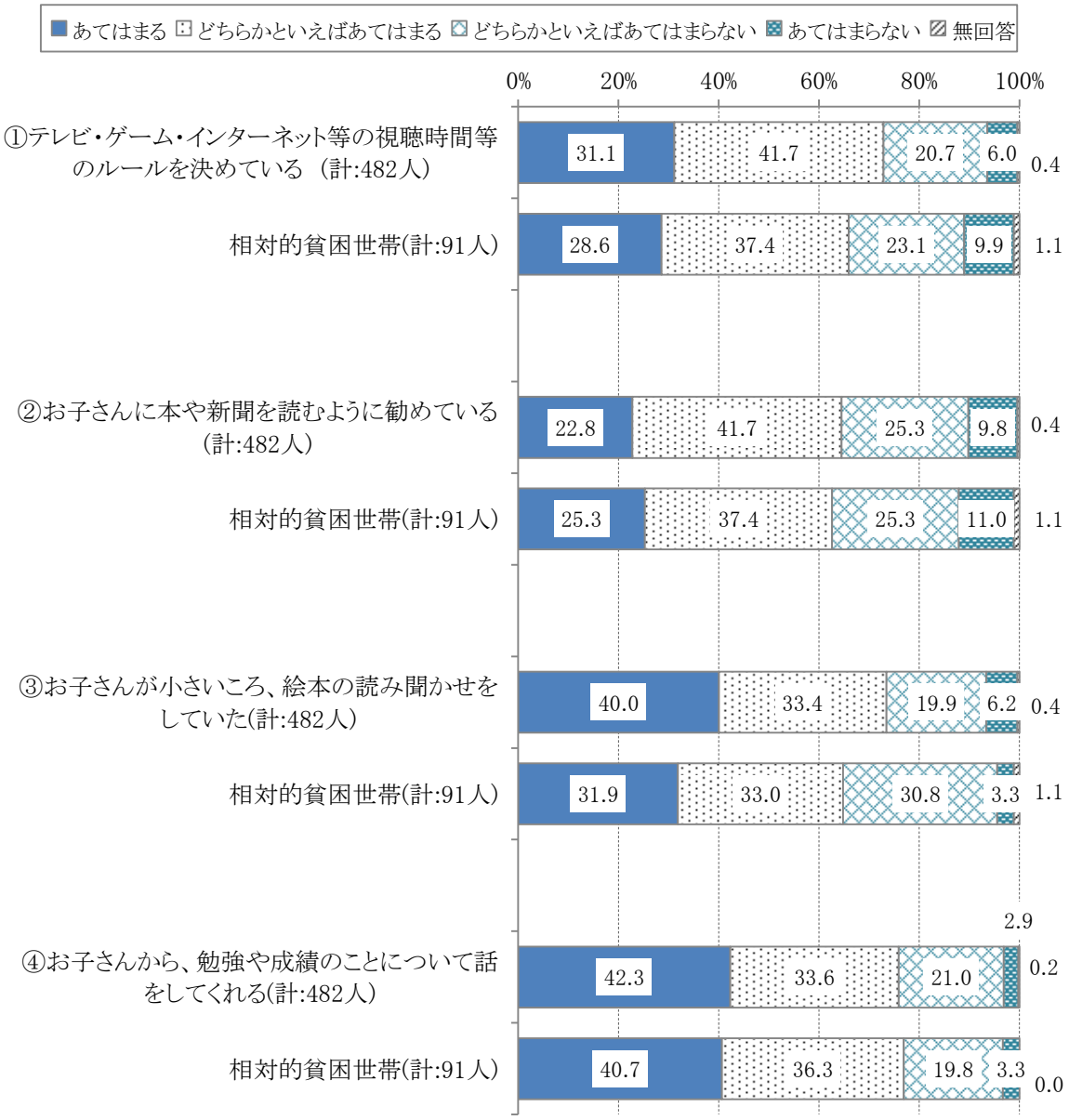
問１１・問１２　調査対象のお子さんが０～２歳、３～５歳の間に通っていた教育・保育施設等で最も主なもの（期間が長いもの）をお答えください。



●調査対象のお子さんが０～２歳の間に通っていた教育・保育施設等で最も主なもの（期間が長いもの）をたずねたところ、「認可保育所・認定こども園」と回答した人の割合が最も高く、52.1%となっています。次いで、「もっぱら親・親族が面倒を見ていた」（38.6%）、「その他の教育・保育等の施設」（5.8%）と続いています。

●調査対象のお子さんが３～５歳の間に通っていた教育・保育施設等で最も主なもの（期間が長いもの）をたずねたところ、「幼稚園・認可保育所・認定こども園」と回答した人の割合が最も高く、93.8%となっています。次いで、「その他の教育・保育等の施設」（4.6%）、「もっぱら親・親族が面倒を見ていた」（0.8%）と続いています。

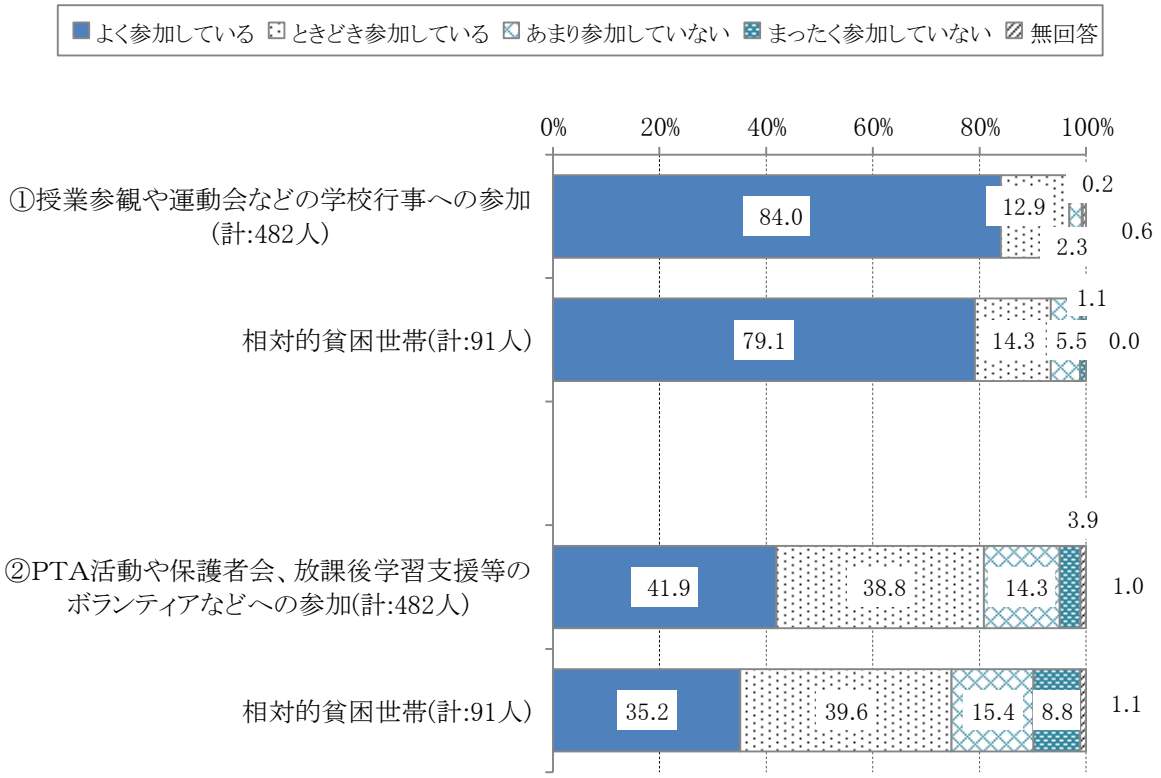
問１３　保護者の方とお子さんの関わり方について、次のようなことにどれくらい当てはまりますか。



●保護者の方とお子さんの関わり方については、全体と相対的貧困世帯の傾向が項目によって異なっています。「あてはまる」との回答の差が比較的大きく開いているのは「お子さんが小さいころ、絵本の読み聞かせをしていた」であり、全体では 40.0%の人が「あてはまる」と回答していた一方、相対的貧困世帯では 31.9%に留まっています。

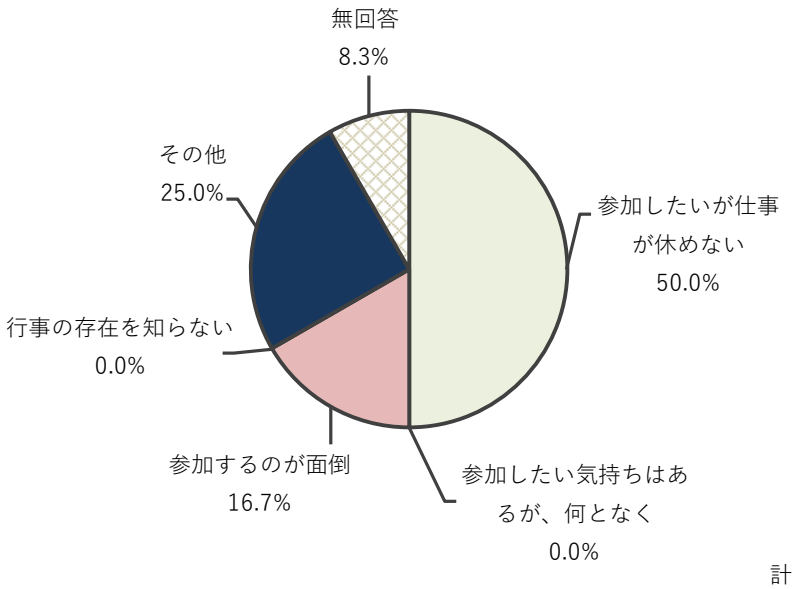
●「テレビ・ゲーム・インターネット等の視聴時間等のルールを決めている」「お子さんに本や新聞を読むように勧めている」の 2 項目は子どもの行動を保護者がコントロールするものであり、また、「お子さんから、勉強や成績のことについて話をしてくれる」は子どもからの行動であるのに比べ、絵本の読み聞かせは保護者が読み聞かせする絵本を選び（入手し）、一定の時間を確保した上で子どもと共にするものであり、他の項目に比べて影響が出やすかった可能性もあります。

問１４　あなたは、次のようなことをどの程度していますか。



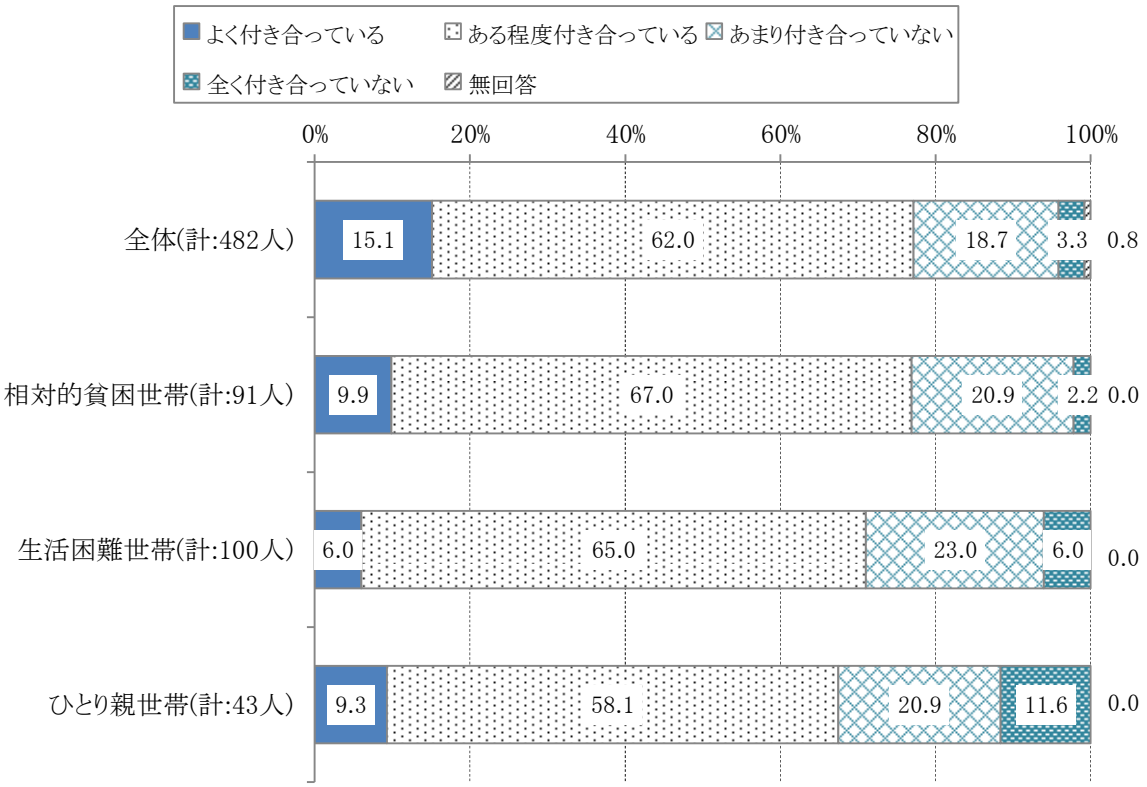
●「授業参観や運動会などの学校行事への参加」「ＰＴＡ活動や保護者会、放課後学習支援等のボランティアなどへの参加」については、いずれも相対的貧困世帯は参加率が低いことが分かります。その理由としては、「参加したいが仕事が休めない」と回答した人が半数（50.0%）となっており、行事等へ参加したくともその余裕が無い人が一定数存在することが分かります。

問１５　「あまり参加していない」「まったく参加していない」と回答した理由。



計：12人

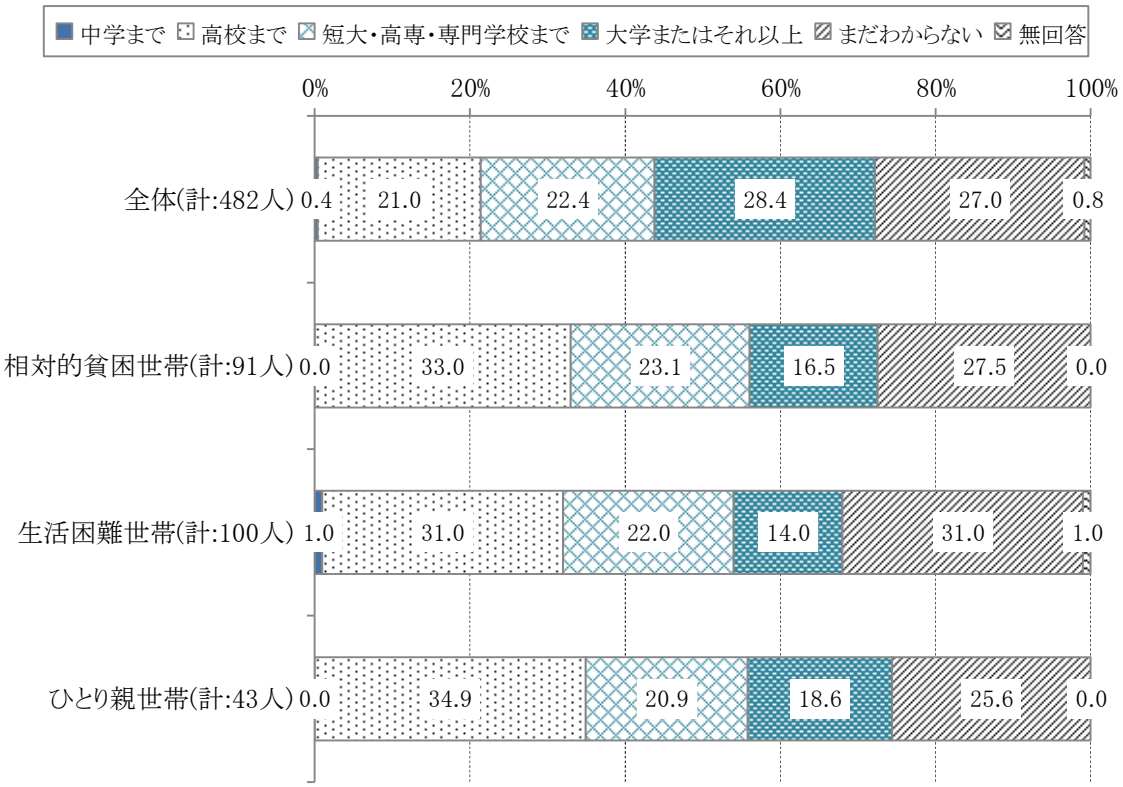
問１６　あなたは、地域での付き合いをどの程度していますか。



●地域での付き合いをどの程度していますかとたずねたところ、「よく付き合っている」「ある程度付き合っている」と回答した人の割合は 77.1%となっています。

●ひとり親世帯の「よく付き合っている」「ある程度付き合っている」と回答した人の割合は 67.4%となっており、他の属性に比べて地域との関わりが少ない傾向にあることが分かります。このことからも、ひとり親世帯は地域で孤立しやすいことが分かります。

問１７　お子さんは将来、現実的に見てどの段階まで進学すると思いますか。



●お子さんは将来、現実的に見てどの段階まで進学すると思うかとたずねたところ、「大学またはそれ以上」と回答した人の割合は 28.4%となっています。

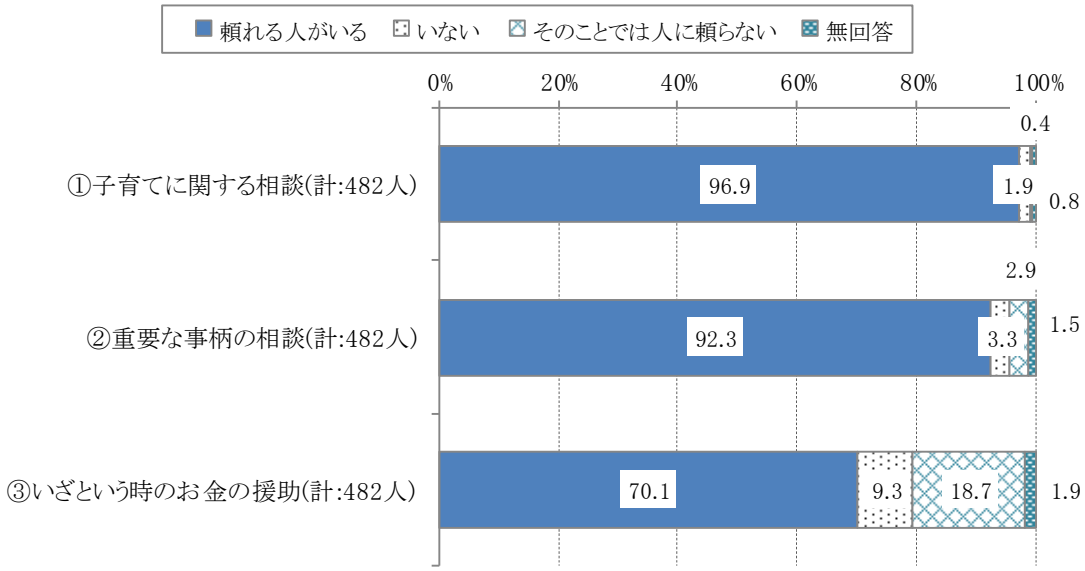
●その理由として、「お子さんがそう希望しているから」と回答した人が最も多く、39.4%となっています。次いで、「一般的な進路だと思うから」（30.7%）、「お子さんの学力から考えて」（27.3%）と続いています。

●「家庭の経済的な状況から考えて」と回答した人は全体では 14.9%ですが、相対的貧困世帯では 27.3%、生活困難世帯では 36.8%、ひとり親世帯では 31.3%となっており、貧困等が子どもの学歴に影響を与えることでいわゆる「貧困の連鎖（低所得世帯の子ども達が将来低所得者になる可能性が高く、貧困から抜け出すことができないこと）」が生じやすい実態がみてとれます。

問１８　前問で１～４と答えた場合、その理由は何ですか。

	お子さんがそう希望しているから	一般的な進路だと思うから	お子さんの学力から考えて	家庭の経済的な状況から考えて	その他	特に理由はない	無回答
全体(計:348人)	39.4	30.7	27.3	14.9	4.3	8.3	1.4
相対的貧困世帯(計:66人)	39.4	27.3	24.2	27.3	1.5	9.1	3.0
生活困難世帯(計:68人)	35.3	11.8	36.8	36.8	4.4	10.3	0.0
ひとり親世帯(計:32人)	37.5	28.1	28.1	31.3	3.1	9.4	3.1

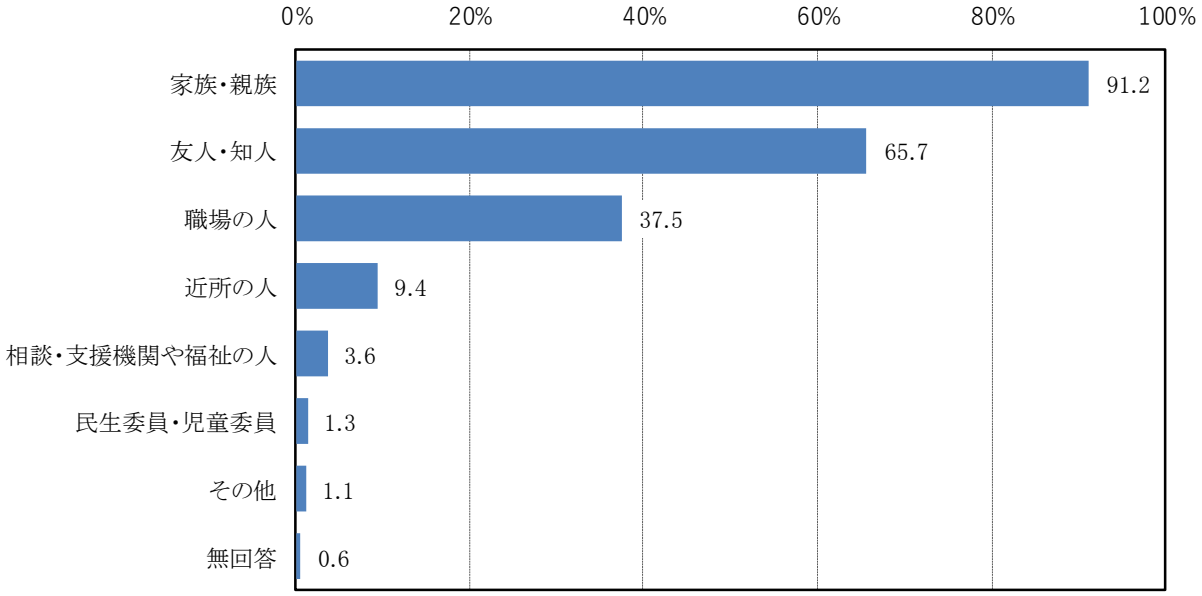
問１９　あなたは次に挙げる事柄で頼れる人はいますか。



●頼れる人の有無をたずねたところ、「頼れる人がいる」と回答した人の割合が最も高いのは「子育てに関する相談」であり、96.9%となっています。次いで、「重要な事柄の相談」（92.3%）、「いざという時のお金の援助」（70.1%）と続いています。

●「いざという時のお金の援助」については、頼れる人が「いない」と回答した人が9.3%と比較的多いことに加え、「そのことで人に頼らない」と回答した人の割合が18.7%存在することが特徴的です。お金に関係することで以後の人間関係が失われてしまったり、身近な人に頼ることに精神的な抵抗を感じたりする人が多いことが窺えます。このことから、緊急時に経済的な支援をすることは自助、互助以外の手段を用意しておくことが大切であることが分かります。

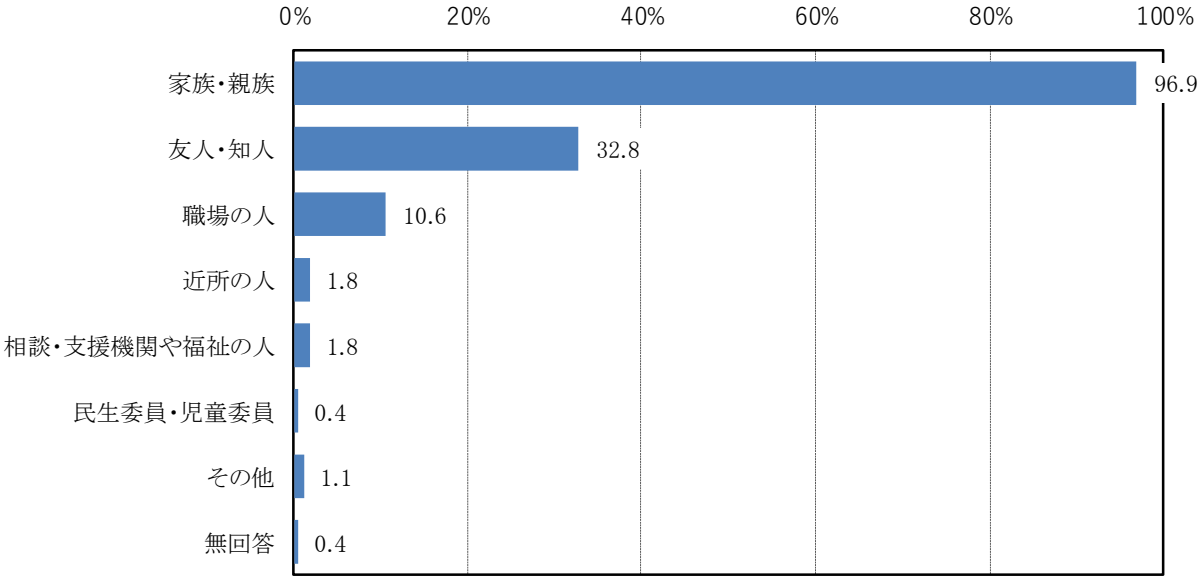
子育てに関する相談で頼れる人はだれですか。



計：467人

●「頼れる人がいる」場合に、その人はだれかとたずねたところ、「家族・親族」と回答した人が最も多く、91.2%となっています。次いで、「友人・知人」（65.7%）、「職場の人」（37.5%）と続いています。

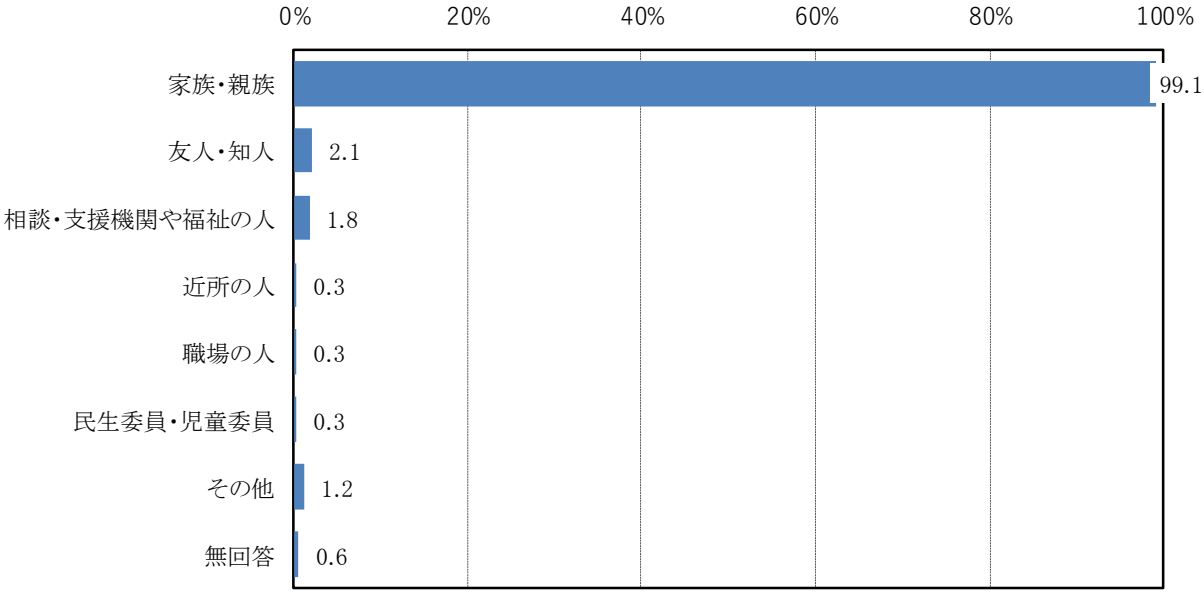
重要な事柄の相談で頼れる人はだれですか。



計：445人

●「頼れる人がいる」場合に、その人はだれかとたずねたところ、「家族・親族」と回答した人が最も多く、96.9%となっています。次いで、「友人・知人」（32.8%）、「職場の人」（10.6%）と続いています。

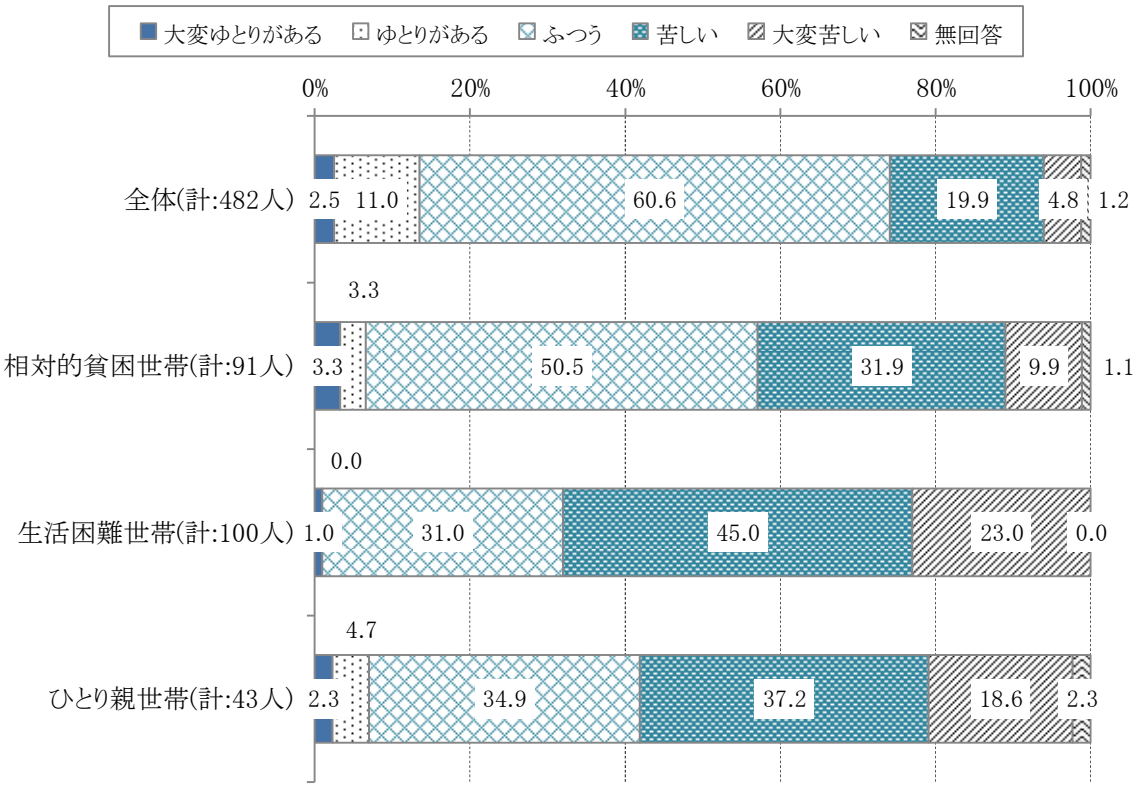
いざという時のお金の援助で頼れる人はだれですか。



計：338人

●「頼れる人がいる」場合に、その人はだれかとたずねたところ、「家族・親族」と回答した人が最も多く、99.1%となっています。次いで、「友人・知人」（2.1%）、「相談・支援機関や福祉の人」（1.8%）と続いています。

問２０　あなたは、現在の暮らしの状況をどのように感じていますか。

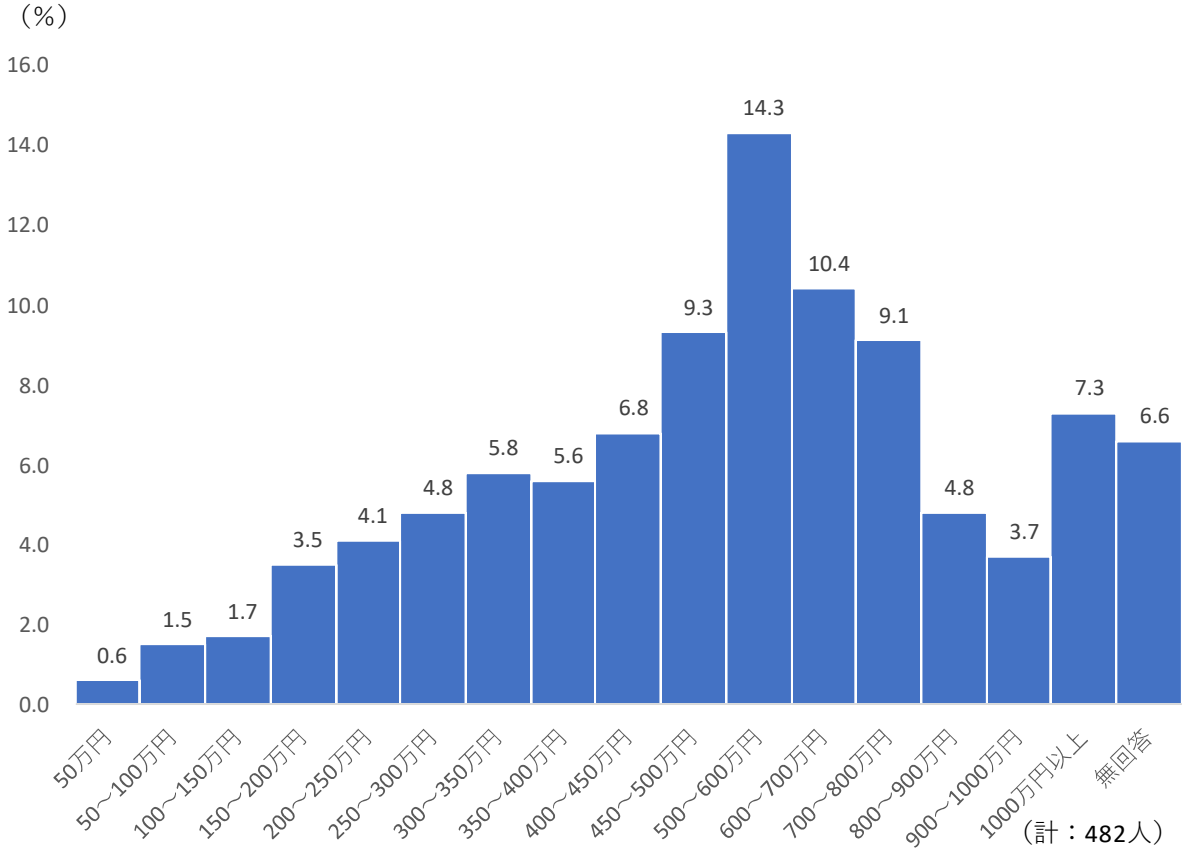


●現在の暮らしの状況をどのように感じているかとたずねたところ、「苦しい」または「大変苦しい」と回答した人の割合は 24.7%となっています。

●現在の暮らしの状況が「苦しい」または「大変苦しい」と回答した人の割合は、生活困難世帯が 68.0%と突出して高くなっているのは、生活困難世帯を定義した際の要素として主観的な生活困難度（現在の暮らしの状況に対して「大変苦しい」と回答した世帯）を含めたためと考えられます。

●裏返すと、相対的貧困世帯であっても、現在の暮らしの状況が苦しいと認識していない世帯もあります。相対的貧困世帯のうち、「大変ゆとりがある」「ゆとりがある」と回答した世帯は 6.6%存在し、このことからも、所得のみでは貧困の実態を十分に捉えられるとは限らないことが分かります。

問２１　世帯全体のおおよその年間収入(税込)はいくらですか。



●世帯全体のおおよその年間収入(税込)をたずねたところ、「500～600 万円未満」と回答した人が最も多く、14.3%となっています。次いで、「600～700 万円未満」（10.4%）、「450～500 万円未満」（9.3%）と続いています。

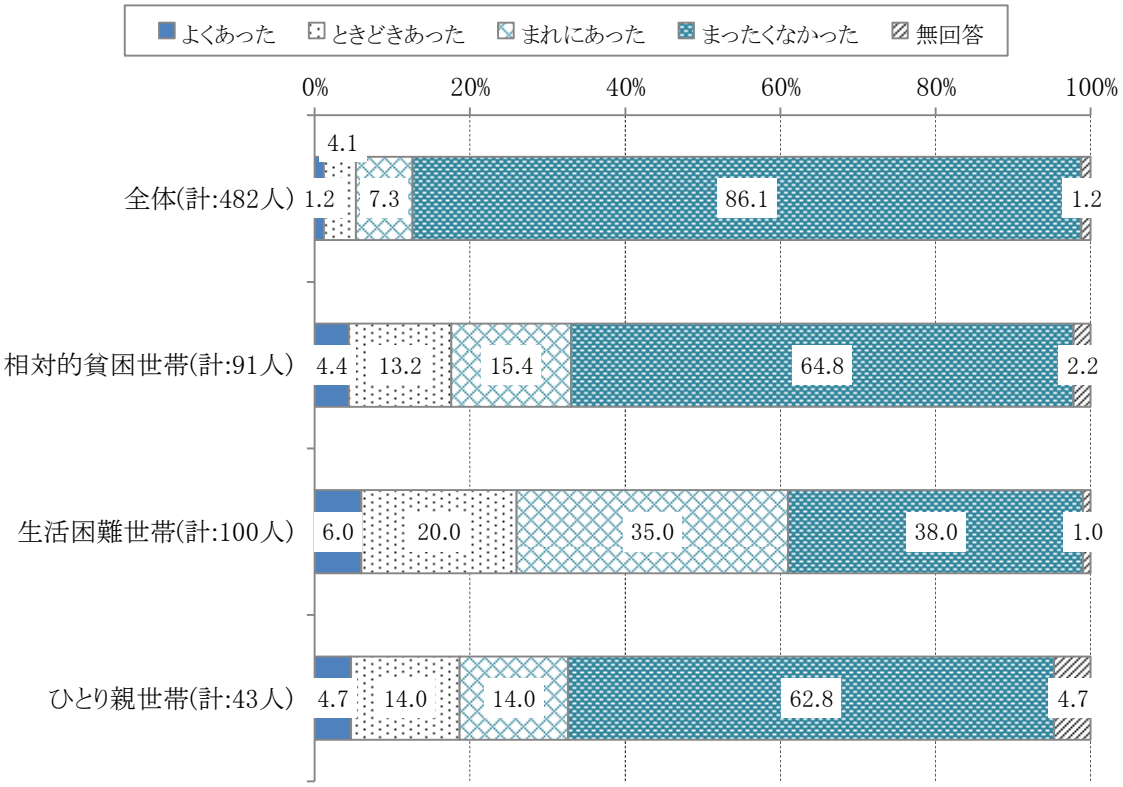
●世帯収入だけでは貧困の状況を把握することができません。厚生労働省が公表している相対的貧困世帯の算出方法は「等価可処分所得」（世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得）を用いたものとなります（下記算出式を参照）。

相対的貧困世帯　＝　等価可処分所得※の中央値の半分に満たない世帯

※　等価可処分所得：世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得。

本調査において、保護者用調査「問 3」で世帯人数を、保護者用調査「問 21」で可処分所得についての回答を得ていることから、両設問の結果を用いて等価可処分所得を算出しました。わが国の等価世帯所得の中央値は 253.4 万円（厚生労働省「2019 年国民生活基礎調査」）ことから、その半分にあたる 126.7 万円が相対的貧困の定義上の水準となります。

問２２　あなたの世帯では、過去１年の間に、お金が足りなくて、家族が必要とする食料が買えないことがありましたか。ただし、嗜好品は含みません。

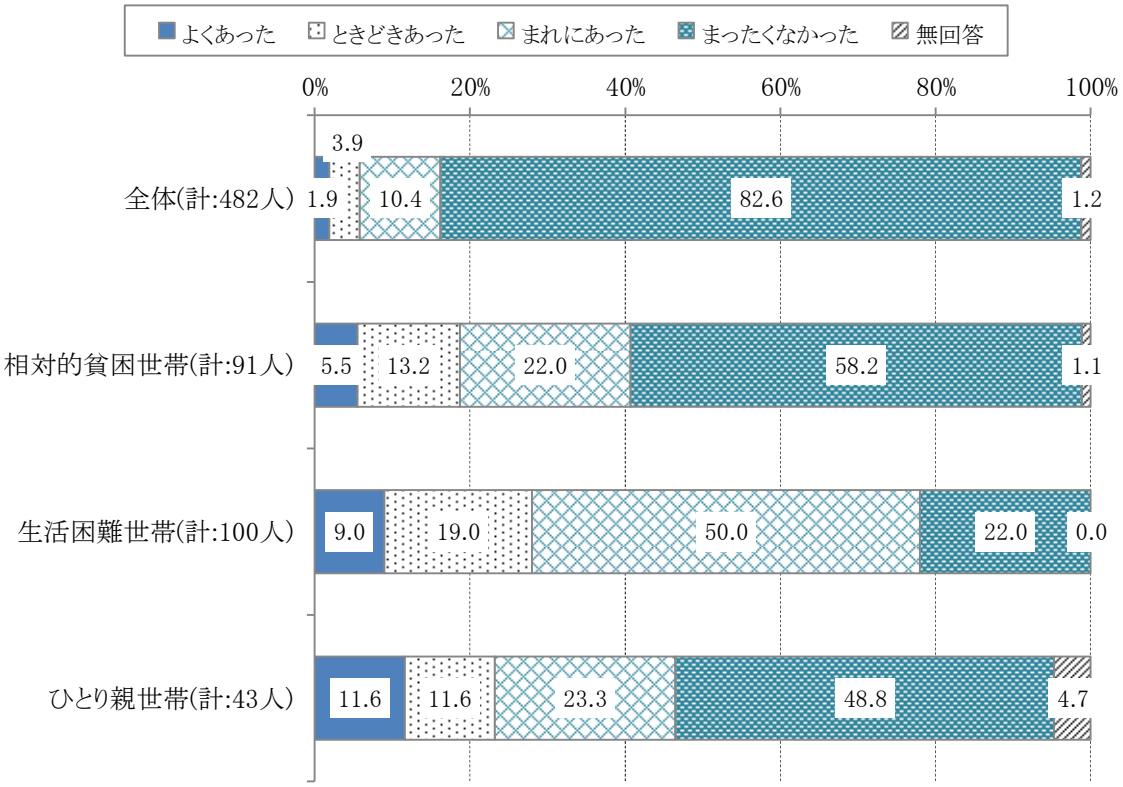


●本調査では、生活困難世帯を定義する際にいわゆる剥奪指標（社会の中で生活に必要と判断される、衣食住といった物品やサービス、社会的活動などの項目を選定し、その充足度を指標化したもの）として本設問を位置付けていいます。

●過去１年の間に、お金が足りなくて、家族が必要とする食料が買えないことがあったかとたずねたところ、「よくあった」または「ときどきあった」と回答した人の割合は 5.3%となっています。

●お金が足りなくて、家族が必要とする食料が買えないことがあった人の割合は、相対的貧困世帯よりも生活困難世帯の方が高くなっています。

問２３　あなたの世帯では、過去１年の間に、お金が足りなくて、家族が必要とする衣服が買えないことがありましたか。ただし、高価な衣服や貴金属・宝飾品は含みません。

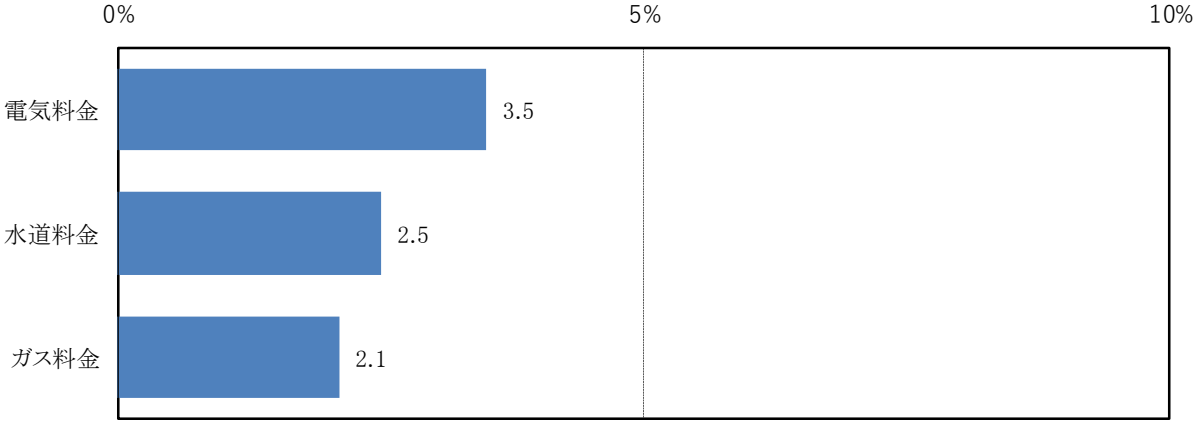


●本調査では、前問同様、生活困難世帯を定義する際にいわゆる剥奪指標（社会の中で生活に必要と判断される、衣食住といった物品やサービス、社会的活動などの項目を選定し、その充足度を指標化したもの）として本設問を位置付けていいます。

●過去１年の間に、お金が足りなくて、家族が必要とする衣服が買えないことがあったかとたずねたところ、「よくあった」または「ときどきあった」と回答した人の割合は 5.8%となっています。

●お金が足りなくて、家族が必要とする衣服が買えないことがあった人の割合は相対的貧困世帯よりも生活困難世帯の方が高くなっており、78.0%となっています。

問２４　あなたの世帯では、過去１年の間に、以下の料金について、経済的な理由で未払いになったことがありましたか。



計：482人

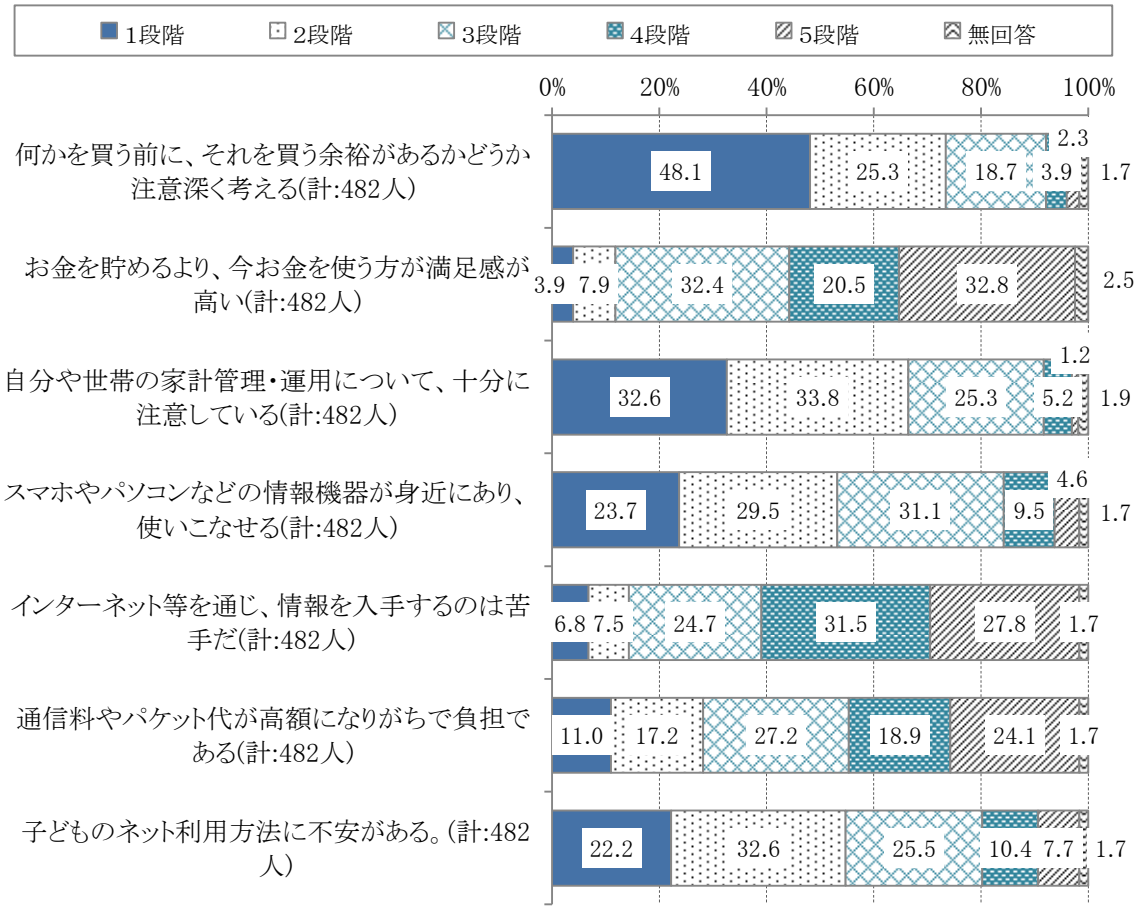
●過去１年の間に、公共料金について、経済的な理由で未払いになったことがありましたかとたずねたところ、「電気料金」の未払い経験があったと回答した人が最も多く、3.5%となっています。次いで、「水道料金」（2.5%）、「ガス料金」（2.1%）と続いています。

●「子供の貧困対策に関する大綱」（令和元年 11 月）には「子供の貧困に関する指標」として、経済的な理由で公共料金が未払いになった割合が挙げられています。平成 29 年度「生活と支え合いに関する調査」の結果と比較して、本市の割合はすべての指標で国直近値を下回っています。

		国※	本調査
全世帯	電気料金	5.3%	3.5%
	水道料金	5.3%	2.5%
	ガス料金	6.2%	2.1%
ひとり親	電気料金	14.8%	9.3%
	水道料金	13.8%	9.3%
	ガス料金	17.2%	11.6%

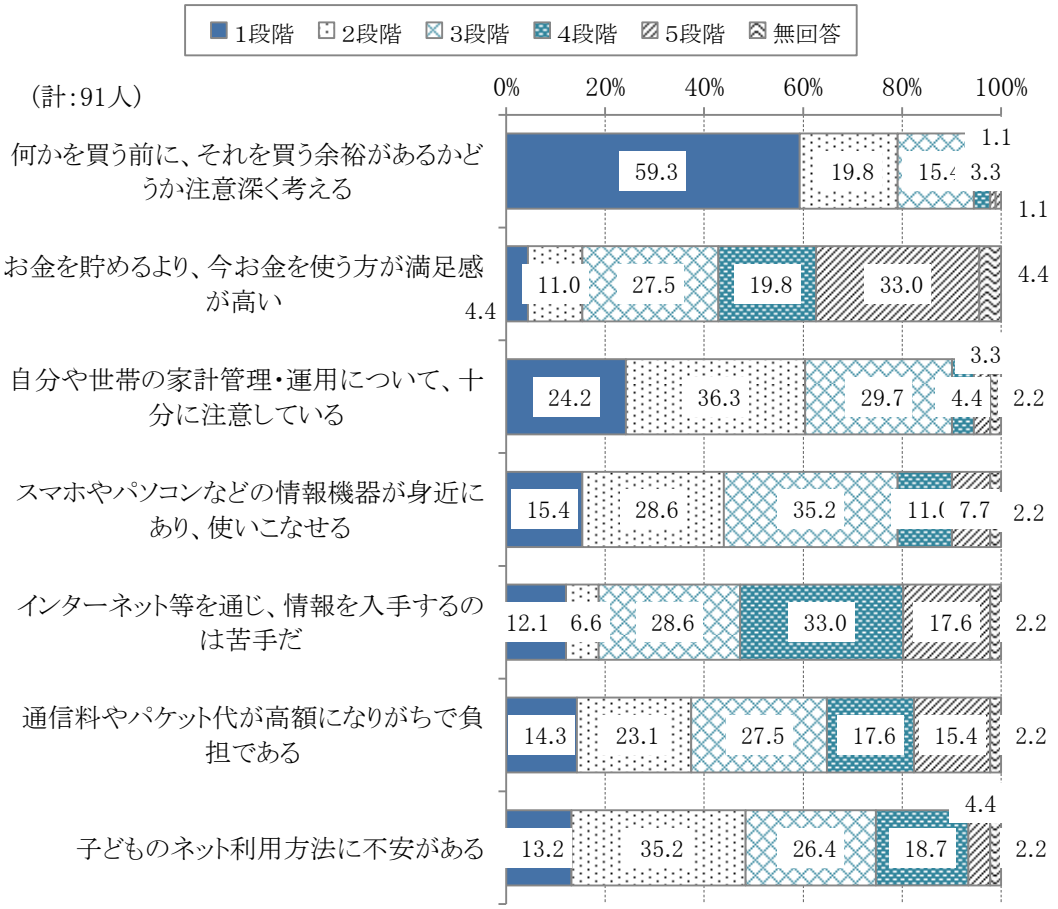
※生活と支え合いに関する調査（特別集計：平成 29 年）

問２５　次の点は、あなたご自身にどの程度あてはまるか、その程度を５段階の中から選んでください。



●次の点は、あなたご自身にどの程度あてはまるか、その程度を５段階の中から選んでいただいたところ、「1 段階」（あてはまる度合いが最も高い）の割合が最も高かったのは「何かを買う前に、それを買う余裕があるかどうか注意深く考える」であり、48.1%でした。次いで、「自分や世帯の家計管理・運用について、十分に注意している」（32.6%）、「スマホやパソコンなどの情報機器が身近にあり、使いこなせる」（23.7%）と続いています。

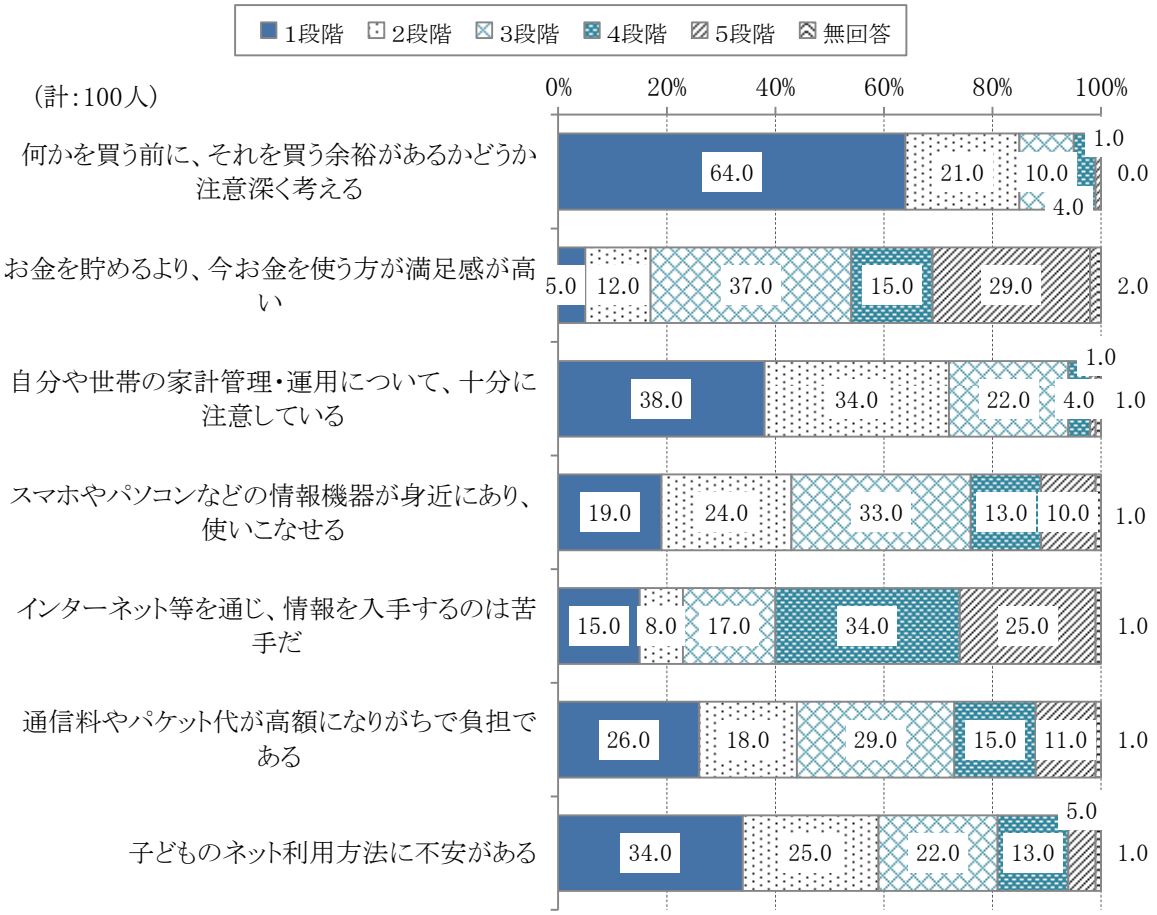
（相対的貧困世帯）



●相対的貧困世帯では、「1 段階」（あてはまる度合いが最も高い）の割合が最も高かったのは「何かを買う前に、それを買う余裕があるかどうか注意深く考える」であり、59.3%でした。次いで、「自分や世帯の家計管理・運用について、十分に注意している」（24.2%）、「スマホやパソコンなどの情報機器が身近にあり、使いこなせる」（15.4%）と続いています。

●全体と比較すると、「何かを買う前に、それを買う余裕があるかどうか注意深く考える」、「お金を貯めるより、今お金を使う方が満足感が高い」、「インターネット等を通じ、情報を入手するのは苦手だ」、「通信料やパケット代が高額になりがちで負担である」の「1 段階」（あてはまる度合いが最も高い）の割合が高くなっています。

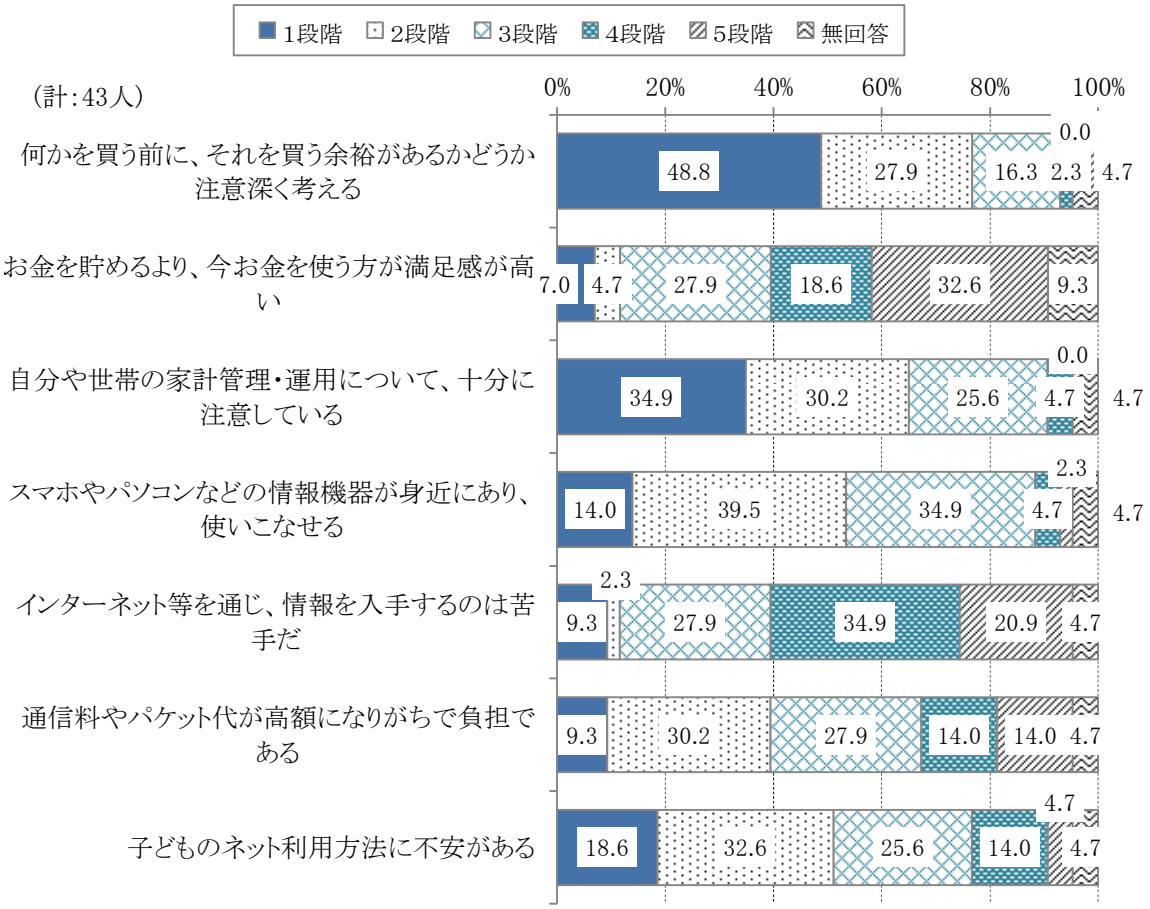
（生活困難世帯）



●生活困難世帯では、「1 段階」（あてはまる度合いが最も高い）の割合が最も高かったのは「何かを買う前に、それを買う余裕があるかどうか注意深く考える」であり、64.0%でした。次いで、「自分や世帯の家計管理・運用について、十分に注意している」（38.0%）、「子どものネット利用方法に不安がある」（34.0%）と続いています。

●全体と比較すると、「スマホやパソコンなどの情報機器が身近にあり、使いこなせる」を除く全ての項目で、「1 段階」（あてはまる度合いが最も高い）の割合が高くなっています。

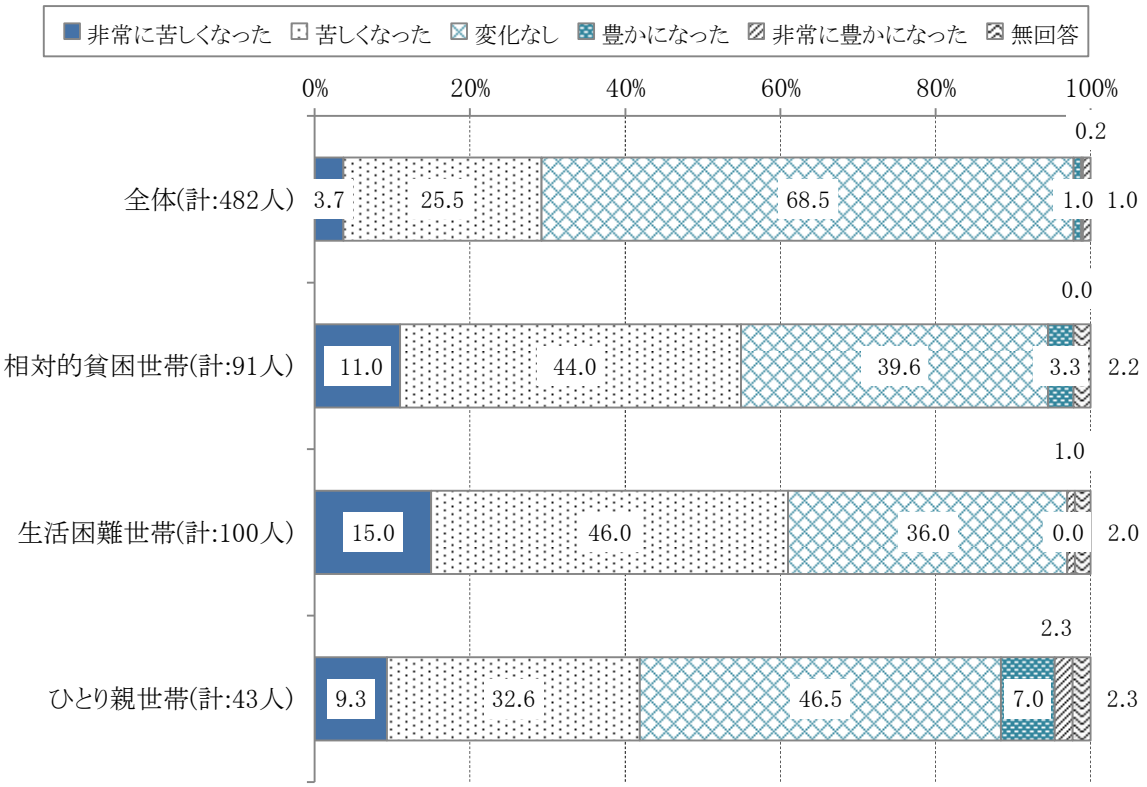
（ひとり親世帯）



●ひとり親世帯では、「1 段階」（あてはまる度合いが最も高い）の割合が最も高かったのは「何かを買う前に、それを買う余裕があるかどうか注意深く考える」であり、48.8%でした。次いで、「自分や世帯の家計管理・運用について、十分に注意している」（22.1%）、「子どものネット利用方法に不安がある」（17.6%）と続いています。

●全体と比較すると、「何かを買う前に、それを買う余裕があるかどうか注意深く考える」、「お金を貯めるより、今お金を使う方が満足感が高い」、「自分や世帯の家計管理・運用について、十分に注意している」、「インターネット等を通じ、情報を入手するのは苦手だ」の「1 段階」（あてはまる度合いが最も高い）の割合が高くなっています。

問２６　新型コロナウイルスの影響により家計はどう変化しましたか。

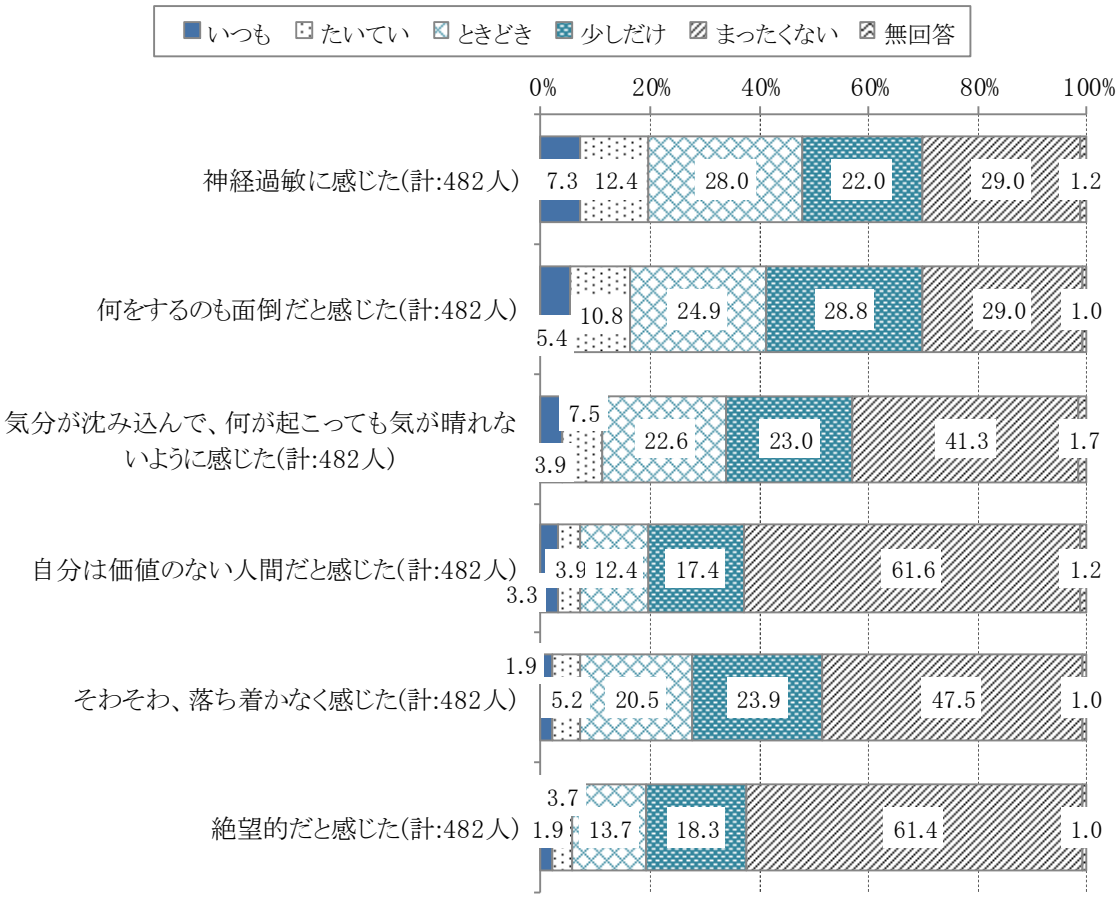


●令和３年９月現在、新型コロナウイルスの感染が収束しておらず、いわゆるコロナ禍の長期化により市民の生活や経済への影響が拡大することも予想されます。福岡県においても緊急事態宣言が繰り返し発出され、飲食店などが休業や時短営業を迫られることにより、倒産・閉店や、早期退職、雇い止め等によって、そこで働いていた従業員の収入が途絶えたり、減ったりすることで生活が厳しくなっている状況があります。

●本調査でも、新型コロナウイルスの影響により家計はどう変化したかとたずねたところ、「苦しくなった」又は「非常に苦しくなった」と回答した人の割合は 29.2%となっています。「苦しくなった」又は「非常に苦しくなった」と回答した人の割合は相対的貧困世帯では 55.0%、生活困難世帯では 61.0%、ひとり親世帯では 41.9%となっており、全体に比べて新型コロナウイルスの影響をより強く受けていることが分かります。

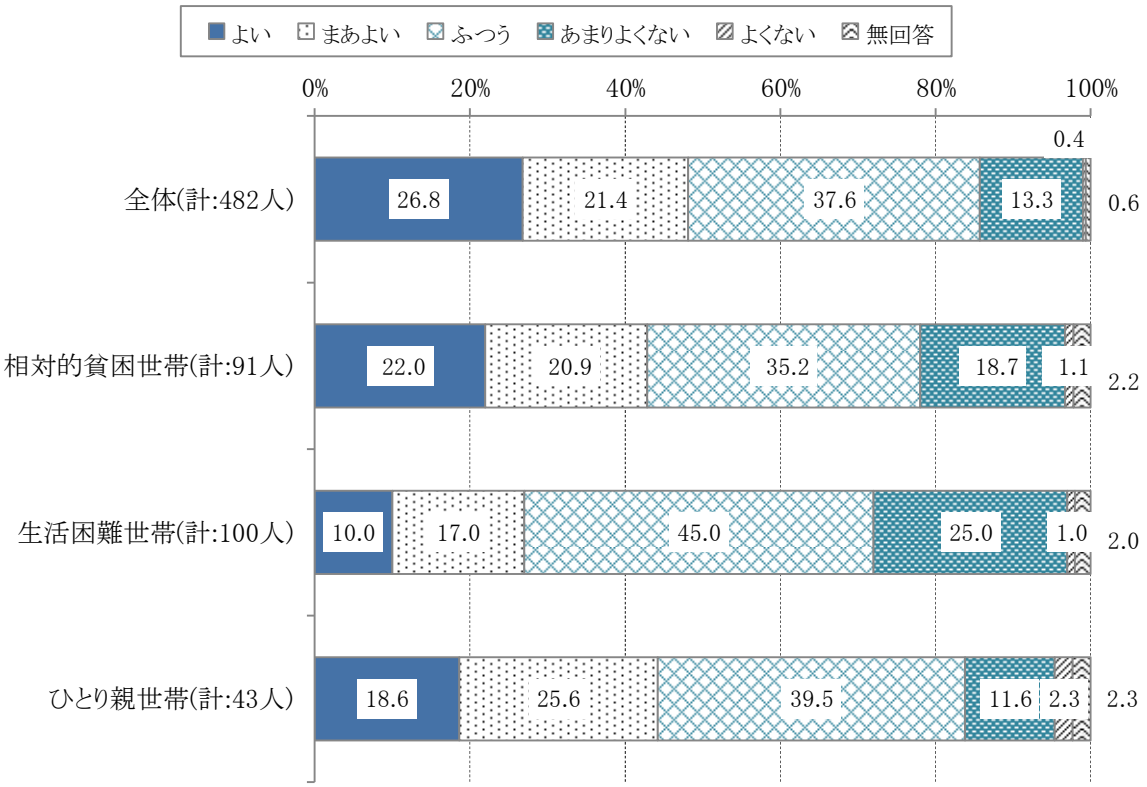
●女性、フリーランス、非正規雇用、低所得層ほど、感染拡大により大きな経済的影響を受けており、世帯の家計収入の面で苦境に陥ることで貧困問題が拡大・深刻化している状況がみてとれます。

問２７　次の項目について、この１か月間のあなたの気持ちはどのようでしたか。



●この１か月間の気持ちについて、「いつも」又は「たいてい」と回答した人の割合が高いのは「神経過敏に感じた」であり、19.7%となっています。次いで、「何をするのも面倒だと感じた」（16.2%）、「気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じた」（11.4%）が続いています。

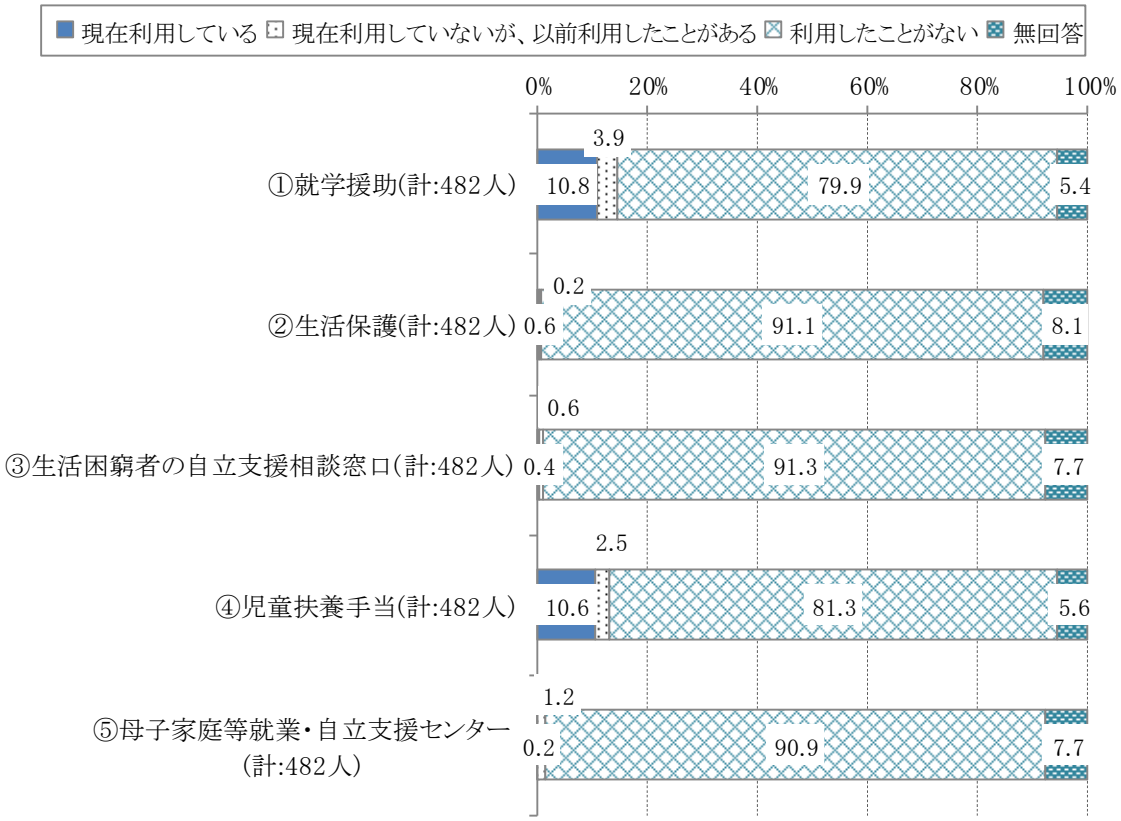
問２８　あなたの現在の健康状態は、いかがですか。



●現在の健康状態は、いかがですかとたずねたところ、「あまりよくない」又は「よくない」と回答した人の割合は 13.7%となっています。

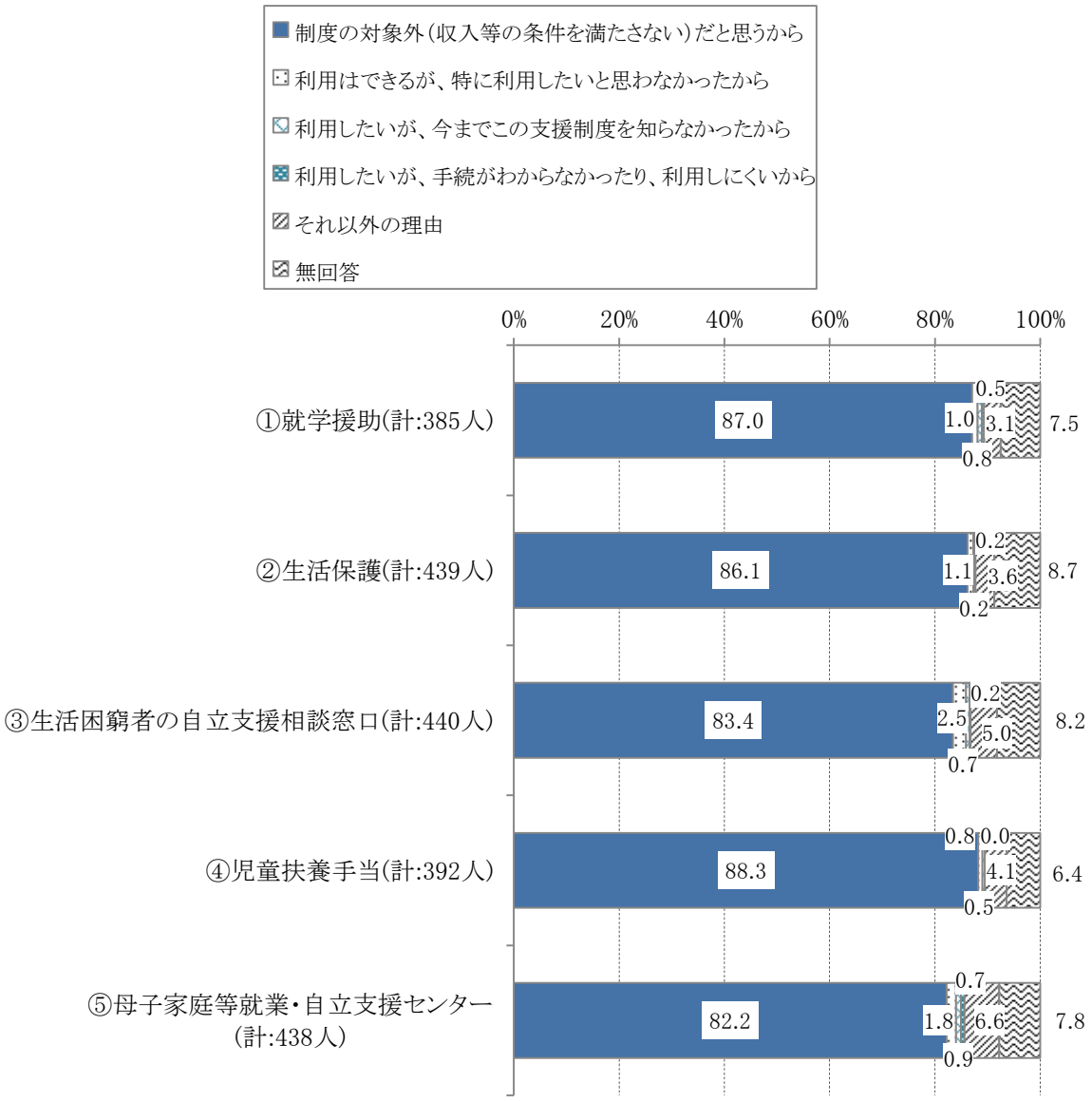
●「あまりよくない」又は「よくない」と回答した人の割合は、相対的貧困世帯では 19.8%、生活困難世帯では 26.0%、ひとり親世帯では 13.9%となっており、特に相対的貧困世帯、生活困難世帯の人の健康状態が全体に比べて良くない割合が高いことが分かります。

問２９　あなたのご家庭では、以下の支援制度をこれまでに利用したことがありますか。



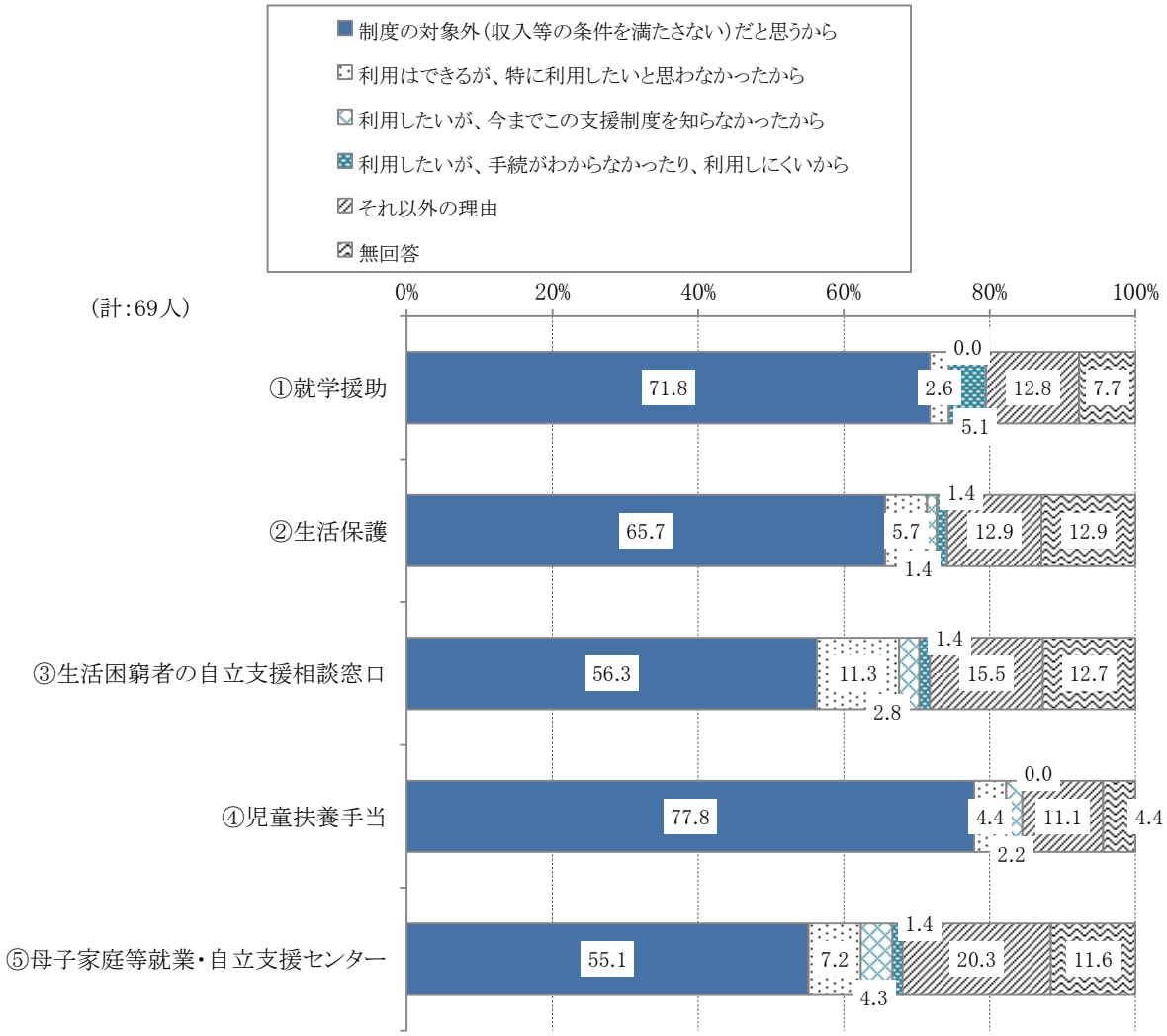
●支援制度の利用経験をたずねたところ、最も利用経験が高かったのは「就学援助」であり、14.7%となっています。次いで、「児童扶養手当」（13.1%）、「母子家庭等就業・自立支援センター」（1.4%）と続いています。

問２９　また、「利用したことがない」場合、その理由は何ですか。



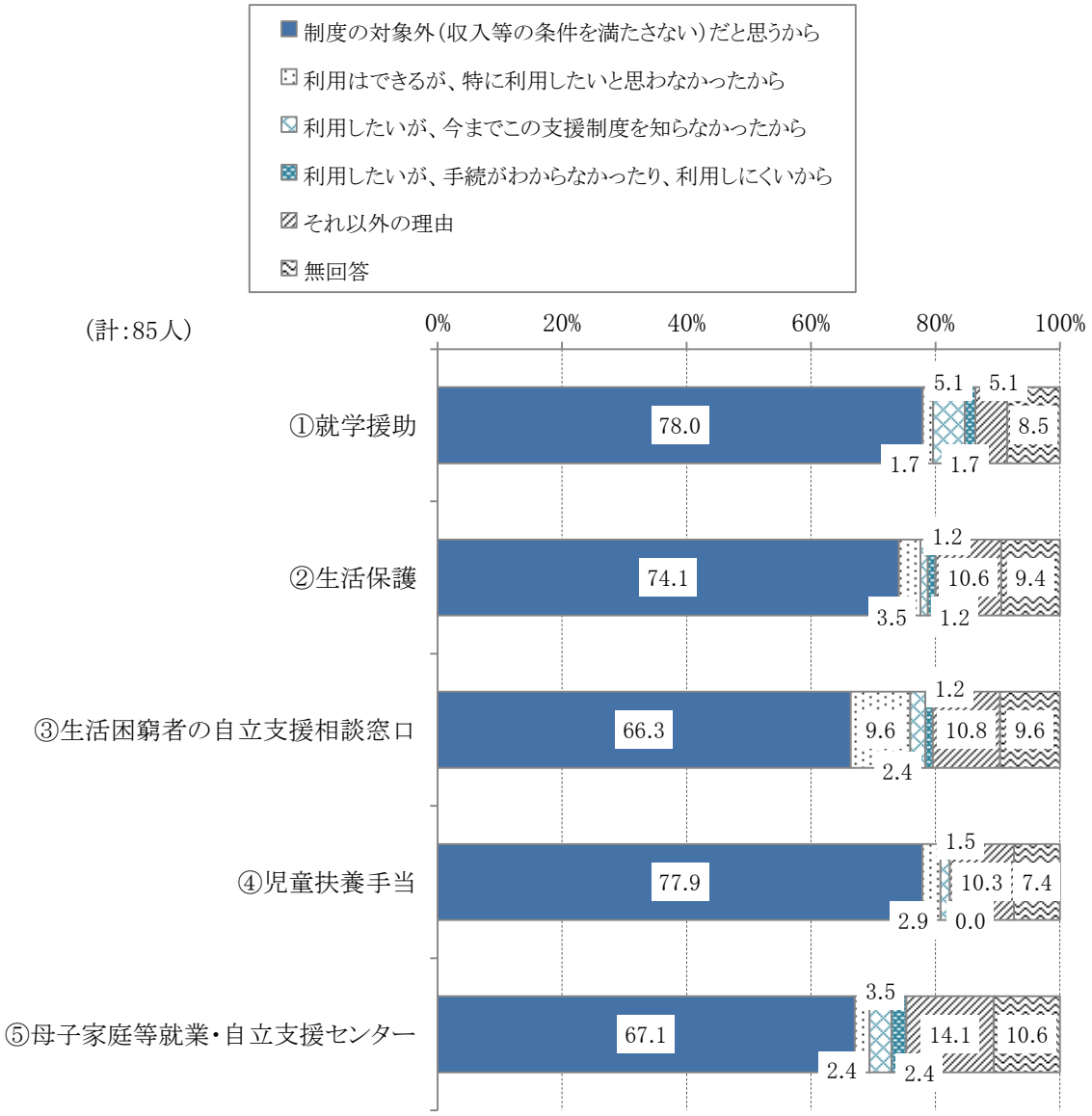
●制度を利用したことがない理由をたずねたところ、ほとんどの人が「制度の対象外（収入等の条件を持たさない）だと思うから」と回答しています。

（相対的貧困世帯）



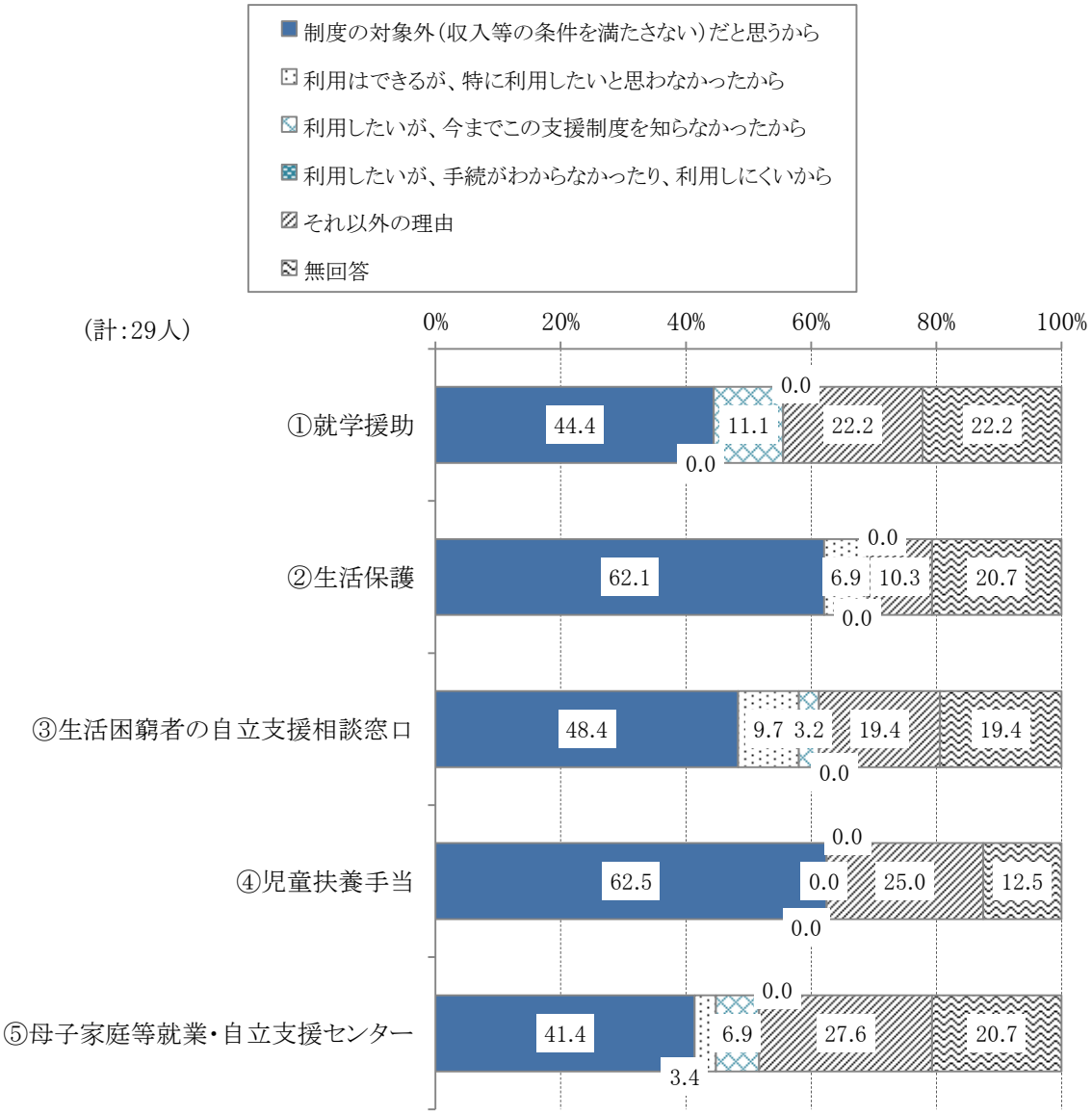
●全体と「利用意向者」（「利用したいが、今までこの支援制度を知らなかったから」と「利用したいが、手続きがわからなかったり、利用しにくいから」の割合の和）を比較すると、全ての項目で割合が高くなっています。

（生活困難世帯）



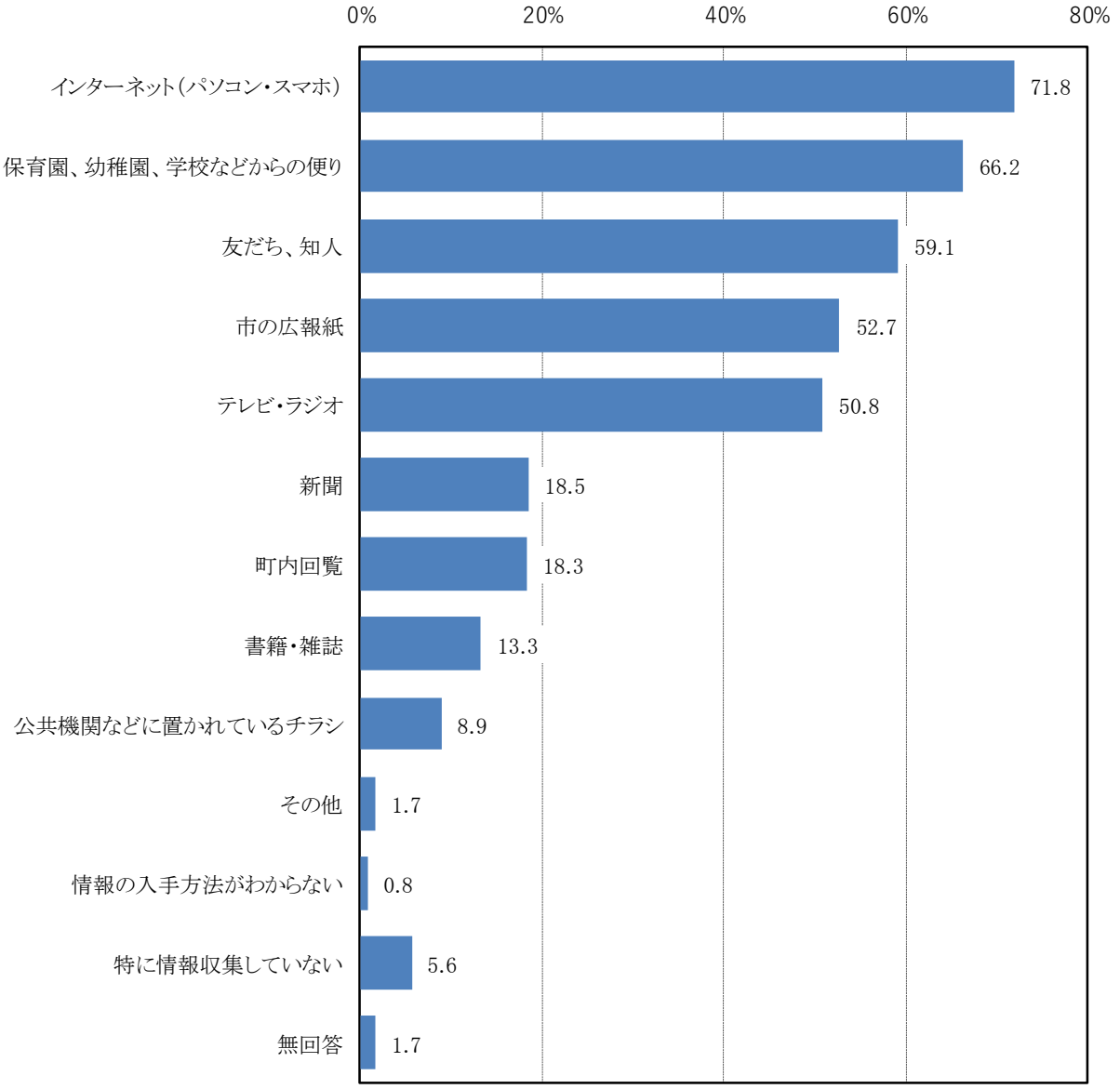
●全体と「利用意向者」（「利用したいが、今までこの支援制度を知らなかったから」と「利用したいが、手続きがわからなかったり、利用しにくいから」の割合の和）を比較すると、全ての項目で割合が高くなっています。

（ひとり親世帯）



●全体と比較すると、「①就学援助」、「③生活困窮者の自立支援相談窓口」、「⑤母子家庭等就業・自立支援センター」「利用したいが、今までこの支援制度を知らなかったから」の割合が高くなっています。

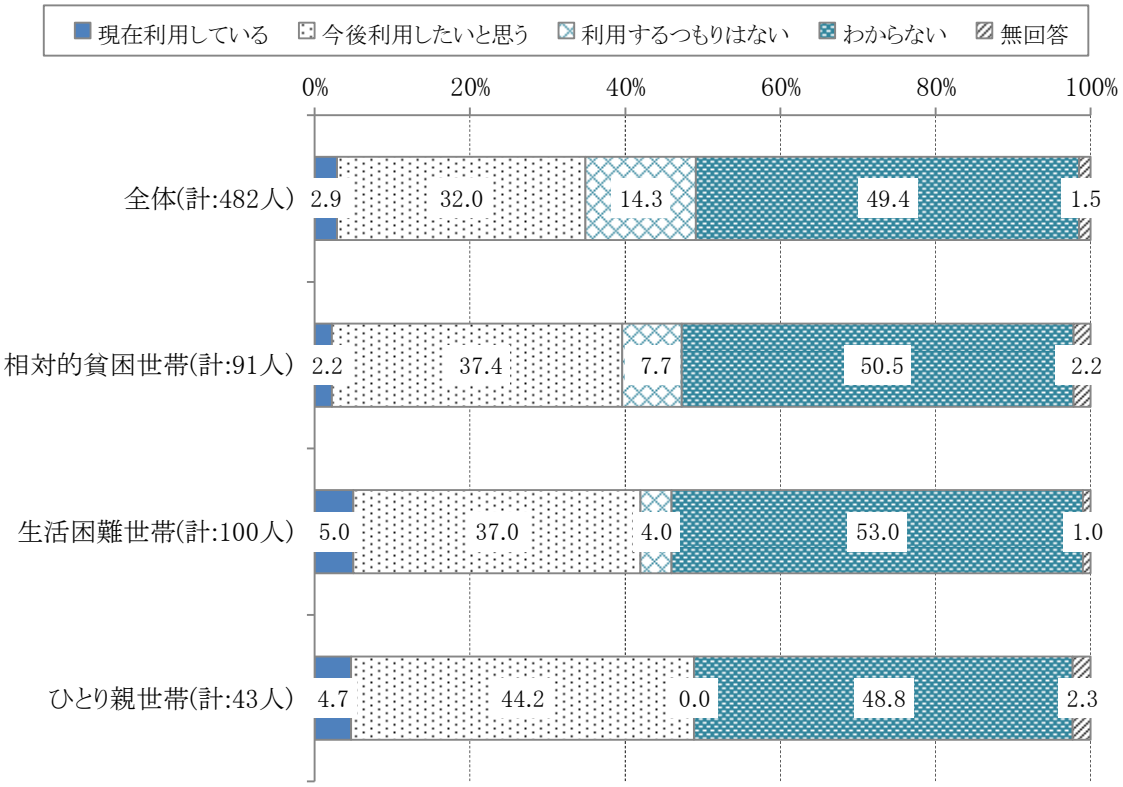
問３０　あなたの世帯では、子育てに関する情報をどのような方法で入手していますか。



計：482人

●子育てに関する情報をどのような方法で入手していますかとたずねたところ、「インターネット（パソコン・スマホ）」と回答した人が最も多く、71.8%となっています。次いで、「保育園、幼稚園、学校などからの便り」（66.2%）、「友だち、知人」（59.1%）と続いています。

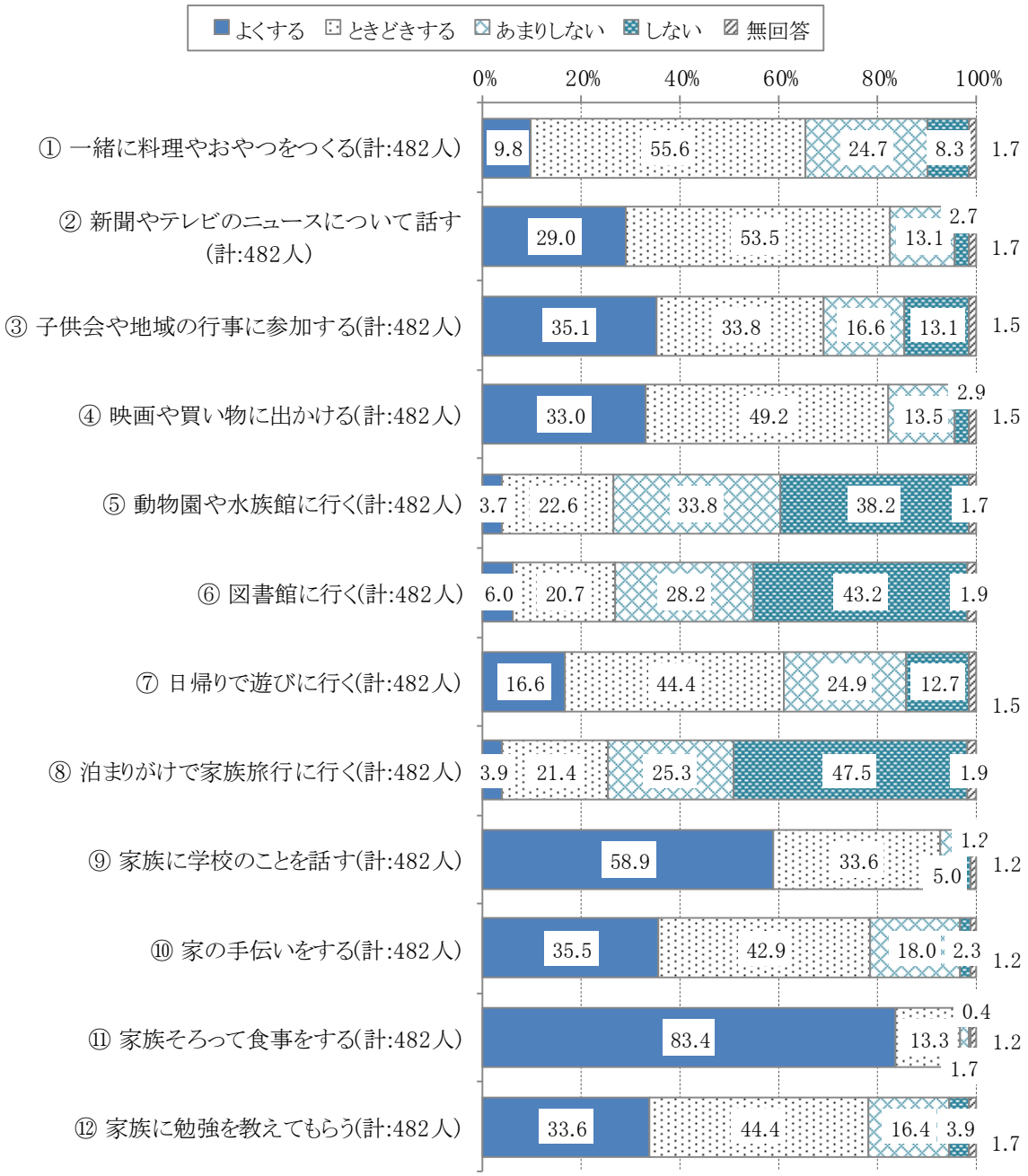
問３１　お子さんについて、無料の学習支援制度（学習の手助けなど）を利用したいと思いますか。



●お子さんについて、無料の学習支援制度（学習の手助けなど）を利用したいと思いますかとたずねたところ、「わからない」と回答した人の割合が最も高く、49.4%となっています。次いで、「今後利用したいと思う」（32.0%）、「利用するつもりはない」（14.3%）と続いています。

●「今後利用したいと思う」と回答した人の割合は、相対的貧困世帯が 37.4%、生活困難世帯が 37.0%、ひとり親世帯が 44.2%であり、いずれも全体の傾向と比べて高くなっていることが分かります。

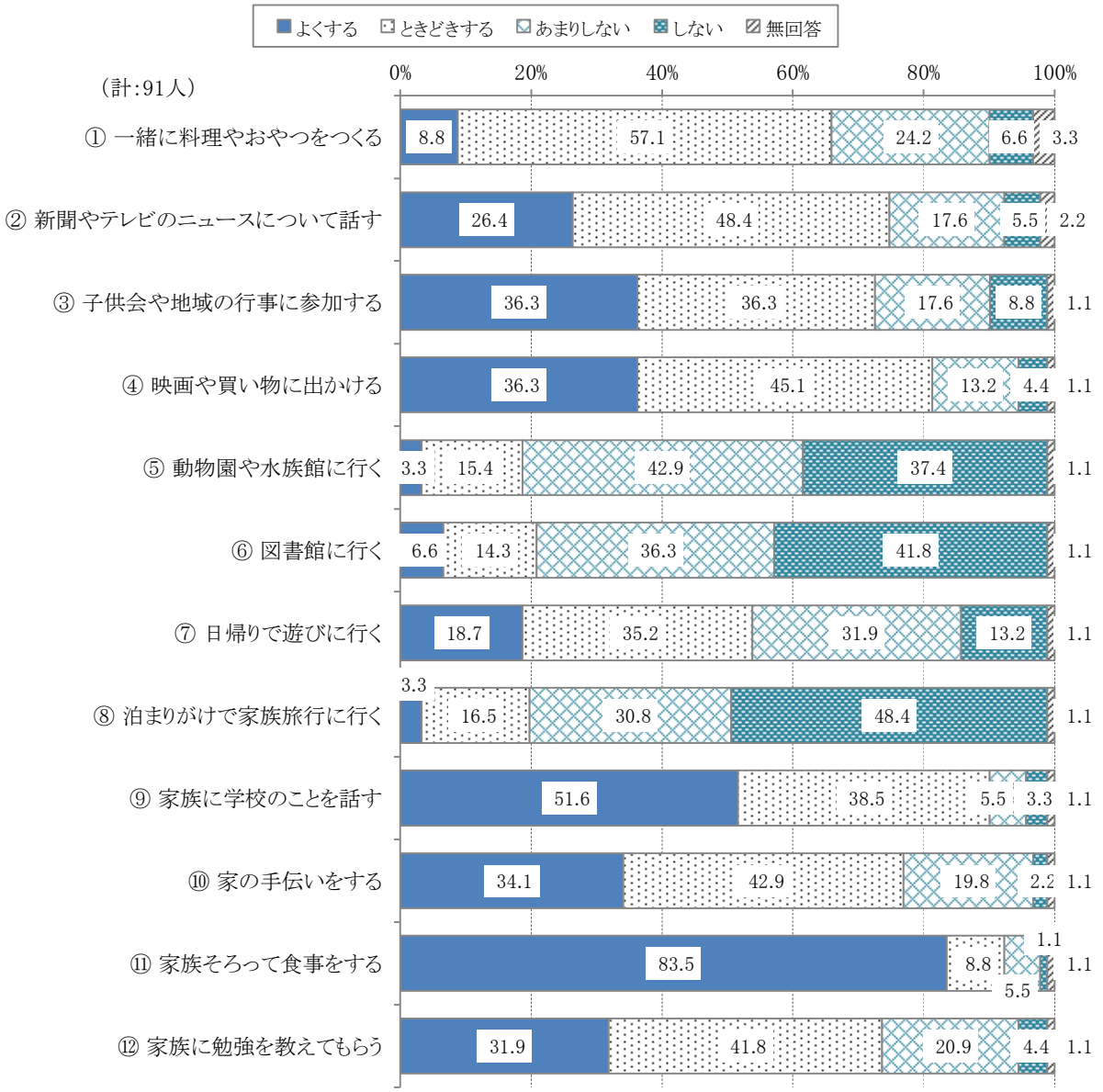
問３２　あなたの家族では、過去１年間に次のようなことをすることがありましたか。



●あなたの家族では、過去１年間に次のようなことをすることがありましたかとたずねたところ、「よくする」と回答した人の割合が最も高いのは「家族そろって食事をする」であり、83.4%となっています。次いで、「家族に学校のことを話す」(58.9%)、「子供会や地域の行事に参加する」（35.1%）が続いています。

●「⑤動物園や水族館に行く」「⑥図書館に行く」「⑧泊まりがけで家族旅行に行く」などの項目は、「よくする」と回答した人の割合が比較的低くなっていますが、調査期間中はコロナ禍下での調査であったため、次頁から示す経済的困窮等の要因以外の要素（コロナ禍で外出を控える意識等）の影響が含まれていることに注意を要します。

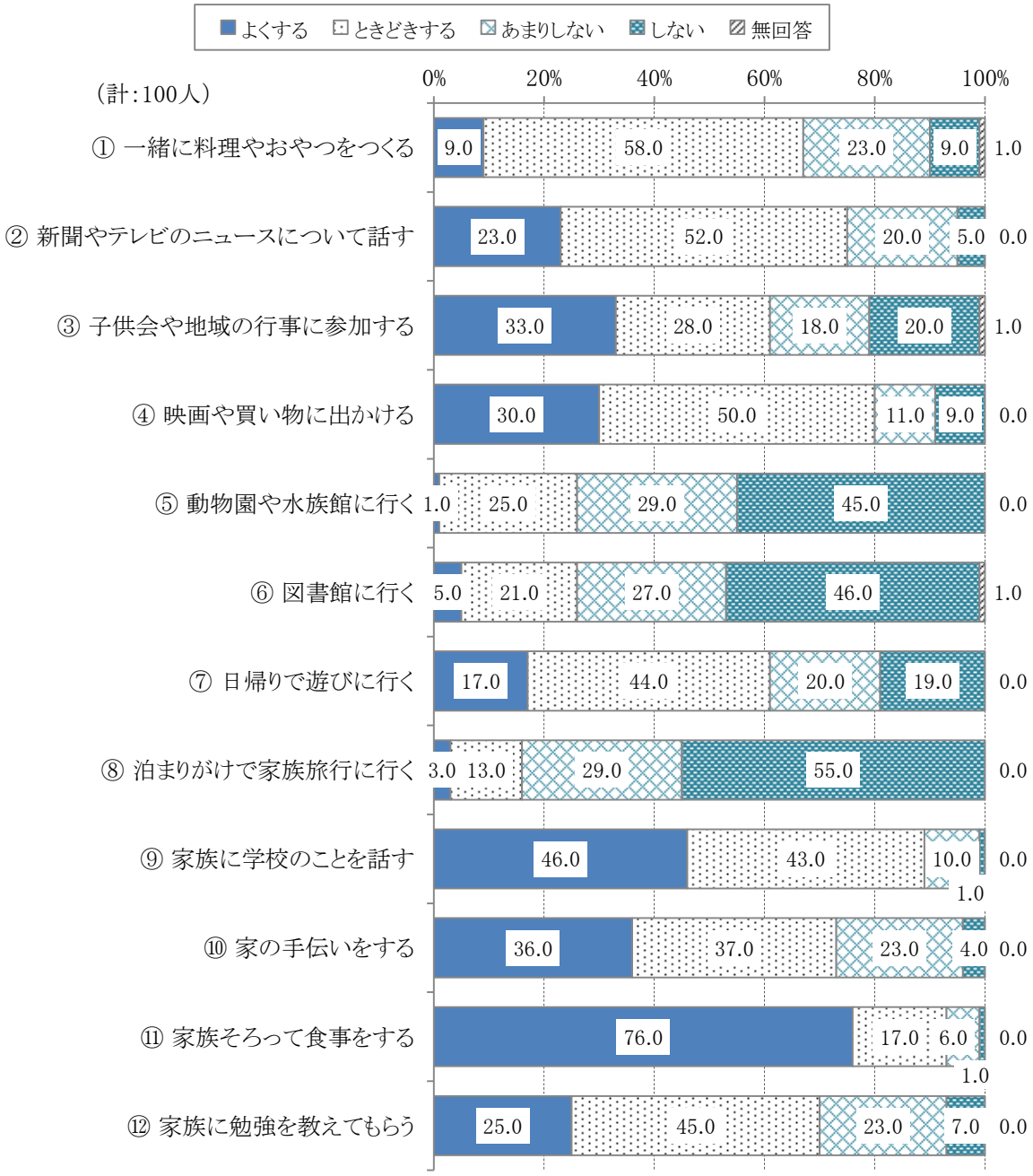
（相対的貧困世帯）



●相対的貧困世帯では、『する』（「よくする」と「ときどきする」の割合の和）の割合が最も高かったのは「家族そろって食事をする」であり、92.3%でした。次いで、「家族に学校のことを話す」（90.1%）、「映画や買い物に出かける」（81.4%）と続いています。

●全体と比較すると、「子供会や地域の行事に参加する」、「一緒に料理やおやつをつくる」を除く全ての項目で、『する』の割合が低くなっています。

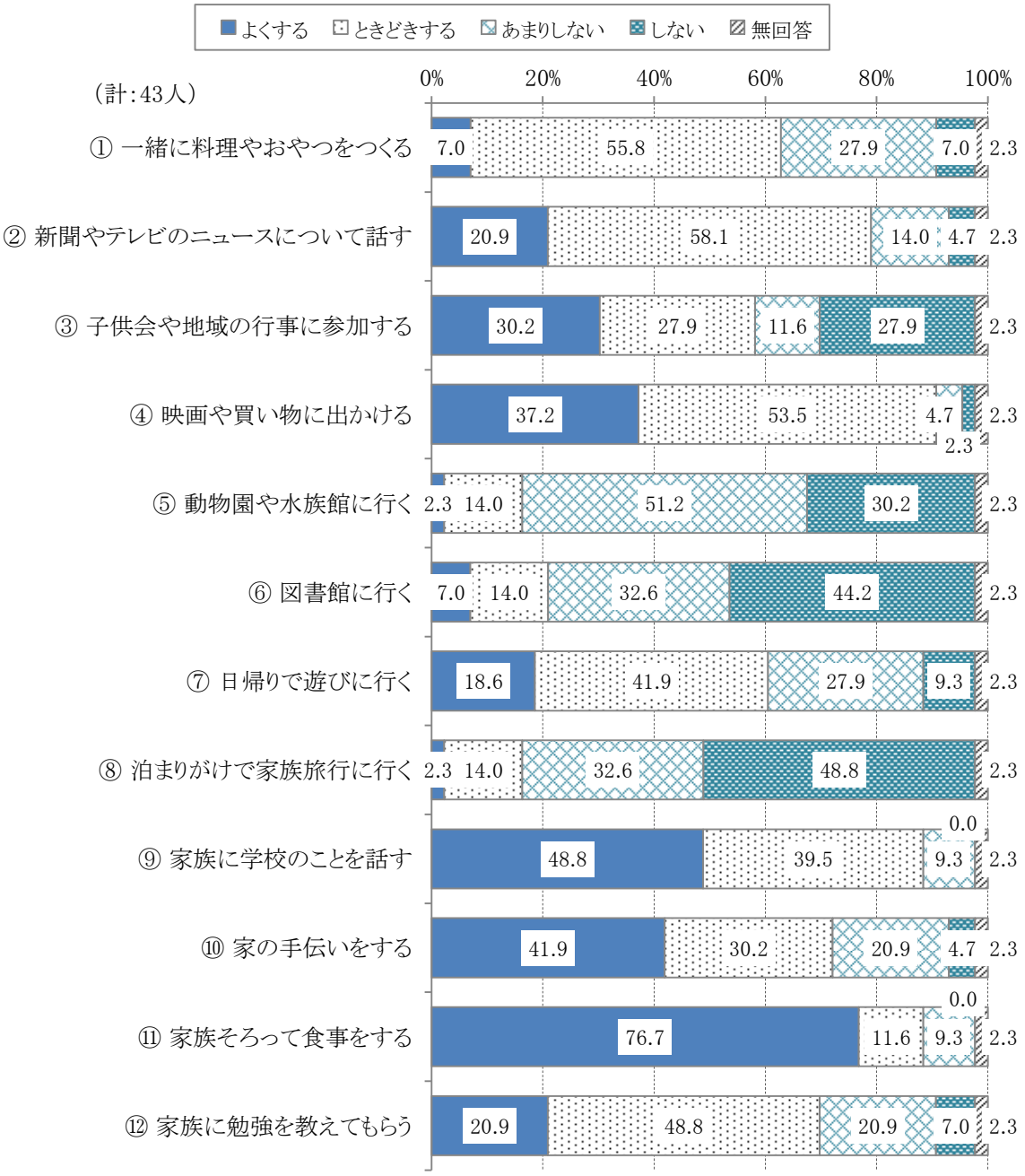
（生活困難世帯）



●生活困難世帯では、『する』（「よくする」と「ときどきする」の割合の和）の割合が最も高かったのは「家族そろって食事をする」であり、93.0%でした。次いで、「家族に学校のことを話す」（89.0%）、「映画や買い物に出かける」（80.0%）と続いています。

●全体と比較すると、「一緒に料理やおやつをつくる」、「日帰りで遊びに行く」を除く全ての項目で、『する』の割合が低くなっています。

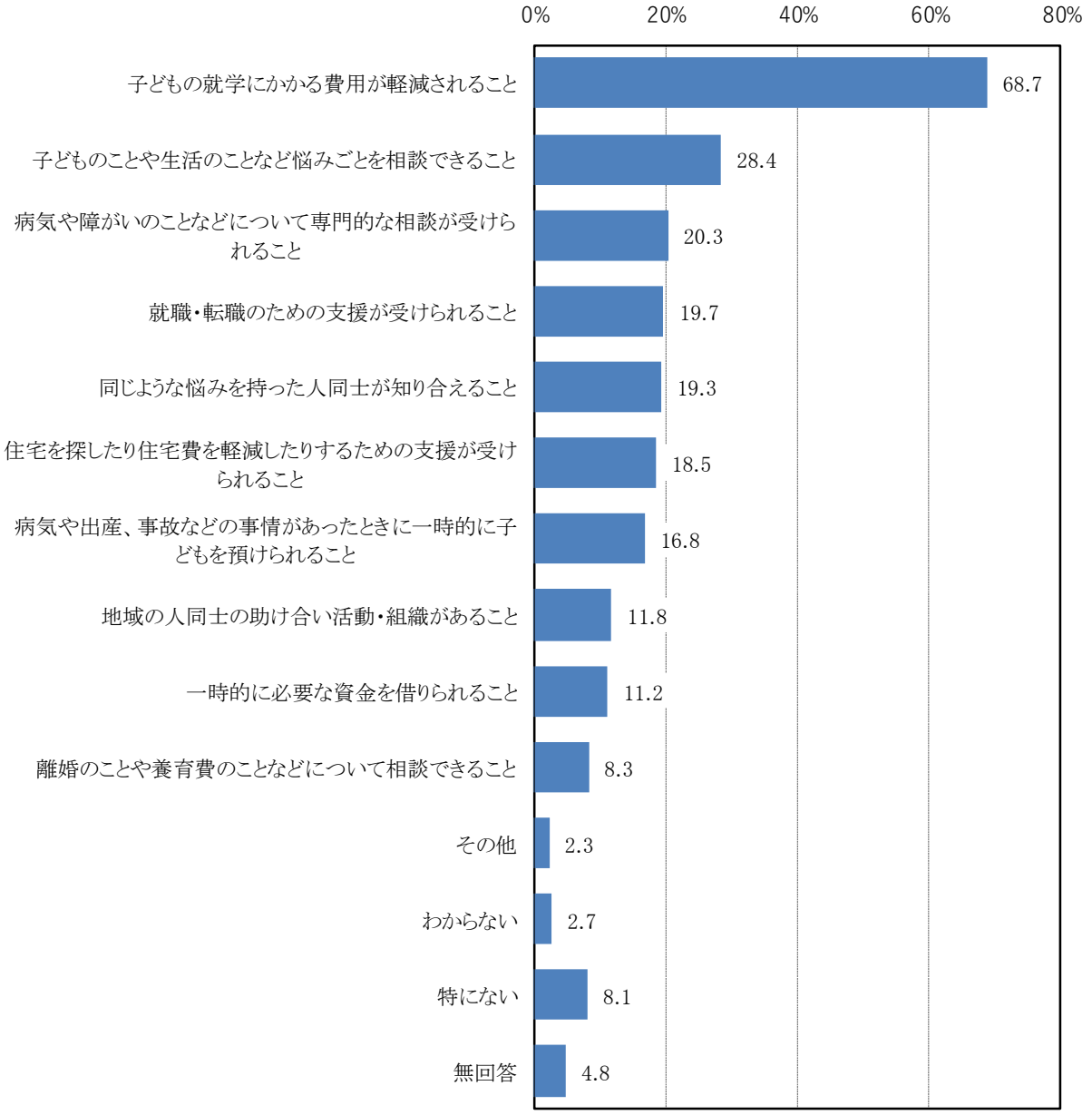
（ひとり親世帯）



●ひとり親世帯では、『する』（「よくする」と「ときどきする」の割合の和）の割合が最も高かったのは「映画や買い物に出かける」であり、90.7%でした。次いで、「家族に学校のことを話す」、「家族そろって食事をする」（ともに 88.3%）、「新聞やテレビのニュースについて話す」（79.0%）と続いています。

●全体と比較すると、「映画や買い物に出かける」を除く全ての項目で、『する』の割合が低くなっています。

問３３　あなたが現在必要としていること、重要だと思う支援等はどのようなものですか。

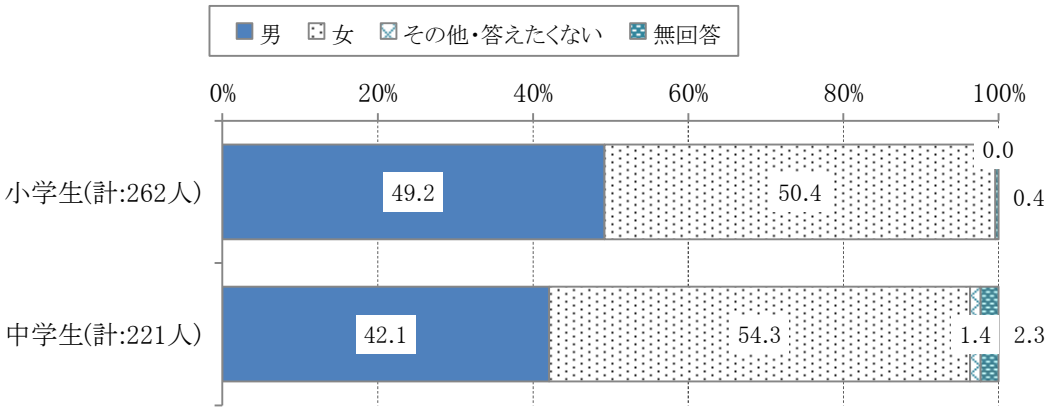


計：482人

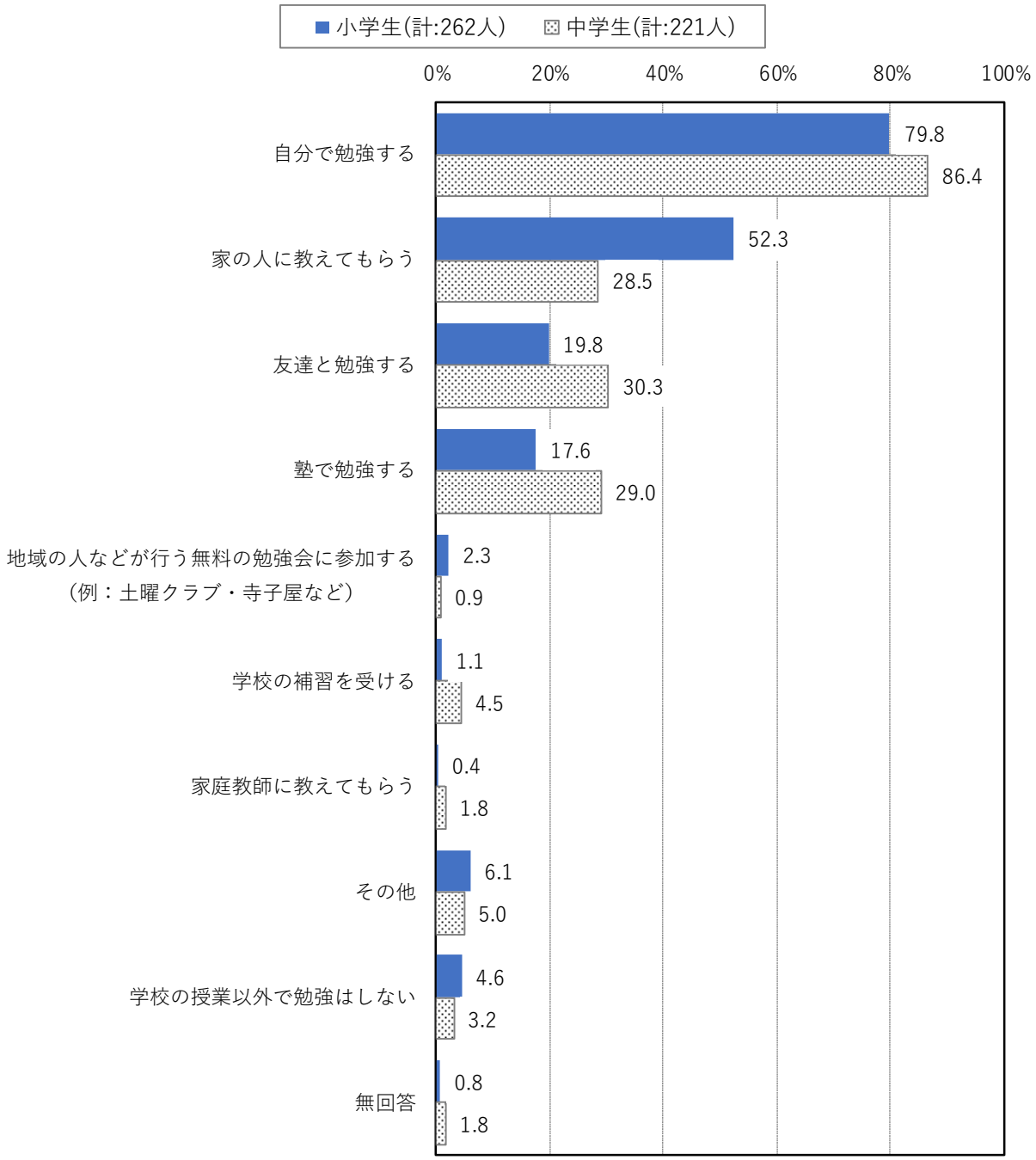
●現在必要としていること、重要だと思う支援等はどのようなものですかとたずねたところ、「子どもの就学にかかる費用が軽減されること」と回答した人が最も多く、68.7%となっています。次いで、「子どものことや生活のことなど悩みごとを相談できること」（28.4%）、「病気や障がいのことなどについて専門的な相談が受けられること」（20.3%）と続いています。

（２）小中学生

問１　あなたの性別を教えてください。

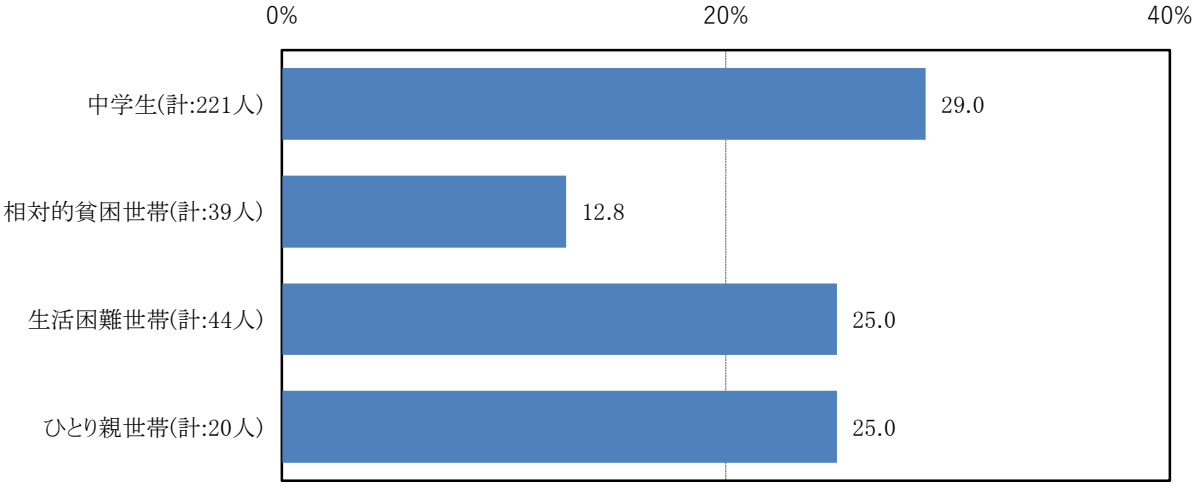


問２　あなたは、ふだん学校の授業以外で、どのように勉強をしていますか。
※勉強には学校の宿題もふくみます。



●ふだん学校の授業以外で、どのように勉強をしていますかとたずねたところ、小学生では、「自分で勉強する」と回答した人が最も多く、79.8%となっています。次いで、「家の人に教えてもらう」（52.3%）、「友達と勉強する」（19.8%）と続いています。中学生では、「自分で勉強する」と回答した人が最も多く、86.4%となっています。次いで、「友達と勉強する」（30.3%）、「塾で勉強する」（29.0%）と続いています。このように、中学生になると小学生に比べて塾の利用が増加していることが分かります。

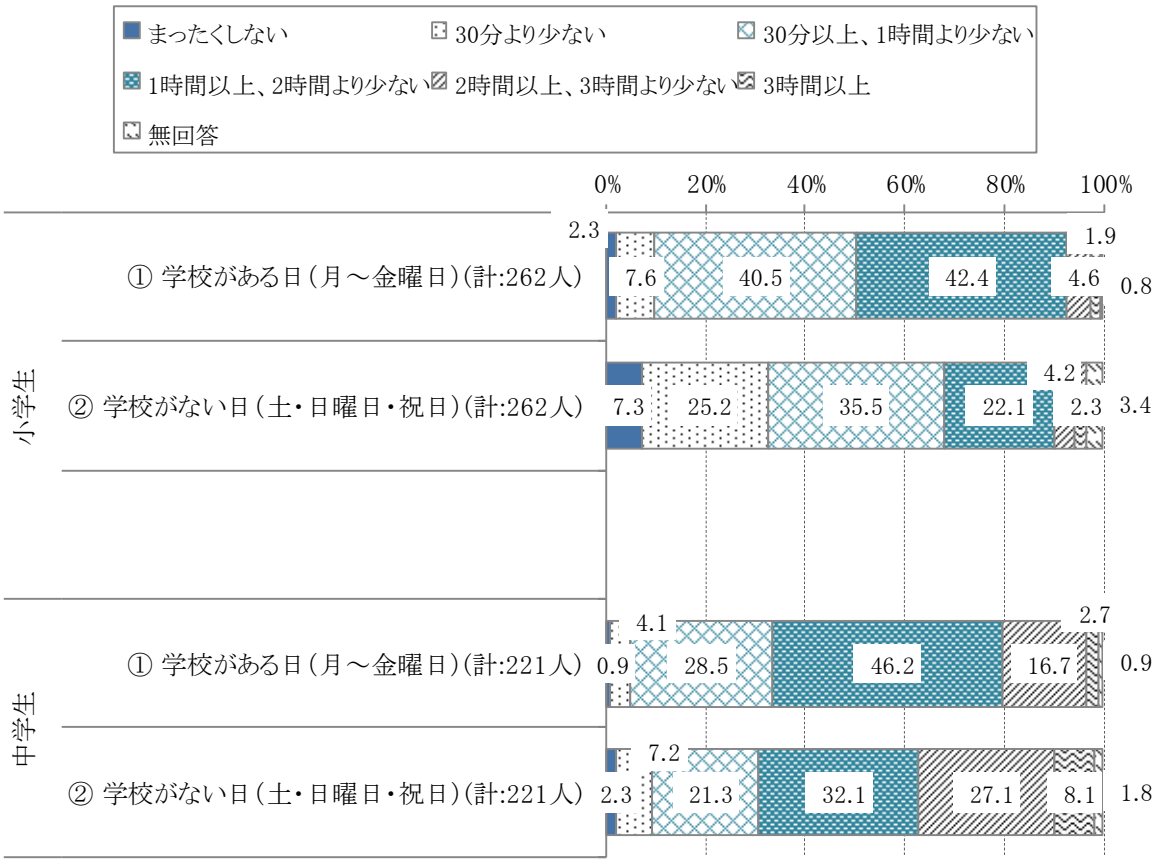
（塾で勉強する中学生の割合）



●塾で勉強する中学生は、全体では 29.0%ですが、相対的貧困世帯では 12.8%となっており、他の属性と比べても塾の利用率が低いことが分かります。

●問 3 の結果からは、中学生の 65.6%が平日に 1 時間以上の勉強をしていますが、相対的貧困世帯に限ればその割合は 56.5%に留まっており、塾の利用率が少なからず影響を及ぼしている可能性があります。

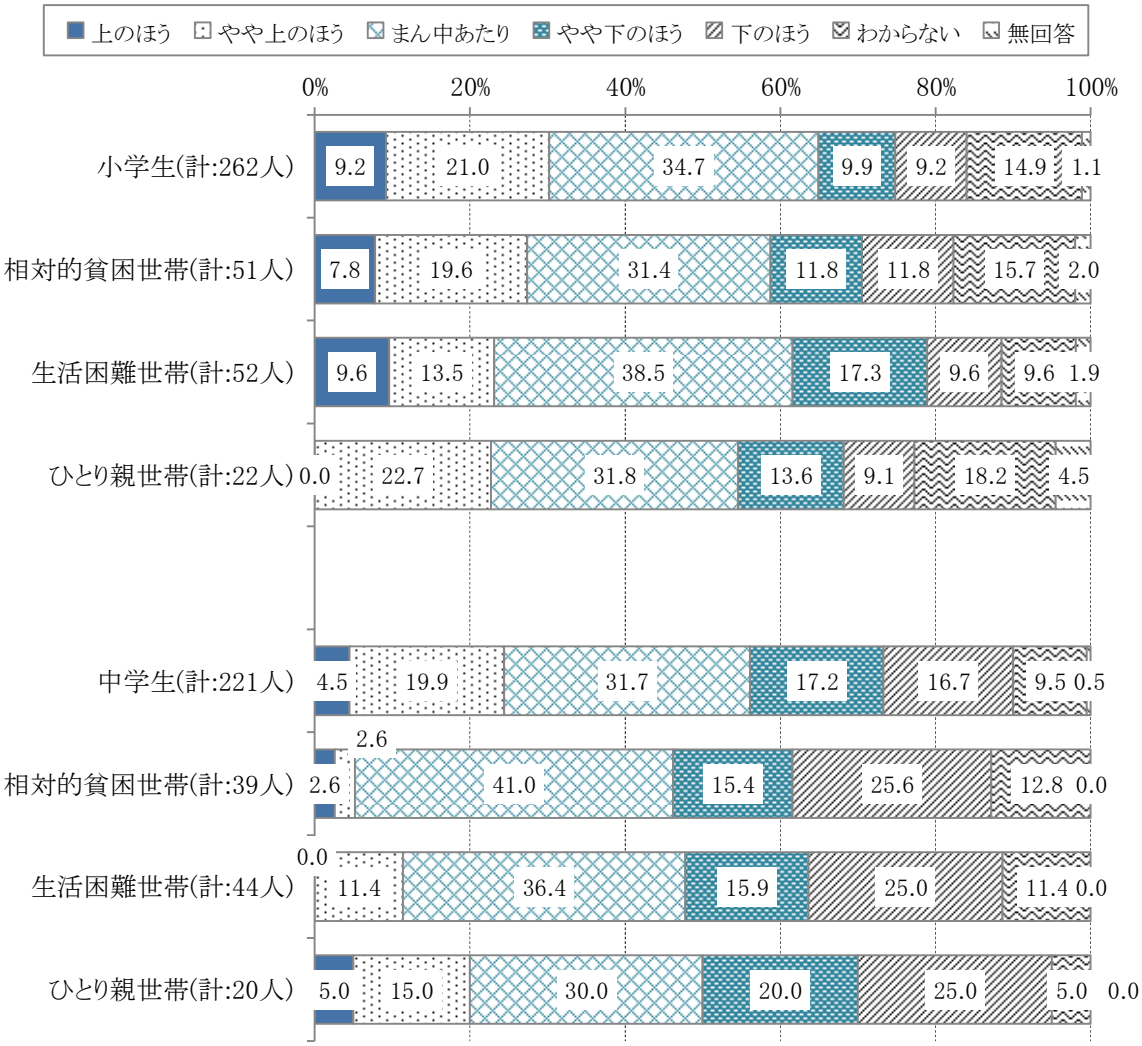
問３　あなたは、ふだん学校の授業以外に、１日あたりどれくらいの時間勉強をしますか。※ 学校の宿題をする時間や、塾などでの勉強時間もふくみます。



（中学生の平日の勉強時間）

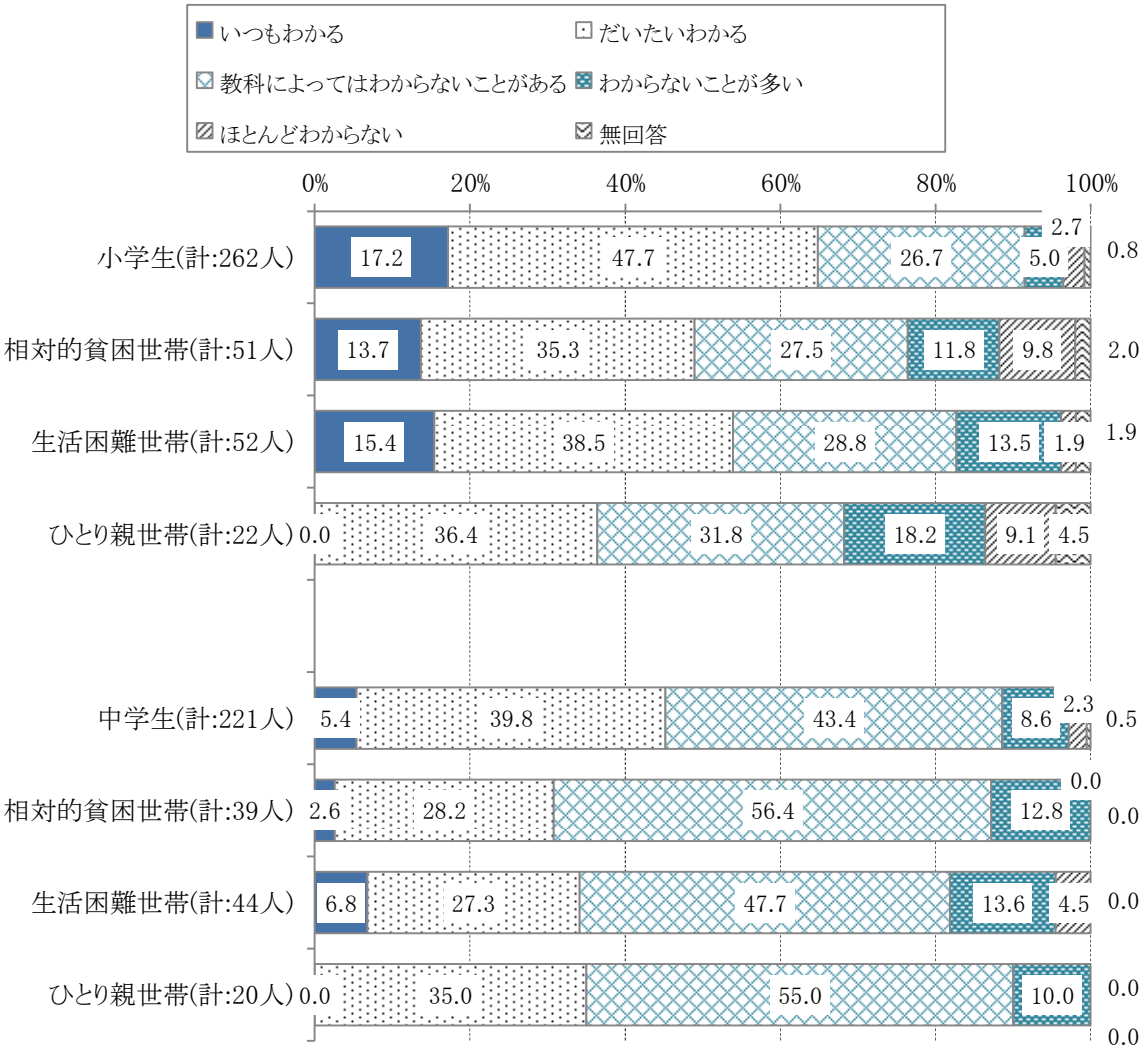
	まったくしない	30分より少ない	30分以上、1時間より少ない	1時間以上、2時間より少ない	2時間以上、3時間より少ない	3時間以上	無回答
中学生(計:221人)	0.9	4.1	28.5	46.2	16.7	2.7	0.9
相対的貧困世帯(計:39人)	2.6	0.0	41.0	43.6	10.3	2.6	0.0
生活困難世帯(計:44人)	4.5	6.8	31.8	34.1	15.9	6.8	0.0
ひとり親世帯(計:20人)	0.0	0.0	55.0	30.0	15.0	0.0	0.0

問４　あなたの成績は、クラスの中でどのくらいだと思いますか。



●自分の成績の自己評価をたずねたところ、「やや上のほう」「上のほう」と回答した小学生の割合は属性によって大きな傾向はみられませんが、中学生になると「やや上のほう」「上のほう」と回答した人の割合は、平均で 24.4%であるのに対して相対的貧困世帯では 5.2%と極端に自己評価が低下することが分かります。

問５　あなたは、学校の授業がわからないことがありますか。

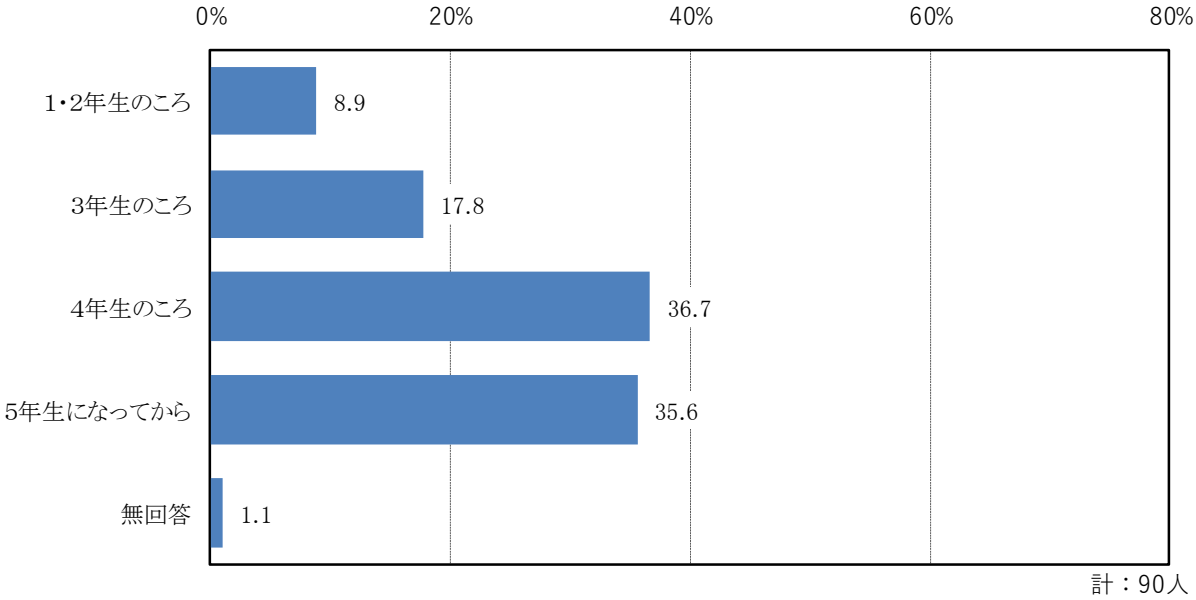


●学校の授業が「いつもわかる」「だいたいわかる」と回答した中学生の割合は 45.2%である一方、相対的貧困世帯では 30.8%となっており、また、「わからないことが多い」との回答も 12.8%あることが分かります。

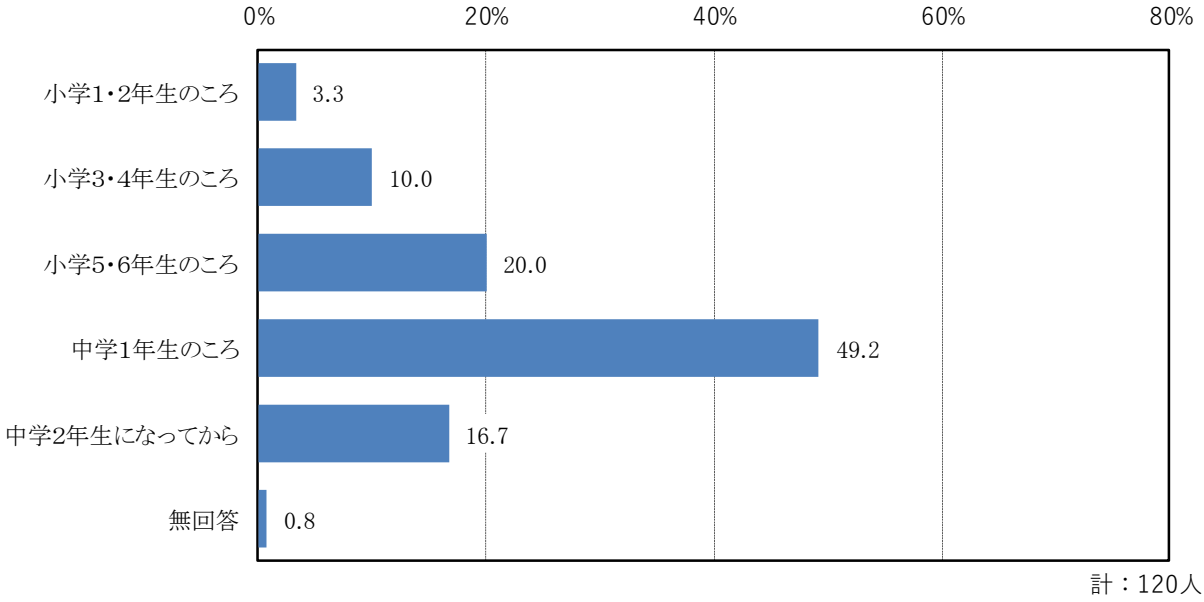
「教科によってはわからないことがある」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」と答えた人にお聞きします。

問６　いつごろから、授業がわからないことがあるようになりましたか。

（小学生）

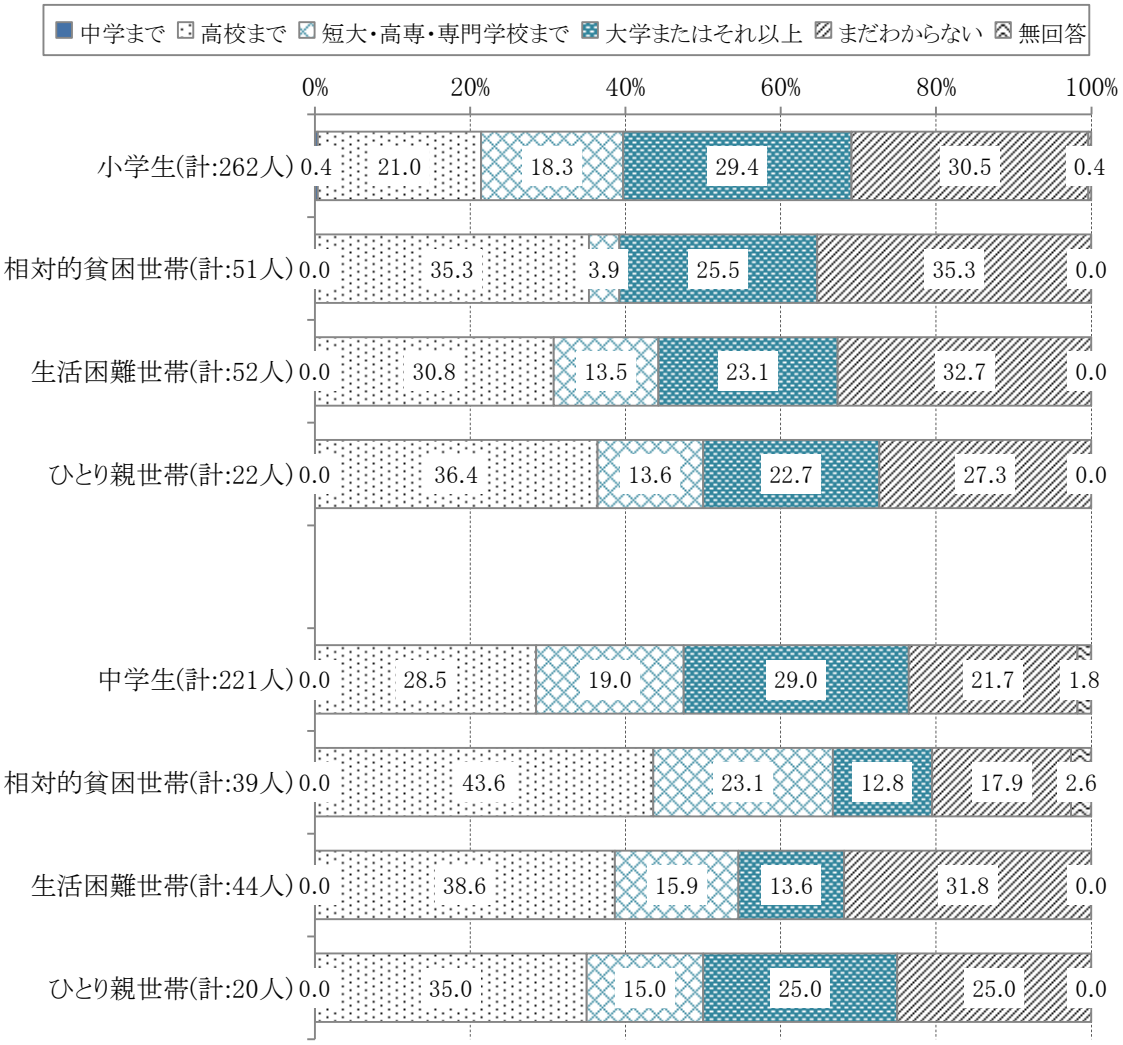


（中学生）



●授業が分からなくなった時期としては、小学生では４年生以降、中学生では中学１年生の頃との回答が多くみられます。特に中学１年生と回答した中学生の割合は49.2%とほぼ半数となっていることが分かります。

問７　あなたは、将来、どの段階まで進学したいですか。



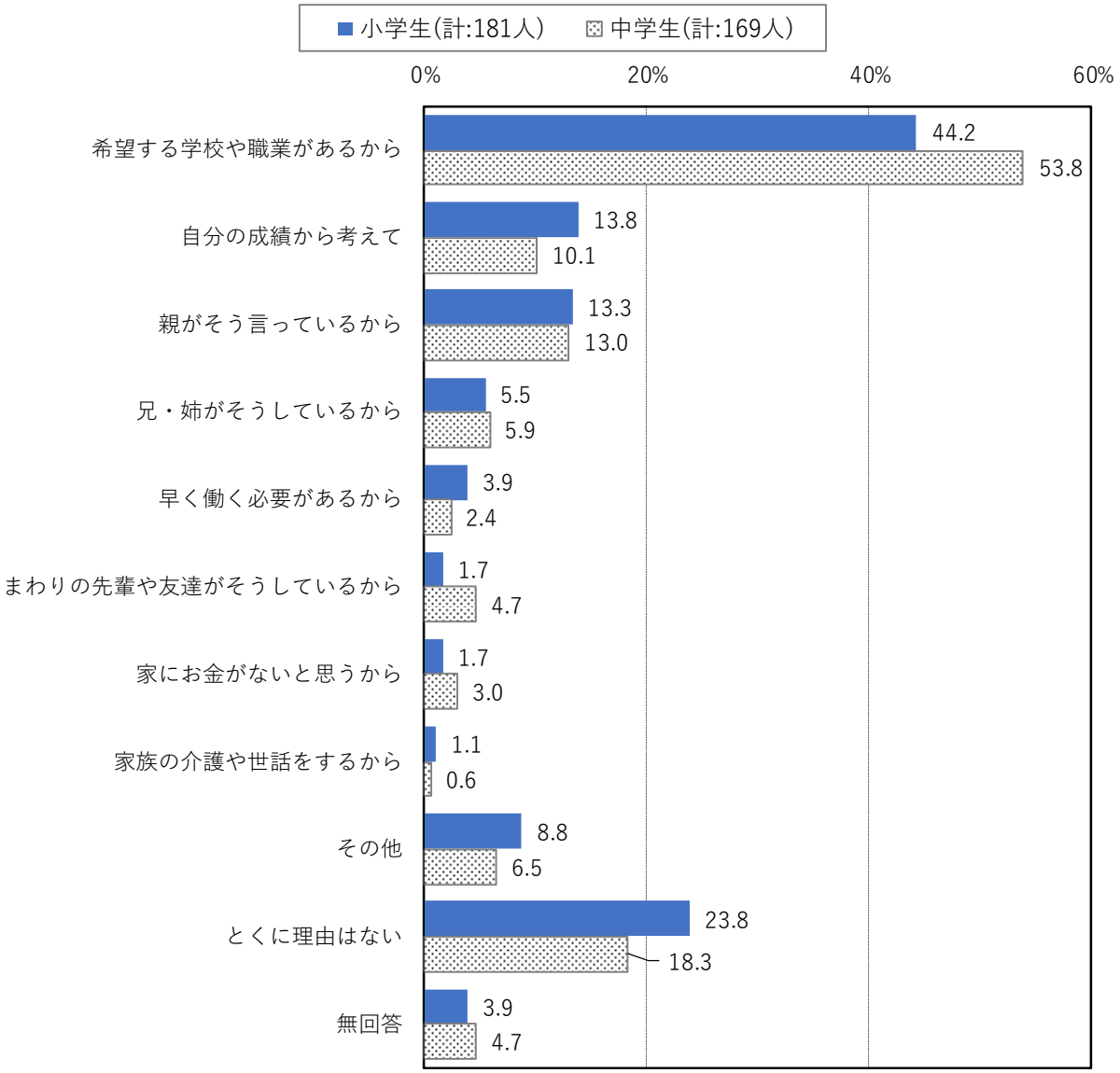
●相対的貧困世帯の学力の差が顕著となるのは概ね中学生以降である一方、進学意向については小学生の頃から全体と異なる傾向がみられます。「短大・高専・専門学校まで」「大学またはそれ以上」と回答した小学生の割合は 47.7%である一方で、相対的貧困世帯では 29.4%となっており、小学生時点ですでに顕著な差がみられます。

●その理由をたずねたところ、相対的貧困世帯では、「早く働く必要があるから」「家にお金がないと思うから」と回答した人の割合が全体の傾向と比べて高くなっており、世帯の状況が子どもの進路に影響していることが分かります。

●「平成 25 年度 小学生・中学生の意識に関する調査」（平成 27 年 7 月）によると、小学校 4 年生から中学校 3 年生の児童・生徒の 77.3%が専門学校以上の進学を希望しており、その割合は年々高まっています。

●なお、前回調査結果では、生活困難世帯（本調査における「生活困難世帯」とは定義が異なり、「相対的貧困世帯」と「生活困難世帯」を組み合わせた独自類型であることに注意）の中学 1 年生（本調査では国にならい中学 2 年生を対象としていることに注意）の 41.1%が専門学校以上（前回調査では選択肢が今回調査と異なることに注意）への進学を希望していました。

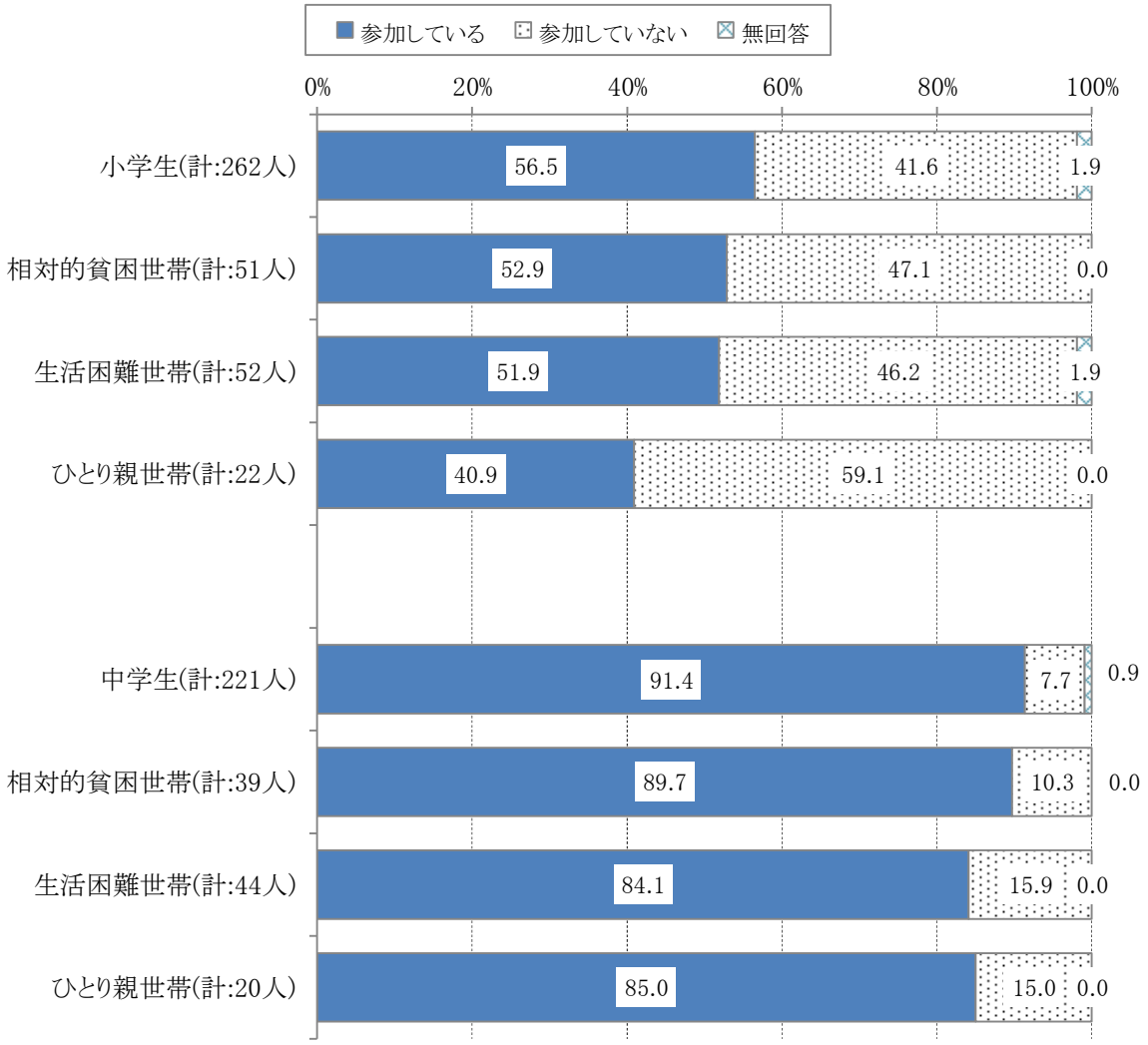
問８　その理由を答えてください。



（属性別クロス集計表：単位%）

	家にお金がないと思うから	早く働く必要があるから
小学生(計:181人)	1.7	3.9
相対的貧困世帯(計:33人)	3.0	12.1
生活困難世帯(計:35人)	2.9	11.4
ひとり親世帯(計:16人)	6.3	12.5
中学生(計:169人)	3.0	2.4
相対的貧困世帯(計:31人)	9.7	3.2
生活困難世帯(計:30人)	10.0	0.0
ひとり親世帯(計:15人)	13.3	6.7

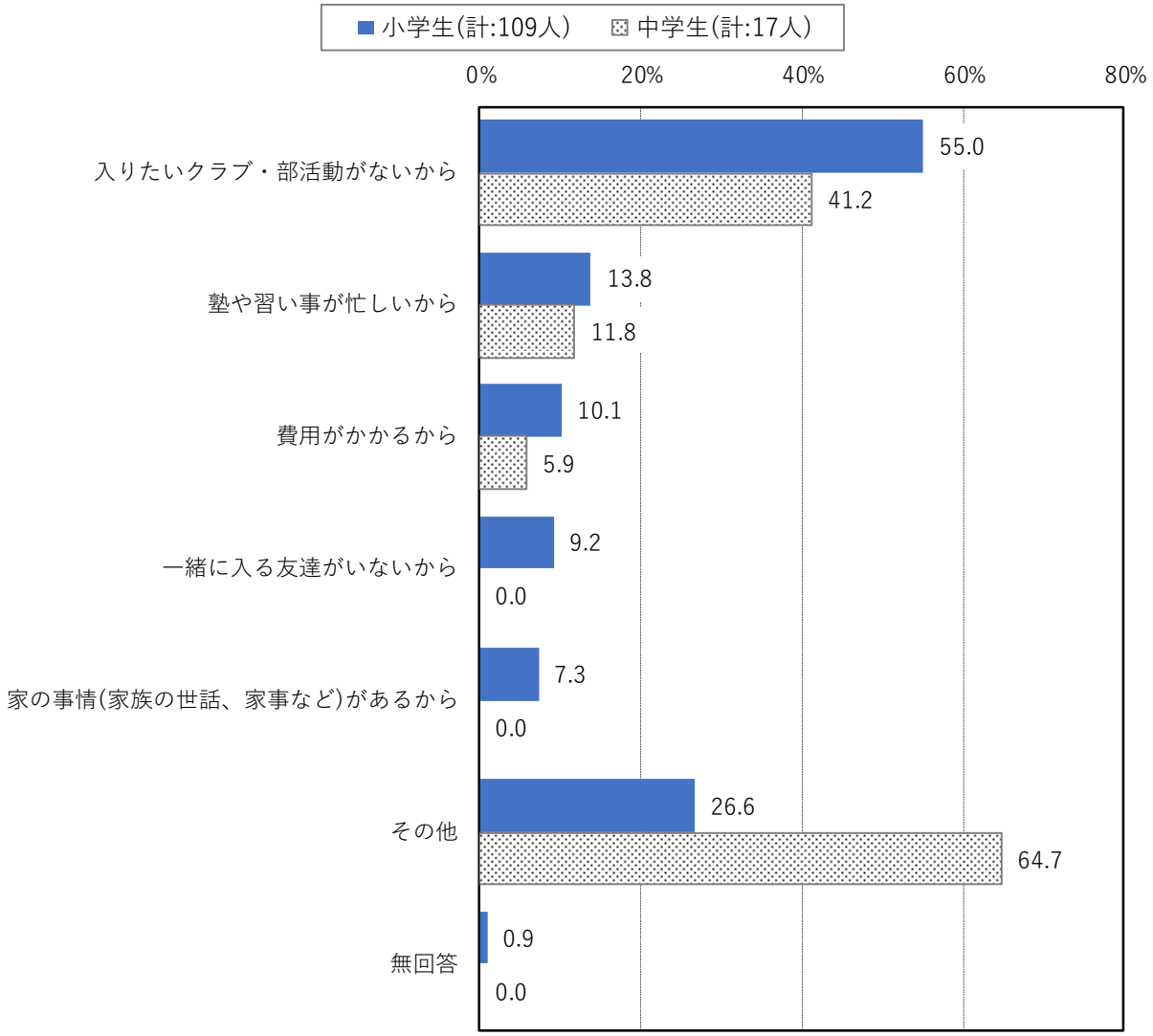
問９　あなたは、地域のスポーツクラブや文化クラブ、学校の部活動に参加していますか。



●地域のスポーツクラブや文化クラブ、学校の部活動に参加していますかとたずねたところ、小学生では概ね６割（56.6%）、中学生では約９割（91.4%）が何らかの活動に参加していることが分かります。小学生の参加率が最も低いのは、ひとり親世帯となっています。

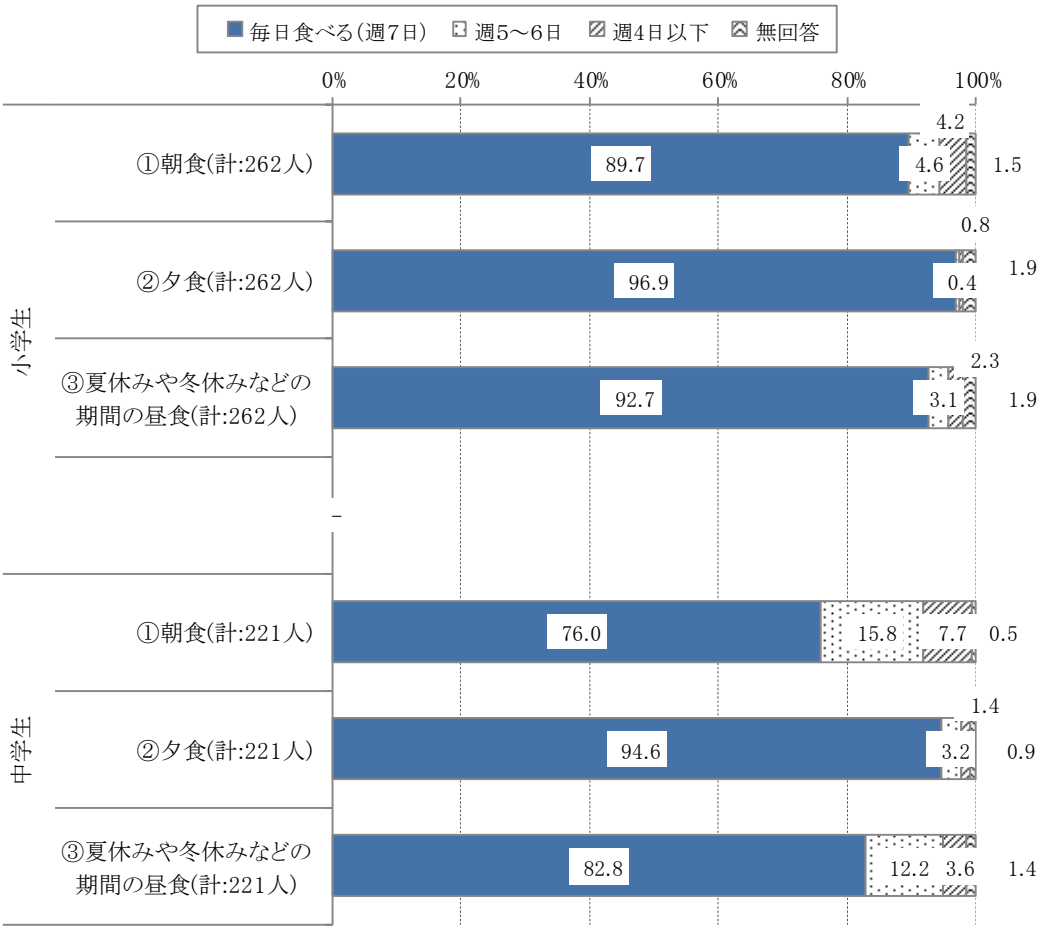
「参加していない」と答えた人にお聞きします。

問１０　参加していない理由は何ですか。



●「参加していない」と答えた人に参加していない理由をたずねたところ、小学生では、「入りたいクラブ・部活動がないから」と回答した人が最も多く、55.0%となっています。次いで、「塾や習い事が忙しいから」(13.8%)、「費用がかかるから」(10.1%)と続いています。一方、中学生では、「入りたいクラブ・部活動がないから」と回答した人が最も多く、41.2%となっています。次いで、「塾や習い事が忙しいから」（11.8%）、「費用がかかるから」（5.9%）と続いています。

問１１　あなたは週にどのくらい、食事をしていますか。



●週にどのくらい、食事をしていますかとたずねたところ、朝食を毎日食べない人の割合が相対的に低くなっています。そこで、小学生、中学生の朝食の状況を属性別にクロス集計したところ、相対的貧困世帯、生活困難世帯、ひとり親世帯のいずれも全体に比べて毎日朝食を食べる人の割合が低くなっていることが分かります。

（朝食の摂取状況）

	毎日食べる（週７日）	週５～６日	週３～４日	週１～２日、ほとんど食べない	無回答
小学生(計:262人)	89.7	4.6	1.1	3.1	1.5
相対的貧困世帯(計:51人)	76.5	11.8	3.9	5.9	2.0
生活困難世帯(計:52人)	86.5	1.9	3.8	7.7	0.0
ひとり親世帯(計:22人)	68.2	13.6	9.1	9.1	0.0
中学生(計:221人)	76.0	15.8	3.2	4.5	0.5
相対的貧困世帯(計:39人)	71.8	20.5	2.6	5.1	0.0
生活困難世帯(計:44人)	70.5	18.2	2.3	9.1	0.0
ひとり親世帯(計:20人)	70.0	15.0	5.0	10.0	0.0

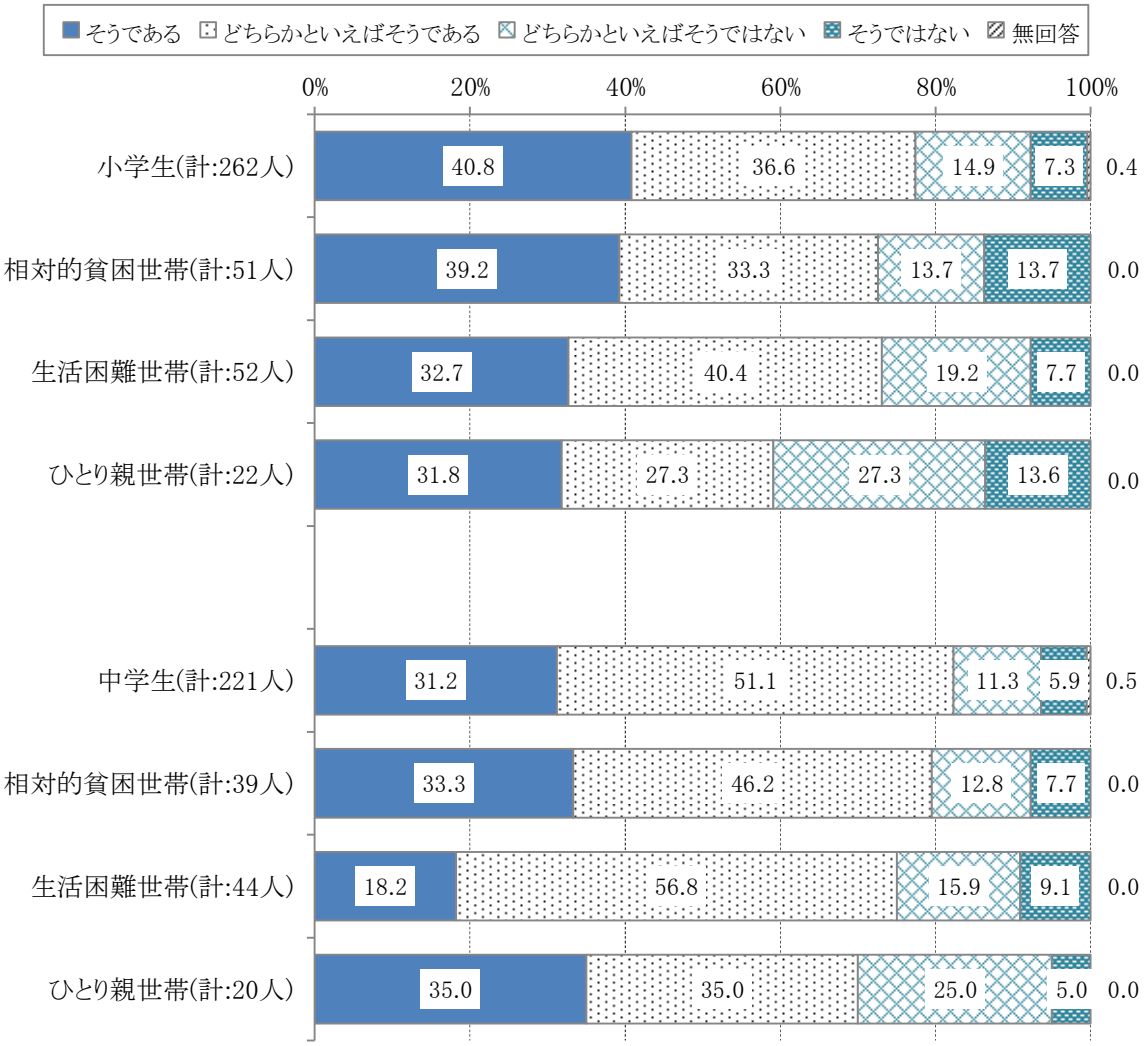
●中学生の夏休みや冬休みなどの期間の昼食を毎日食べる人の割合は 82.8%となっています。平日は学校給食が食格差を縮小している一方で、夏休みや冬休みなどの学校給食がない期間は家庭での食事になるため、子どもの食費が増加することで家計への負担が重くなること、その結果、満足に食べられず、栄養が偏った食事になることが懸念されています。

（長期休暇中の昼食の摂取状況）

	毎日食べる（週７日）	週５～６日	週３～４日	週１～２日、ほとんど食べない	無回答
小学生(計:262人)	92.7	3.1	1.5	0.8	1.9
相対的貧困世帯(計:51人)	90.2	5.9	2.0	0.0	2.0
生活困難世帯(計:52人)	90.4	3.8	3.8	1.9	0.0
ひとり親世帯(計:22人)	81.8	13.6	4.5	0.0	0.0
中学生(計:221人)	82.8	12.2	2.7	0.9	1.4
相対的貧困世帯(計:39人)	79.5	12.8	7.7	0.0	0.0
生活困難世帯(計:44人)	75.0	15.9	6.8	0.0	2.3
ひとり親世帯(計:20人)	90.0	0.0	10.0	0.0	0.0

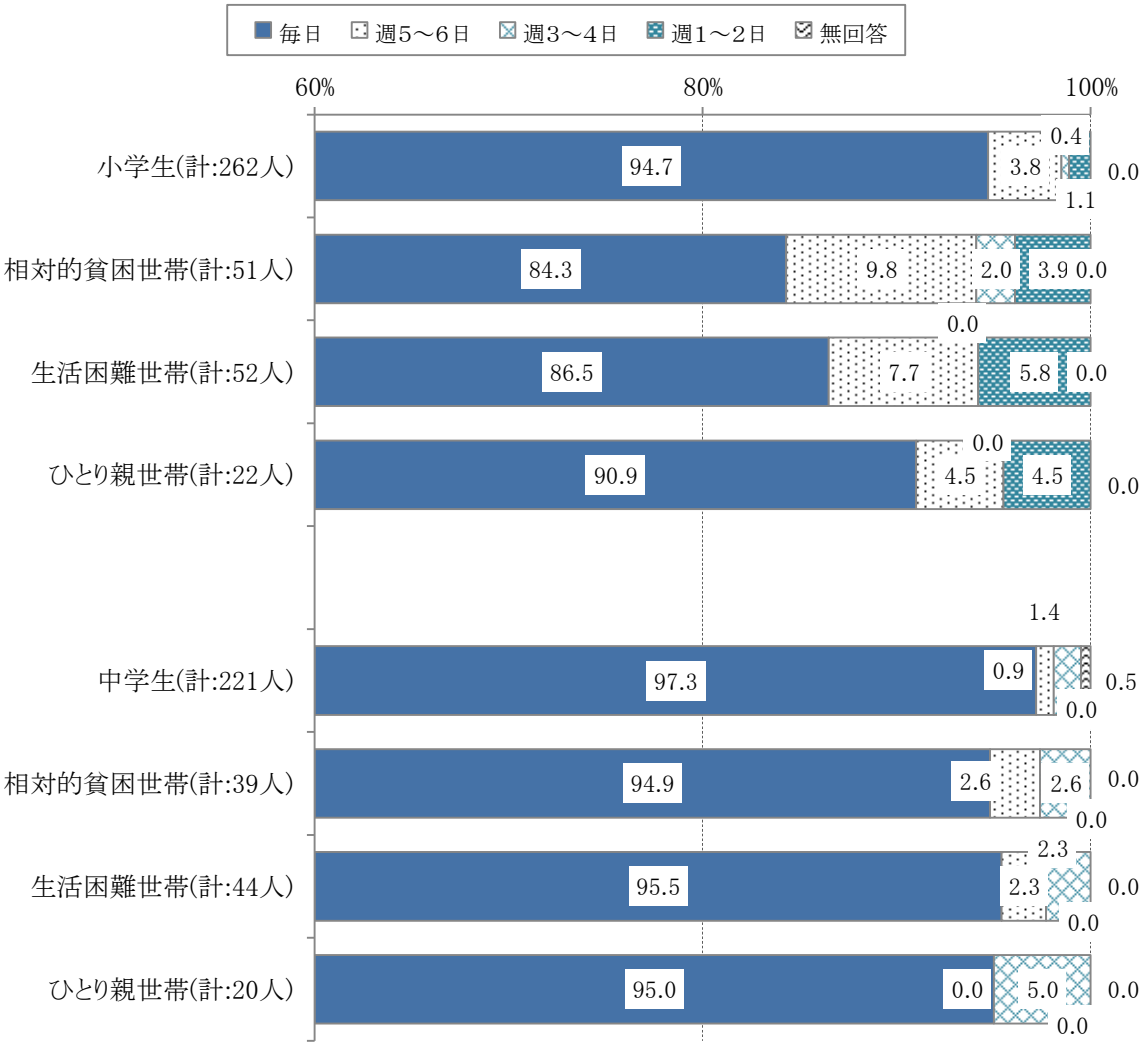
●中学生の長期休暇中の昼食の摂取状況を属性別にクロス集計したところ、生活困難世帯では夏休みや冬休みなどの期間の昼食を毎日食べない人の割合が 22.7%となっており、ほかの世帯と比べて比較的高い数値となっています。

問１２　あなたは、ふだん(月曜日～金曜日)、ほぼ同じ時間に寝ていますか。



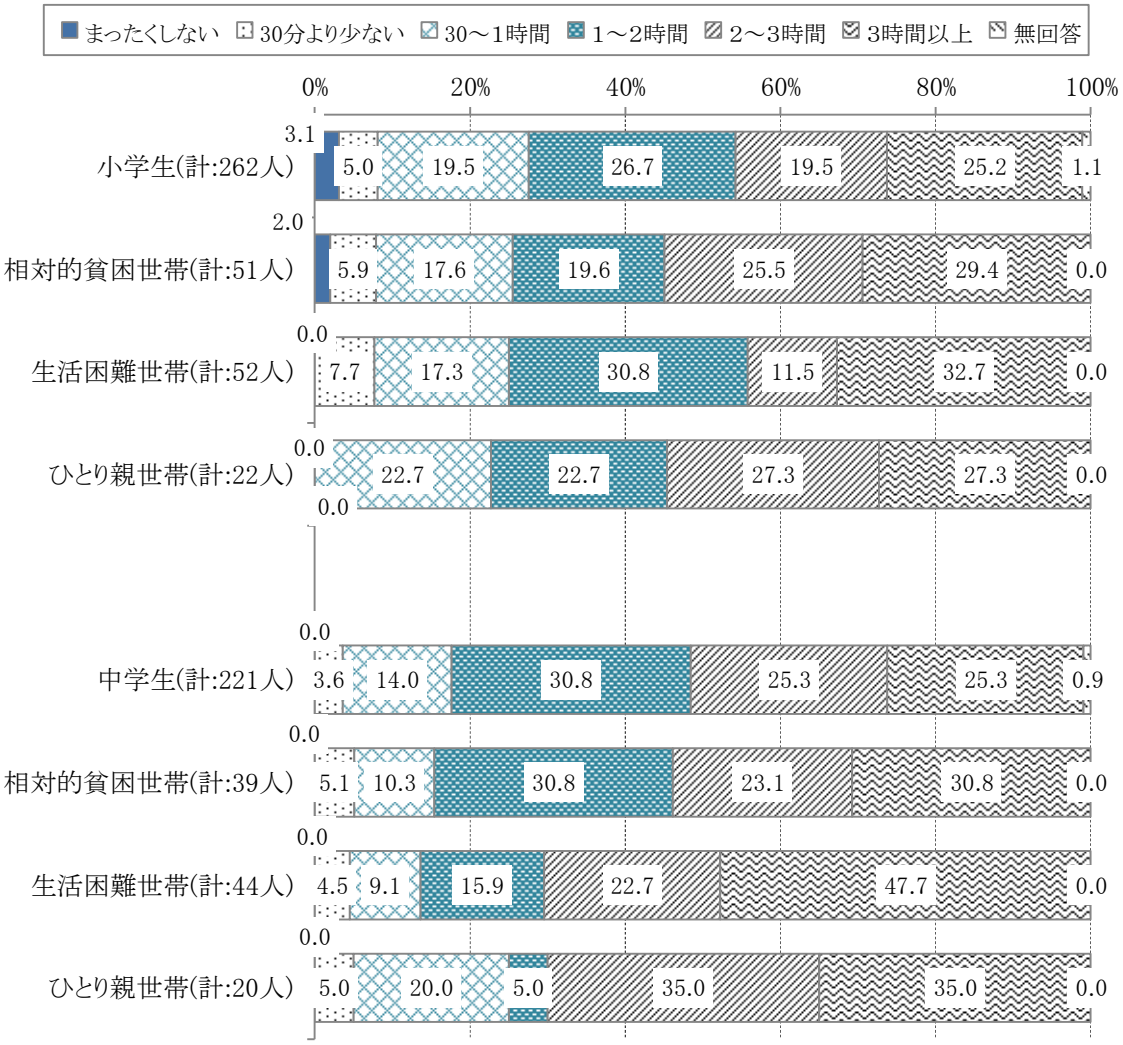
●ふだん(月曜日～金曜日)、ほぼ同じ時間に寝ていますかとたずねたところ、「そうである」または「どちらかといえばそうである」と回答した小学生の割合は 77.4%、中学生の割合は 82.3%となっています。

問１３　あなたは、ふだん(月曜日～金曜日)、お風呂にどのくらい入っていますか。



●ふだん(月曜日～金曜日)、お風呂にどのくらい入っていますかとたずねたところ、中学生のほとんどは毎日入浴していることが分かりますが、小学生の相対的貧困世帯と生活困難世帯では毎日入浴している人の割合が９割以下になっています。

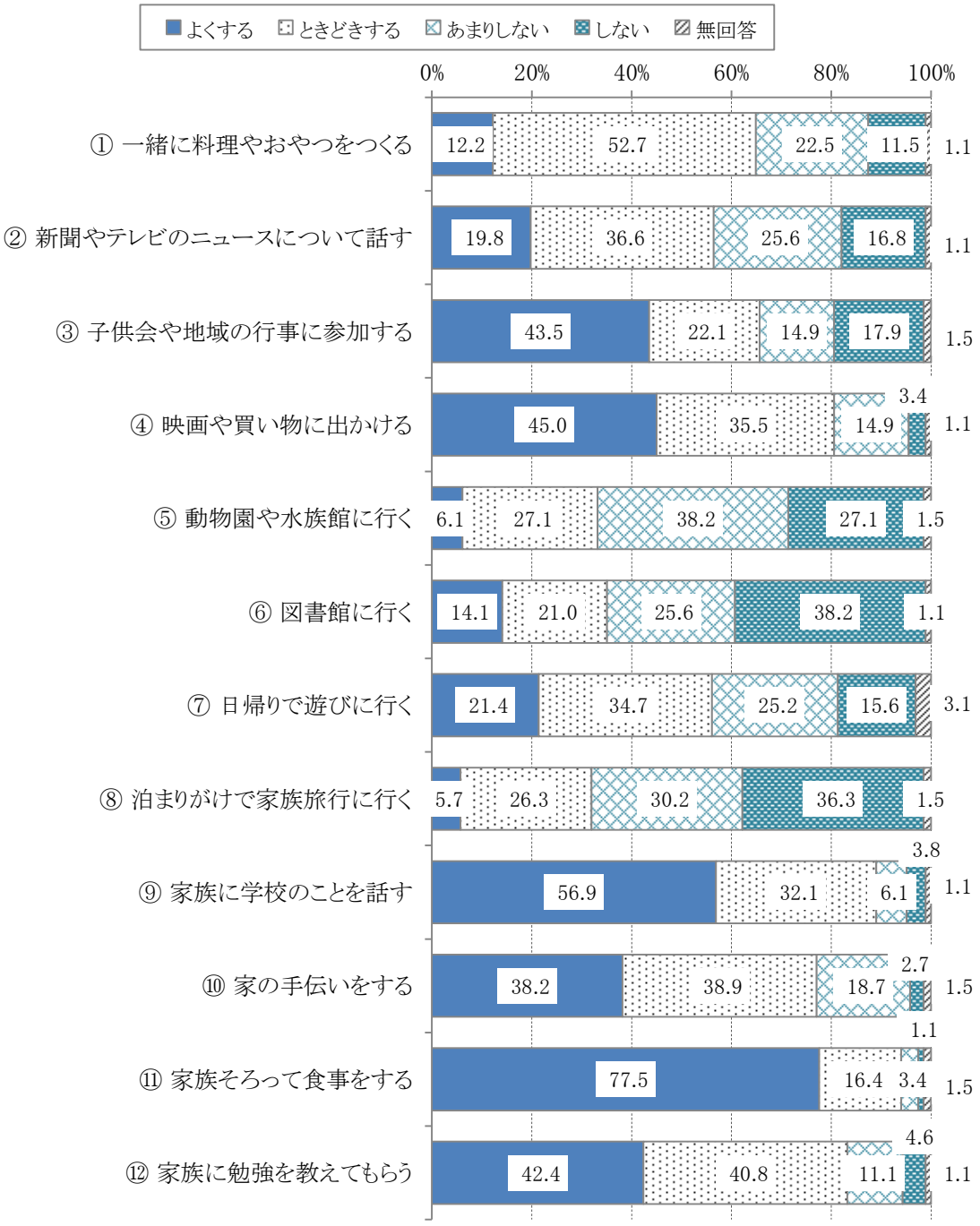
問１４　あなたは普段テレビ、インターネット、スマホ、ゲームなどを１日にどれくらい使用していますか。



●普段テレビ、インターネット、スマホ、ゲームなどを１日にどれくらい使用していますかとたずねたところ、小学生の 44.7%、中学生の 50.6%が２時間以上使用していると回答しています。属性別にみると、小学生では大きな傾向がみられないものの、中学生では、１日にテレビ、インターネット、スマホ、ゲームなどを２時間以上する人の割合は生活困難世帯が 70.4%、ひとり親世帯が 70.0%と比較的高いことが分かります。

問１５　あなたの家族では、過去１年間に次のようなことをすることがありましたか。

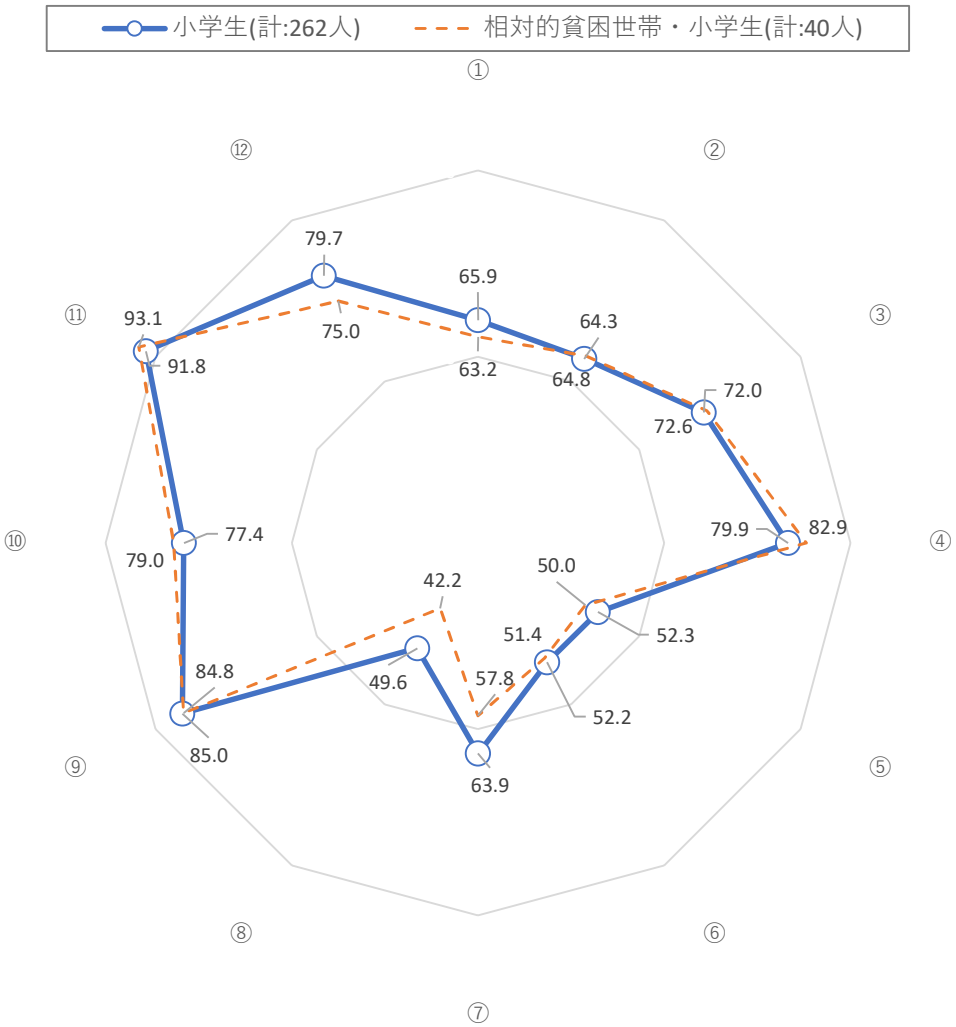
（小学生）



計:262人

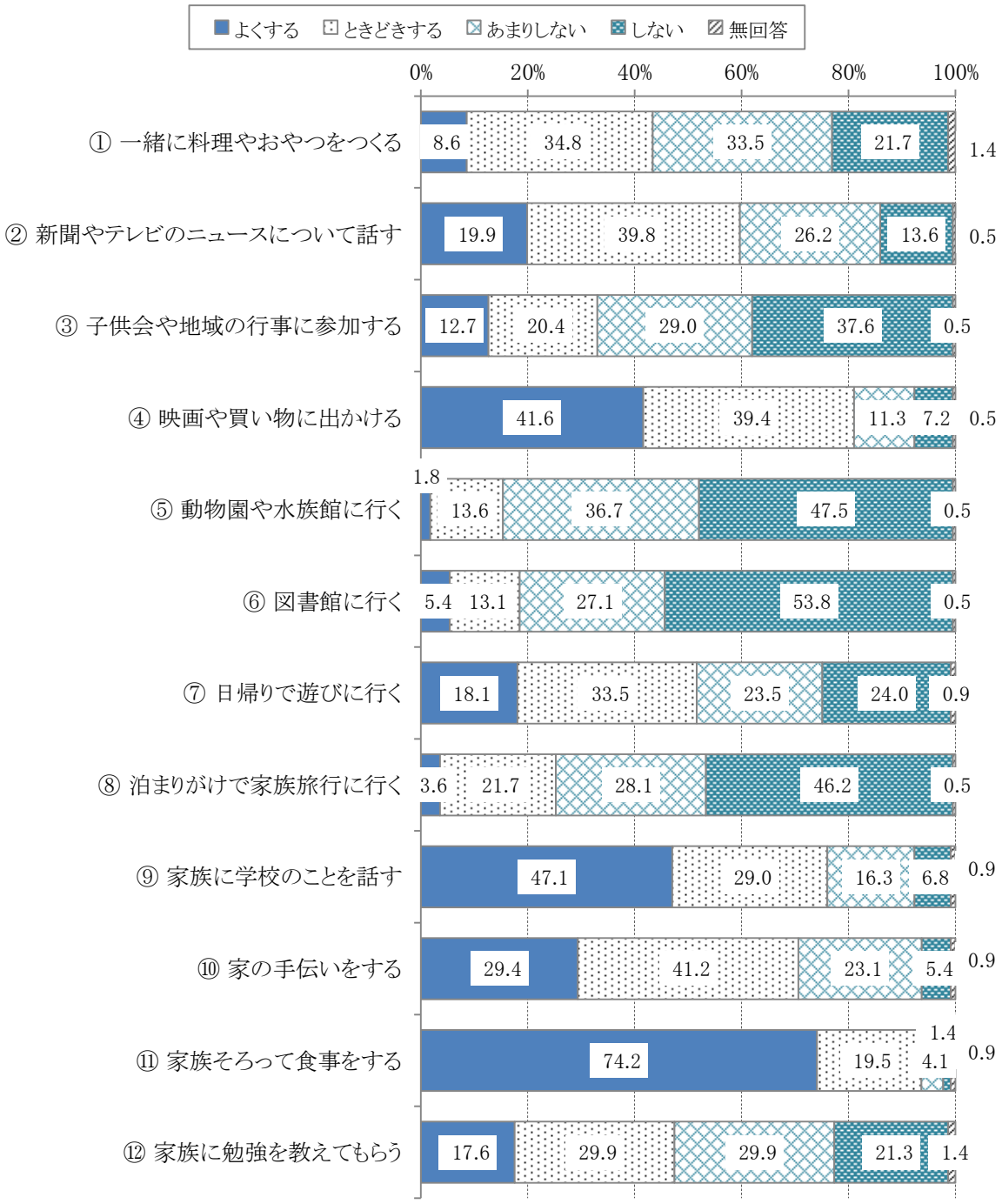
選択肢の 4 段階評価を「よくする」＝4 点、「ときどきする」＝3 点、「あまりしない」＝2 点、「しない」＝ 1 点として算出した平均値を評価点とし、相対的貧困世帯との差を明らかにすることを試みました。評価点がより大きい場合、その項目の経験頻度が高いといえます。

（小学生）



●全体と相対的貧困世帯で経験頻度の差が最も開いているのは「⑧泊まりがけで家族旅行に行く」であり、7.4 ポイントの差があることが分かります。次いで、「⑦日帰りで遊びに行く」（6.1 ポイント）、「⑫家族に勉強を教えてもらう」（4.7 ポイント）、「①一緒に料理やおやつをつくる」（2.6 ポイント）が続いています。

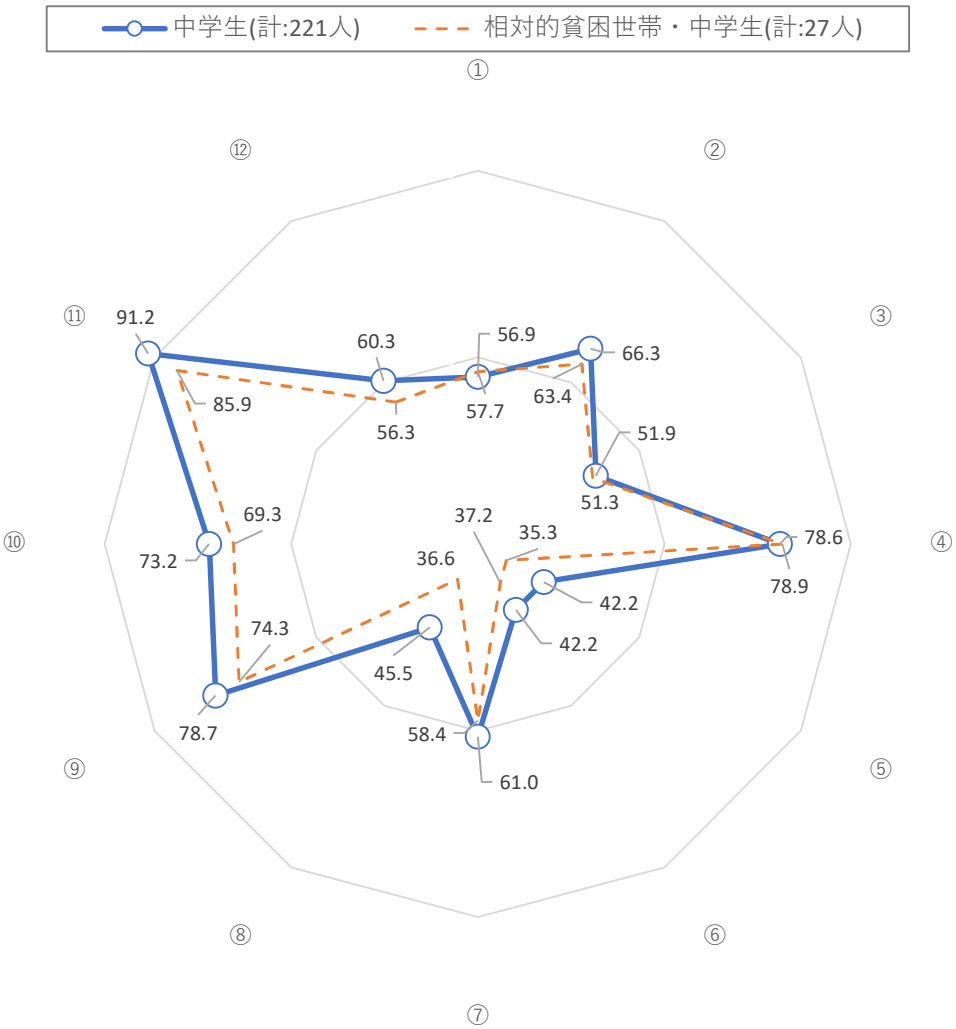
（中学生）


よくする
ときどきする
あまりしない
しない
無回答
0%
20%
40%
60%
80%
100%
① 一緒に料理やおやつをつくる
8.6
34.8
33.5
21.7
1.4
② 新聞やテレビのニュースについて話す
19.9
39.8
26.2
13.6
0.5
③ 子供会や地域の行事に参加する
12.7
20.4
29.0
37.6
0.5
④ 映画や買い物に出かける
41.6
39.4
11.3
7.2
0.5
⑤ 動物園や水族館に行く
1.8
13.6
36.7
47.5
0.5
⑥ 図書館に行く
5.4
13.1
27.1
53.8
0.5
⑦ 日帰りで遊びに行く
18.1
33.5
23.5
24.0
0.9
⑧ 泊まりがけで家族旅行に行く
3.6
21.7
28.1
46.2
0.5
⑨ 家族に学校のことを話す
47.1
29.0
16.3
6.8
0.9
⑩ 家の手伝いをする
29.4
41.2
23.1
5.4
0.9
⑪ 家族そろって食事をする
74.2
19.5
1.4
4.1
0.9
⑫ 家族に勉強を教えてもらう
17.6
29.9
29.9
21.3
1.4

計:221人

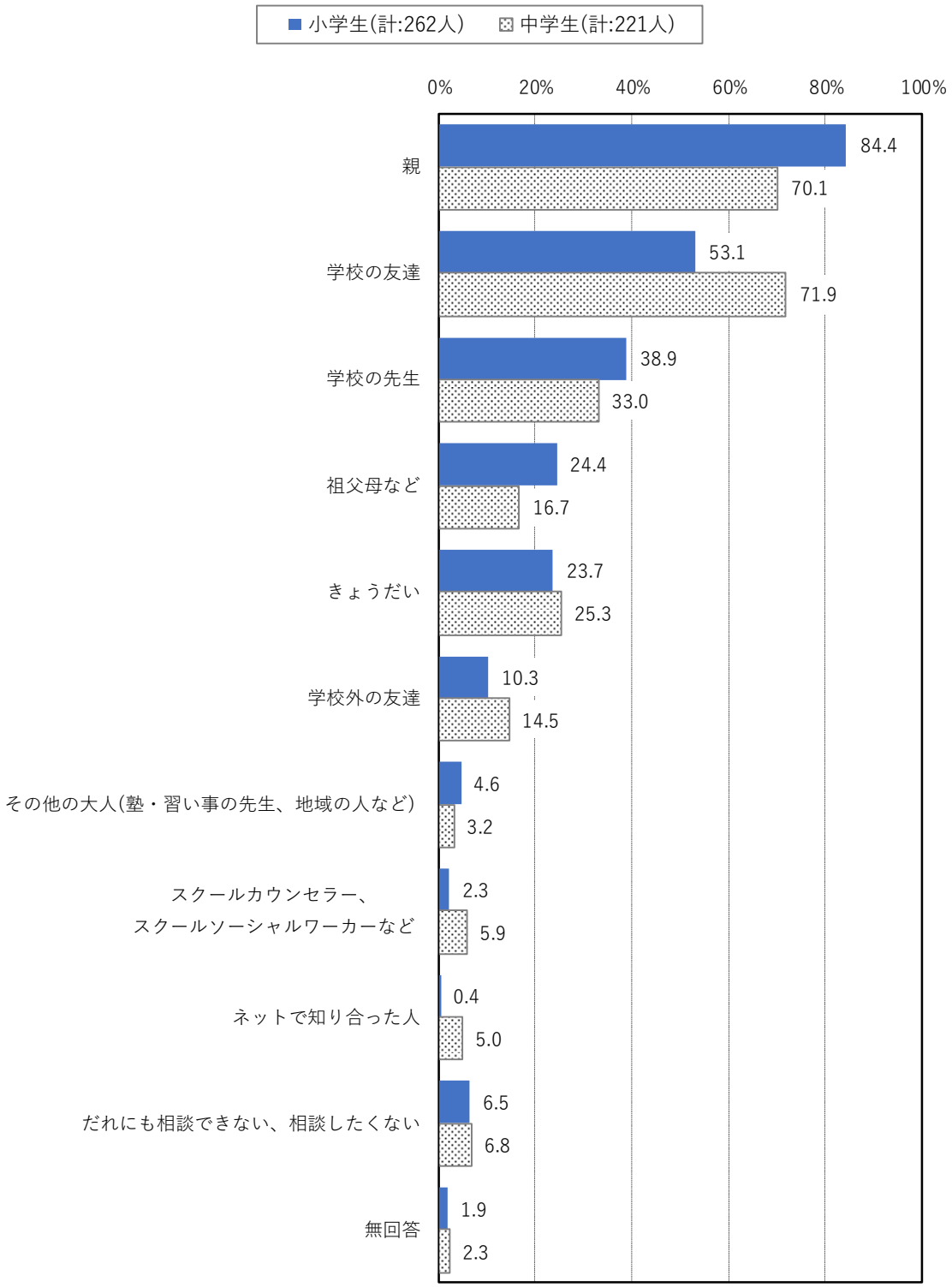
選択肢の 4 段階評価を「よくする」＝4 点、「ときどきする」＝3 点、「あまりしない」＝2 点、「しない」＝ 1 点として算出した平均値を評価点とし、相対的貧困世帯との差を明らかにすることを試みました。評価点がより大きい場合、その項目の経験頻度が高いといえます。

（中学生）



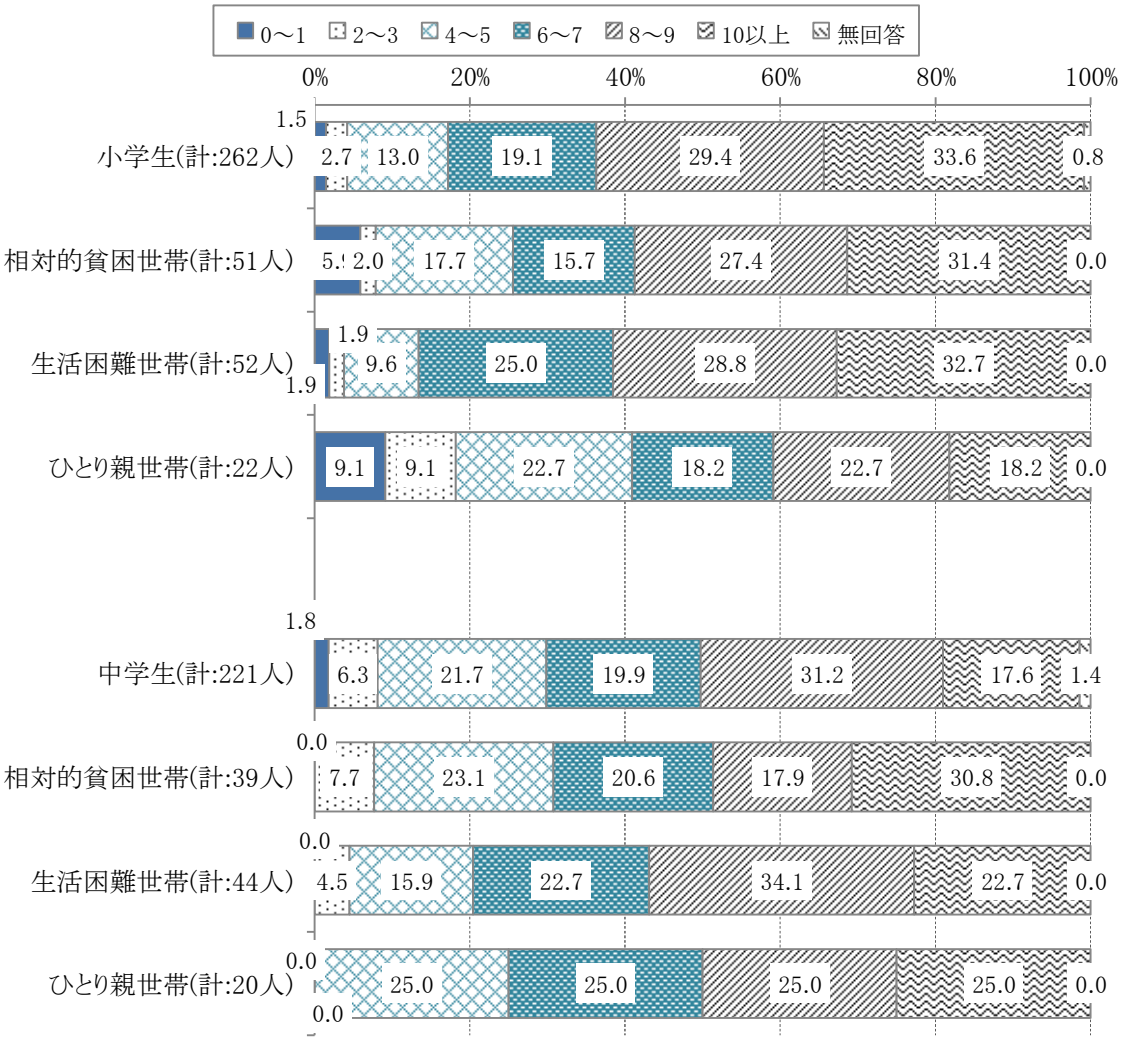
●全体と相対的貧困世帯で経験頻度の差が最も開いているのは「⑧泊まりがけで家族旅行に行く」であり、8.9 ポイントの差があることが分かります。次いで、「⑤動物園や水族館に行く」（7.0 ポイント）、「⑪家族そろって食事をする」（5.4 ポイント）、「⑥図書館に行く」（5.0 ポイント）、「⑨家族に学校のことを話す」（4.4 ポイント）が続いています。

問１６　あなたに困っていることや悩みごとがあるとき、あなたが相談できると思う人はだれですか。



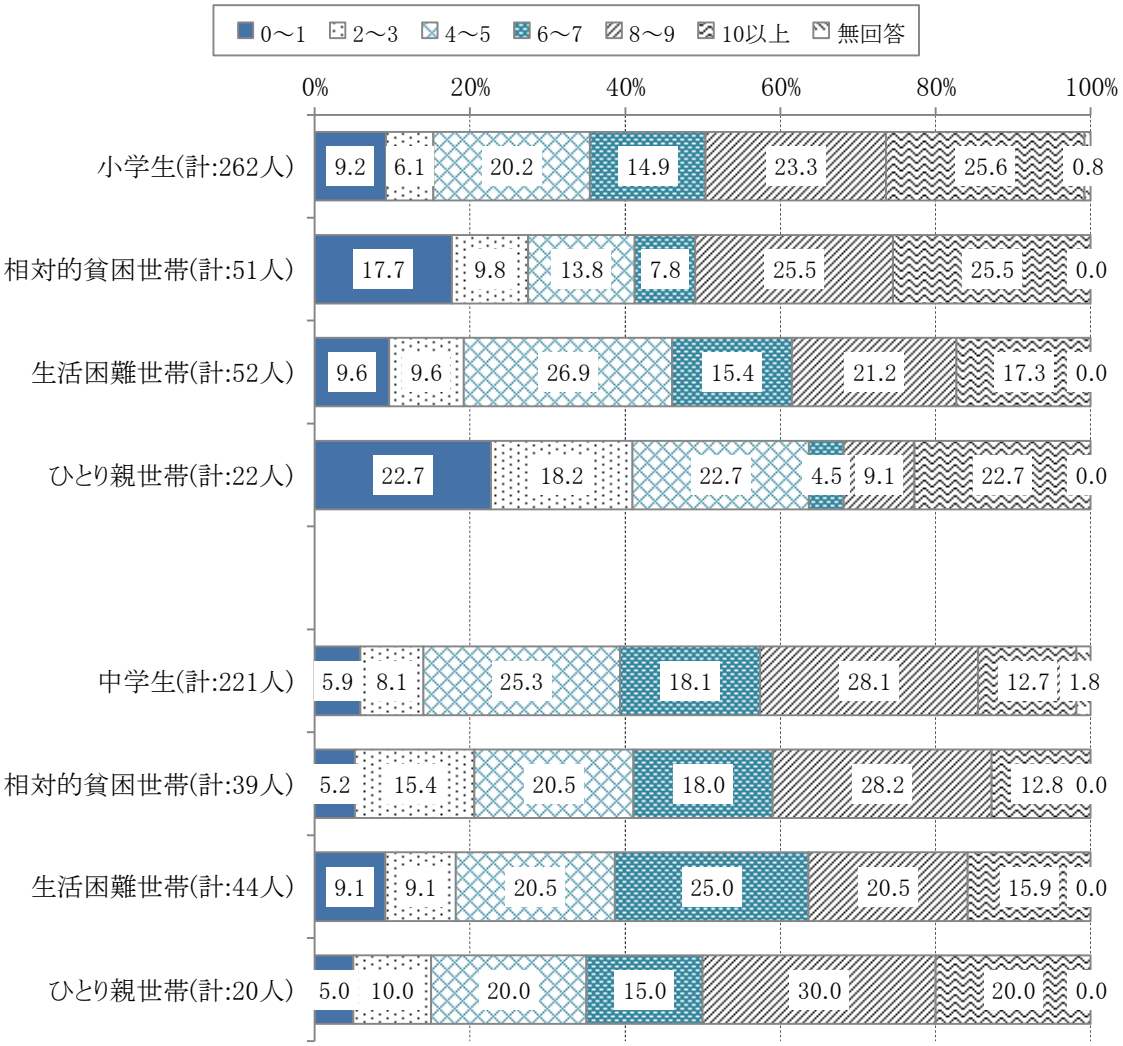
●困っていることや悩みごとがあるとき、あなたが相談できると思う人はだれですかとたずねたところ、小学生では、「親」と回答した人が最も多く、84.4%となっています。次いで、「学校の友達」（53.1%）、「学校の先生」（38.9%）と続いています。一方、中学生では、「学校の友達」と回答した人が最も多く、71.9%となっています。次いで、「親」（70.1%）、「学校の先生」（33.0%）と続いています。

問１７　全体として、あなたは最近の生活に、どのくらい満足していますか。「0」（まったく満足していない）から「10」（十分に満足している）の数字で答えてください。



●最近の生活に対する満足度が５点以下の人の割合は、小学生では 17.2%、中学生では 29.8%となっており、成長につれて満足度が低下する傾向にあります。小学生は、相対的貧困世帯（25.6%）やひとり親世帯（40.9%）で満足度が低い人の割合が比較的高くなっている一方、中学生では大きな傾向はみられません。

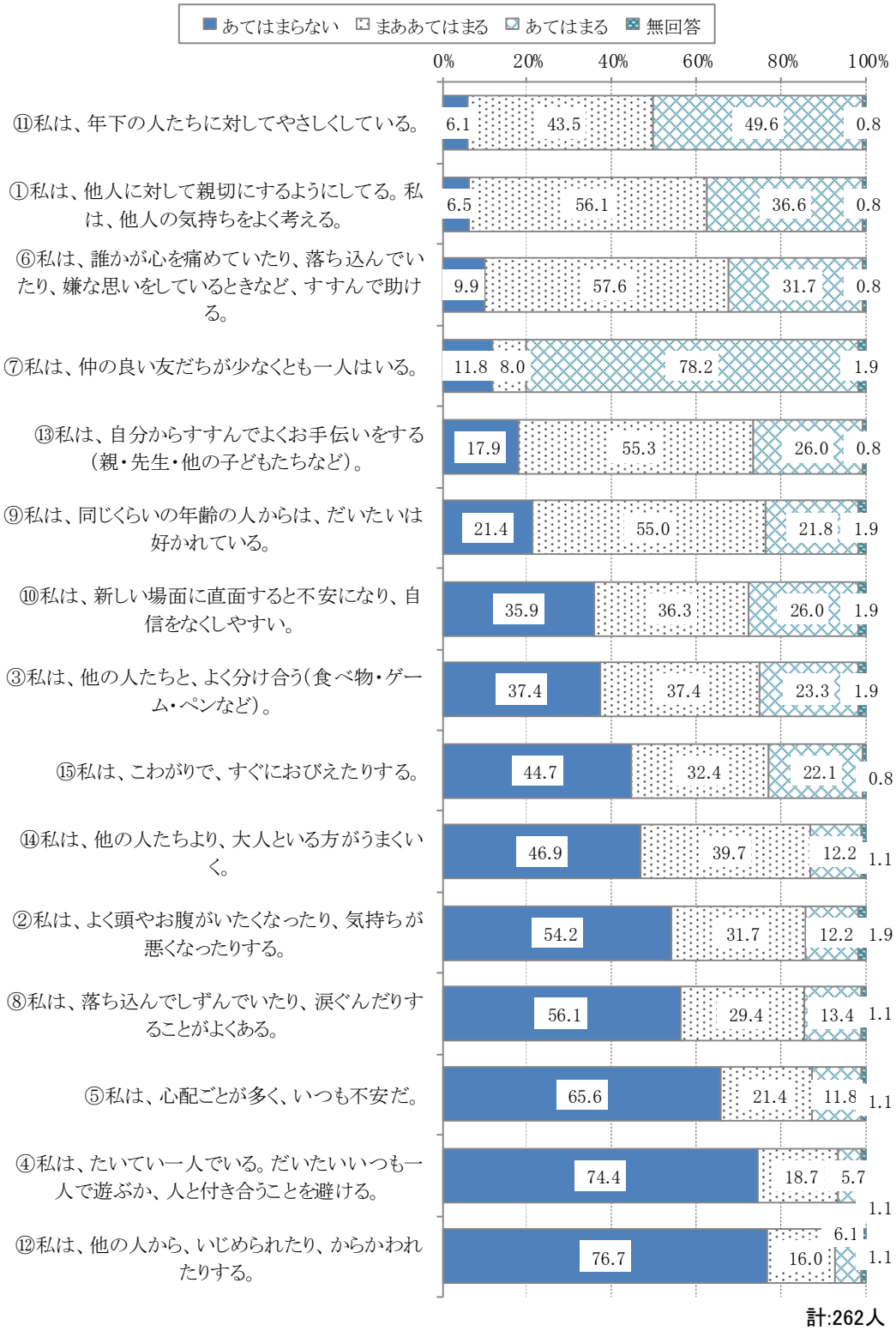
問１８　あなたはふだんから、「自分はここにいていいんだ。」「自分は今のままの自分でいいんだ。」「自分の頑張りには価値がある。」などと思えますか。「0」（まったくそう思わない）から「10」（とてもそう思う）の数字で答えてください。



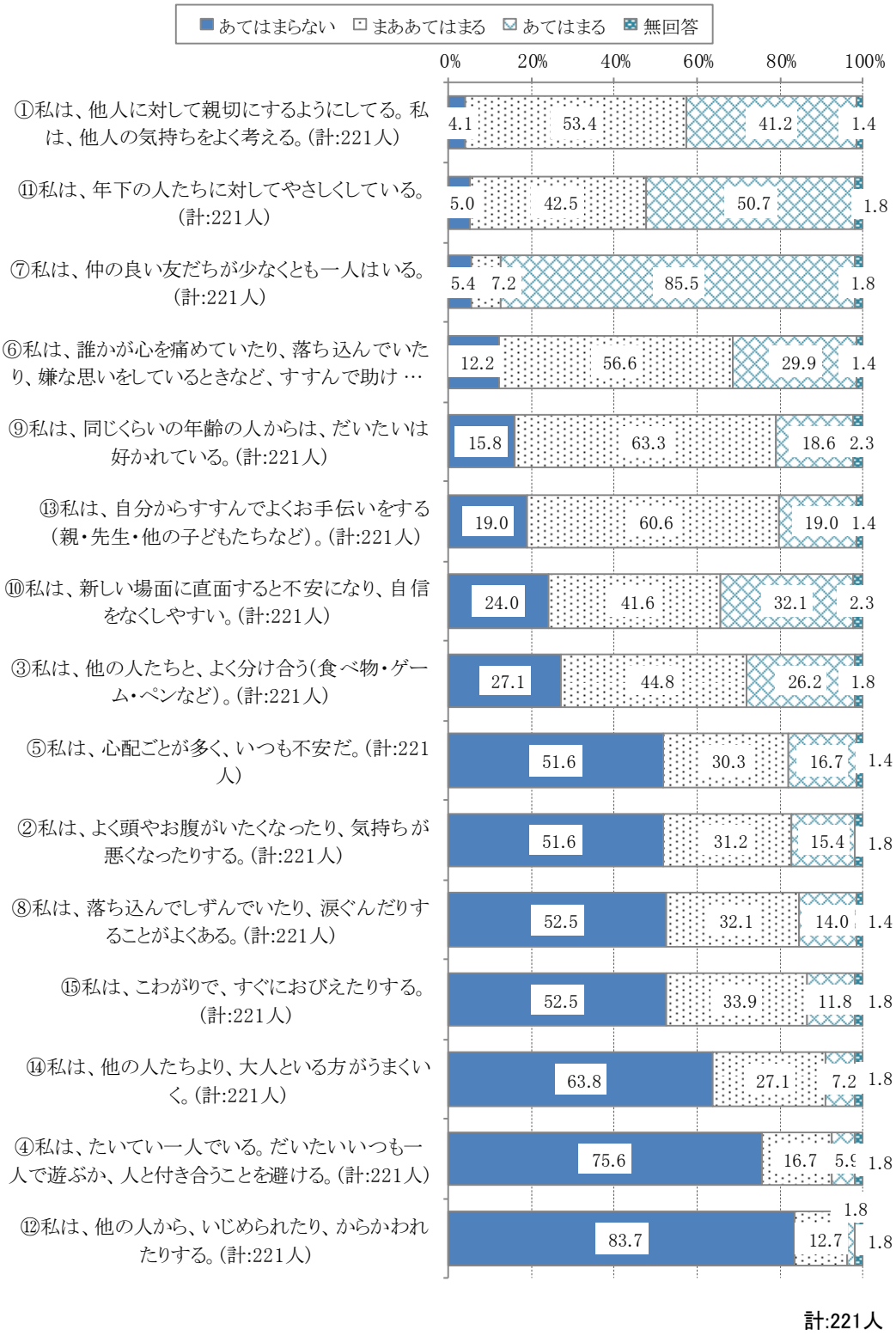
●ふだんから、「自分はここにいていいんだ。」「自分は今のままの自分でいいんだ。」「自分の頑張りには価値がある。」などと思えるかという問いかけによって、自己肯定感の状況をたずねたところ、自己肯定感が５点以下の人の割合は、小学生では35.5%、中学生では39.3%となっています。属性別にみると、中学生については大きな傾向はみられませんが、小学生では生活困難世帯、ひとり親世帯の自己肯定感が比較的低い傾向がみられます。

問１９　以下のそれぞれの質問について、「あてはまらない」「まああてはまる」「あてはまる」のどれかから回答してください。答えに自信がなくても、あるいは、その質問がばからしいと思えたとしても、全部の質問に答えてください。あなたのここ半年くらいのことを考えて答えてください。

（小学生）



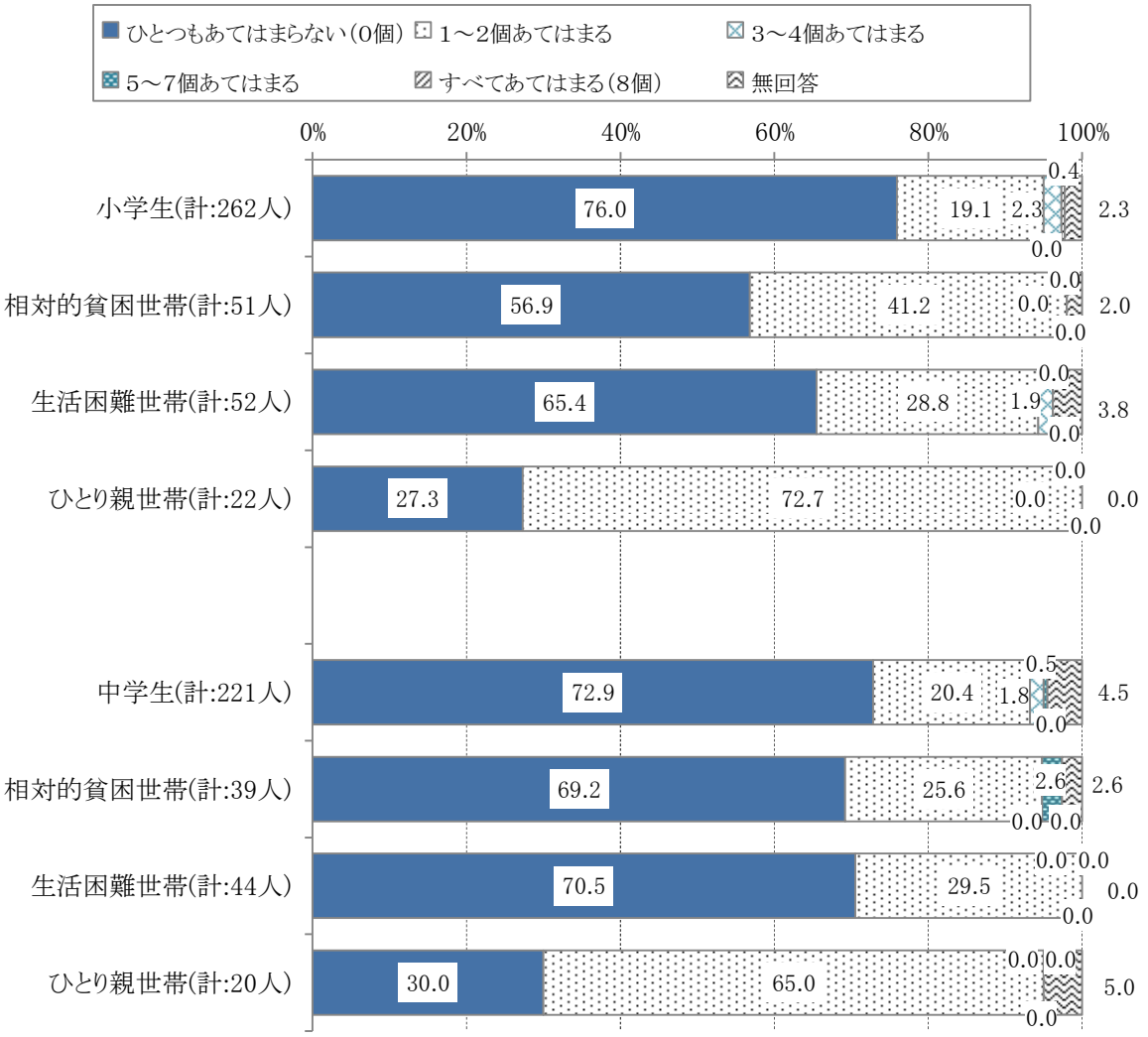
（中学生）



●「まああてはまる」「あてはまる」と回答した人の割合の和を降順に並べたところ、上位２項目は小学生も中学生も同様であり、「⑪私は、年下の人たちに対してやさしくしている。」「①私は、他人に対して親切にするようにしてる。私は、他人の気持ちをよく考える。」となっています。

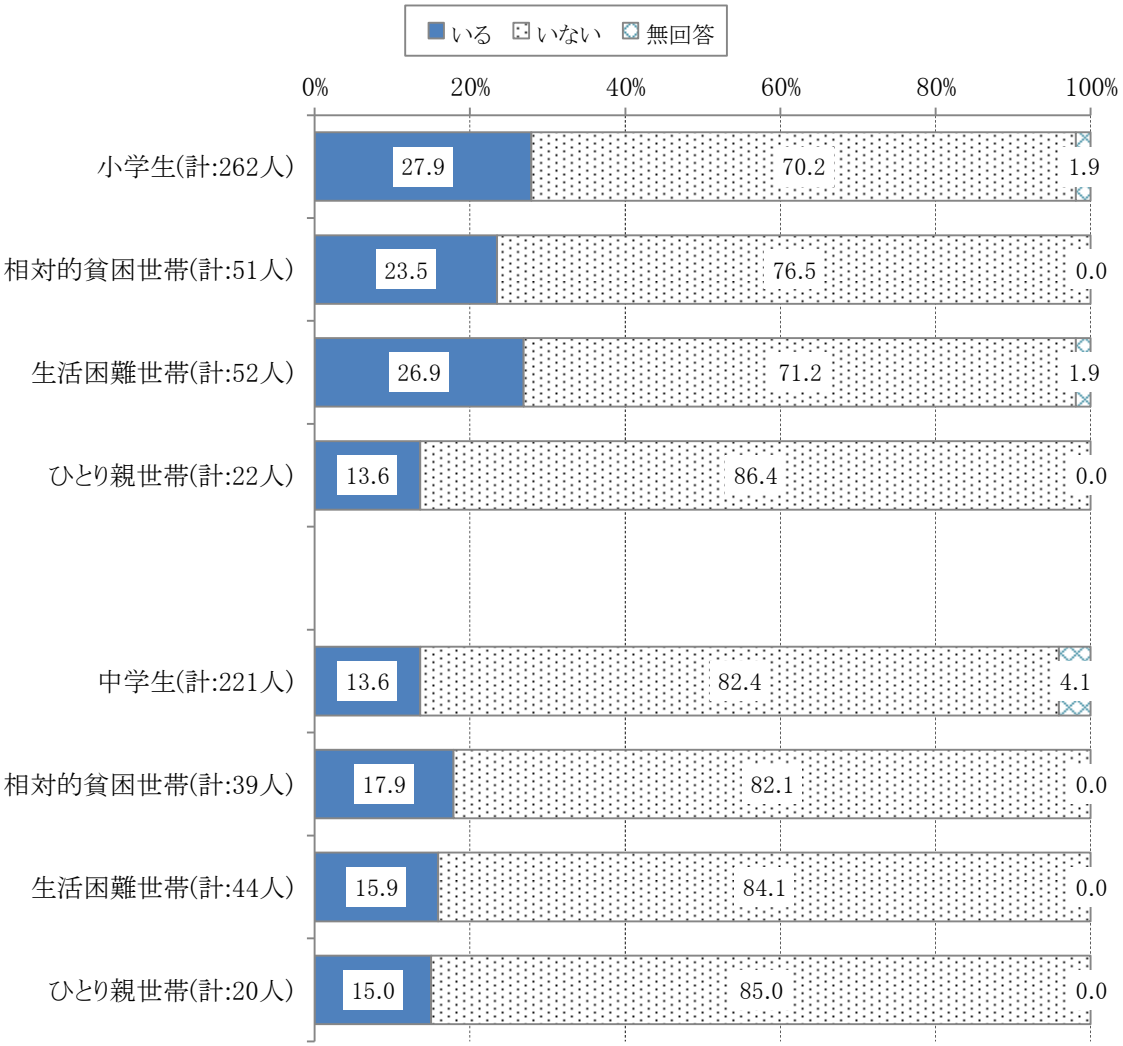
問２０　あなたは今までに、以下の①～⑧のようなことがありましたか。あてはまる個数を答えてください。

① 一緒に住んでいる大人から、あなたの悪口を言い立てられる、けなされる、恥をかかされる、または、身体を傷つけられる危険を感じるようなふるまいをされることがよくある
② 一緒に住んでいる大人から、押される、つかまれる、たたかれる、物を投げつけられるといったことがよくある。または、けがをするほど強くなぐられたことが一度でもある
③ 家族のだれからも愛されていない、大切にされていない、支えてもらえていないと感じることがある
④ 必要な食事や衣服を与えられなかったり、自分を守ってくれる人はだれもいないと感じたりすることがある
⑤ 両親が、別居または離婚をしたことが一度でもある
⑥ 一緒に住んでいる家族が、だれかに押されたり、つかまれたり、けられたりしたことがよくある、または、くり返しなぐられたり、刃物などでおどされたことが一度でもある
⑦ 一緒に住んでいる人に、お酒を飲んだり麻薬などで自身の生活や人間関係を損なうようなふるまいをしたりした人がいる
⑧ 一緒に住んでいる人に、うつ病やその他の心の病気の人、または自殺しようとした人がいる



●前頁に挙げる①～⑧の事項に「ひとつもあてはまらない」と回答した人の割合は、小学生が 76.0%、中学生が 72.9%となっています。小学生、中学生ともに、相対的貧困世帯、生活困難世帯、ひとり親世帯は全体に比べ、「ひとつもあてはまらない」と回答した人の割合は低くなっています。特に、ひとり親世帯は「ひとつもあてはまらない」と回答した人の割合が小学生は 27.3%、中学生は 30.0%と、それぞれ全体の半分以下の回答割合となっていることが分かります。

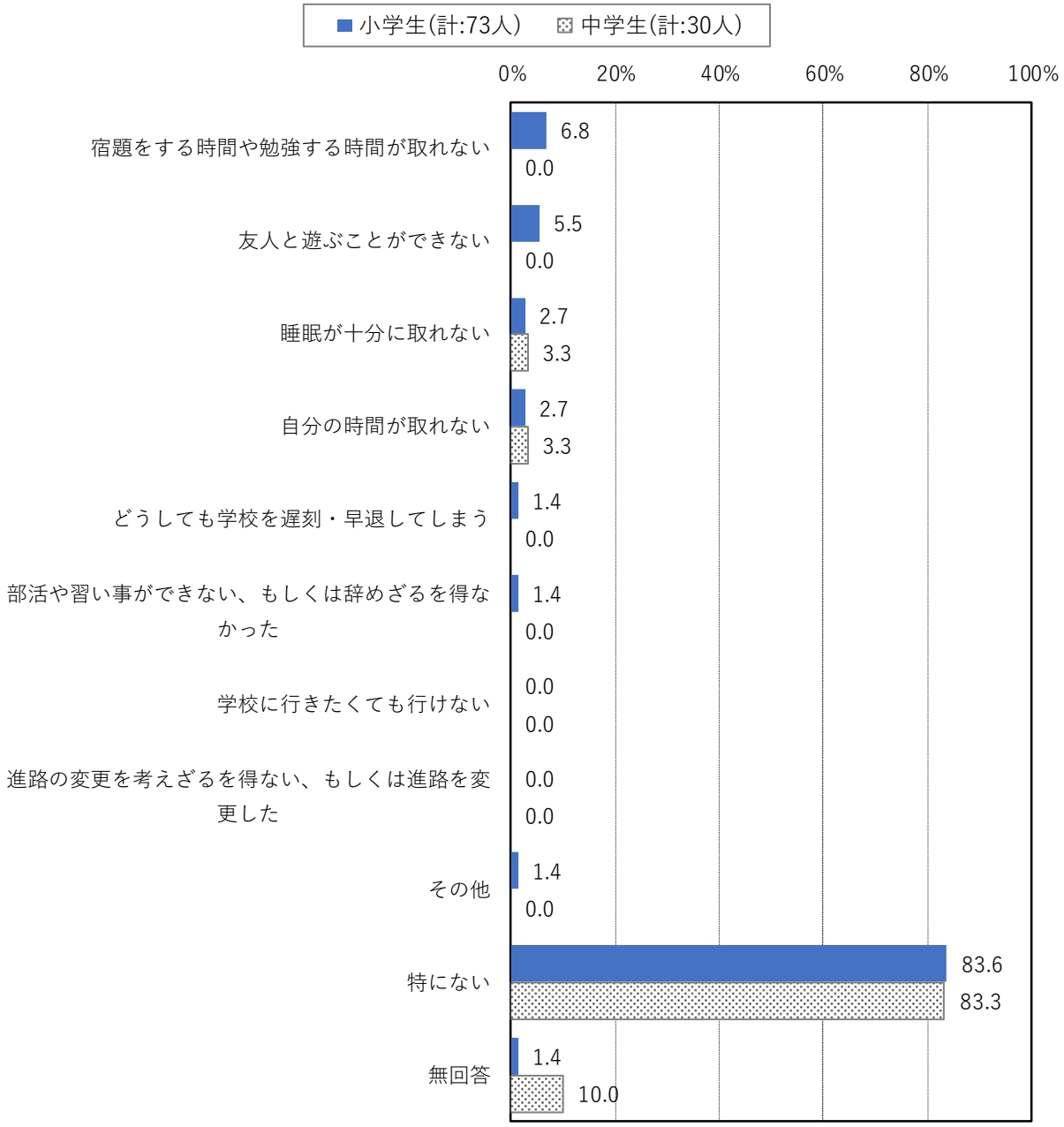
問２１　家族の中にあなたがお世話をしている人はいますか。(ここで「お世話」とは家庭内でお母さんお父さんたちが行う家事（毎日の食事の準備、掃除洗濯など）や家族（きょうだいやおじいさん、おばあさんなど）の世話などをすることです。



●家族の中にあなたがお世話をしている人はいますかとたずねたところ、「いる」と回答した小学生の割合は 27.9%、中学生の割合は 13.6%となっています。

「いる」と回答した人にお聞きします。

問２２　お世話をしていることで、やりたいけど、できていないことはありますか。

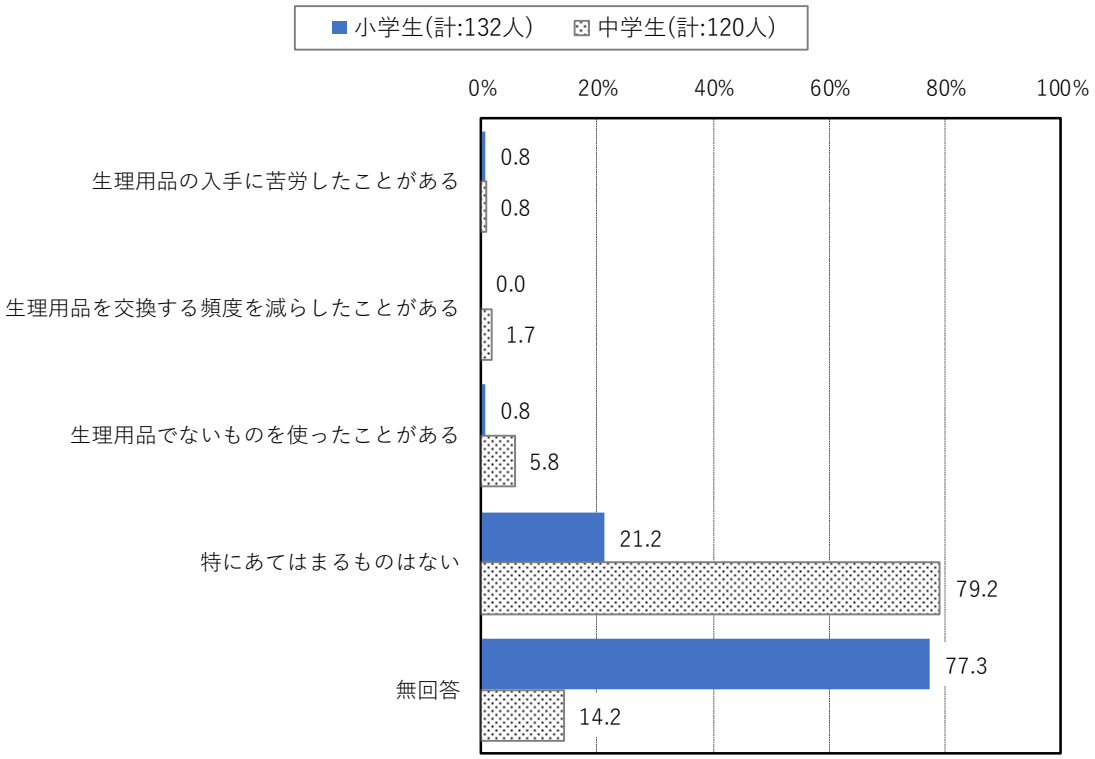


●お世話をしている人が「いる」と回答した人にお世話をしていることで、やりたいけど、できていないことはありますかとたずねたところ、「宿題をする時間や勉強する時間が取れない」と回答した人が最も多く、6.8%となっています。次いで、「友人と遊ぶことができない」（5.5%）、「睡眠が十分に取れない」（2.7%）と続いています。

生理を経験した方にお尋ねします。

問２３　生理について、下記のようなことがありましたか。

（女性のみ）



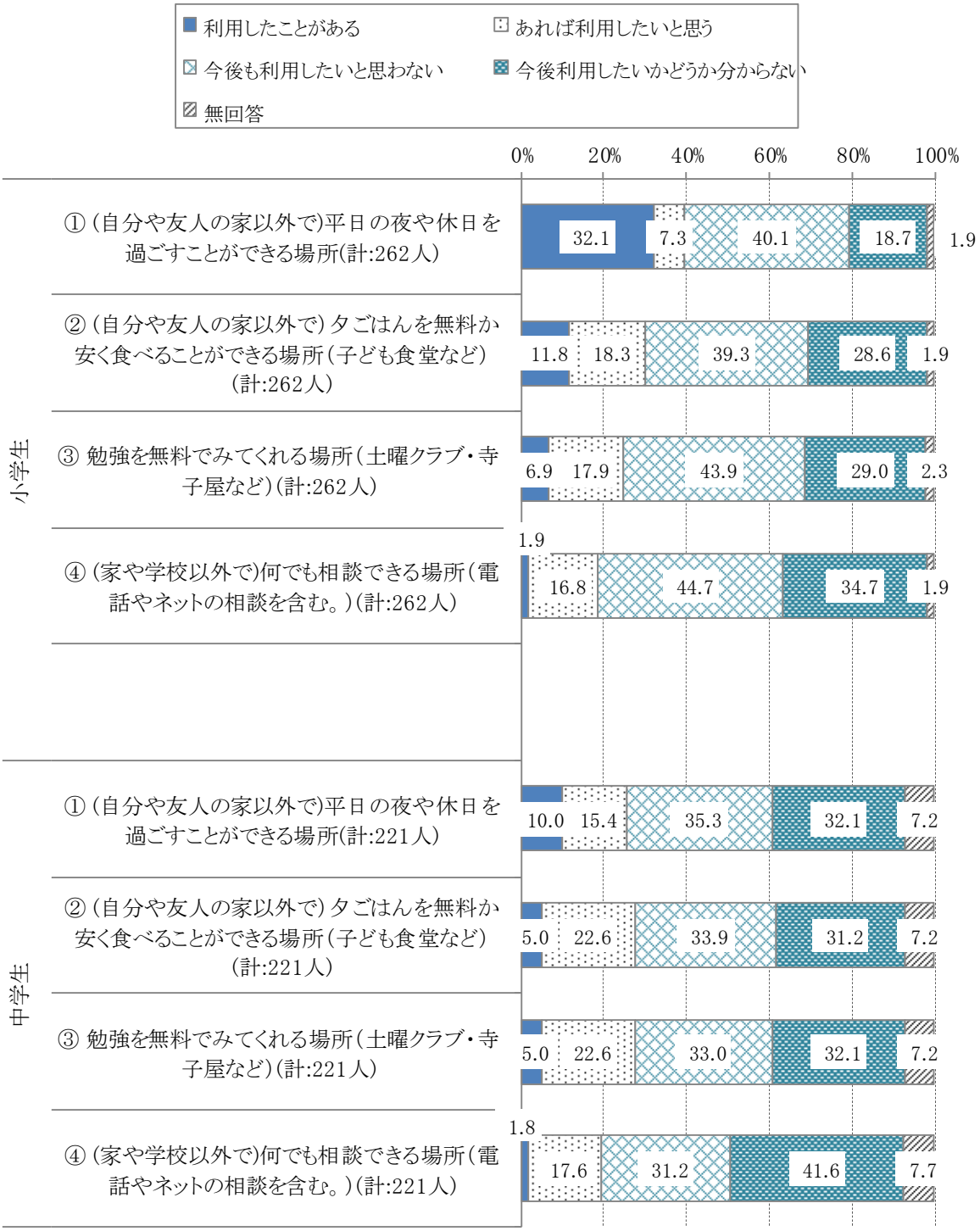
●生理を経験した方に生理についての経験をたずねたところ、「生理用品の入手に苦労したことがある」「生理用品を交換する頻度を減らしたことがある」「生理用品でないものを使ったことがある」のいずれかの回答をした人の割合（100.0%から「特にあてはまるものはない」と「無回答」の和を除いた値）は、小学生で 1.5%、中学生で 6.6%となっています。

●一方、属性別にみると、「生理用品を交換する頻度を減らしたことがある」と回答した中学生の割合は、相対的貧困世帯で 10.0%、ひとり親世帯で 11.1%となっています。

（中学生）

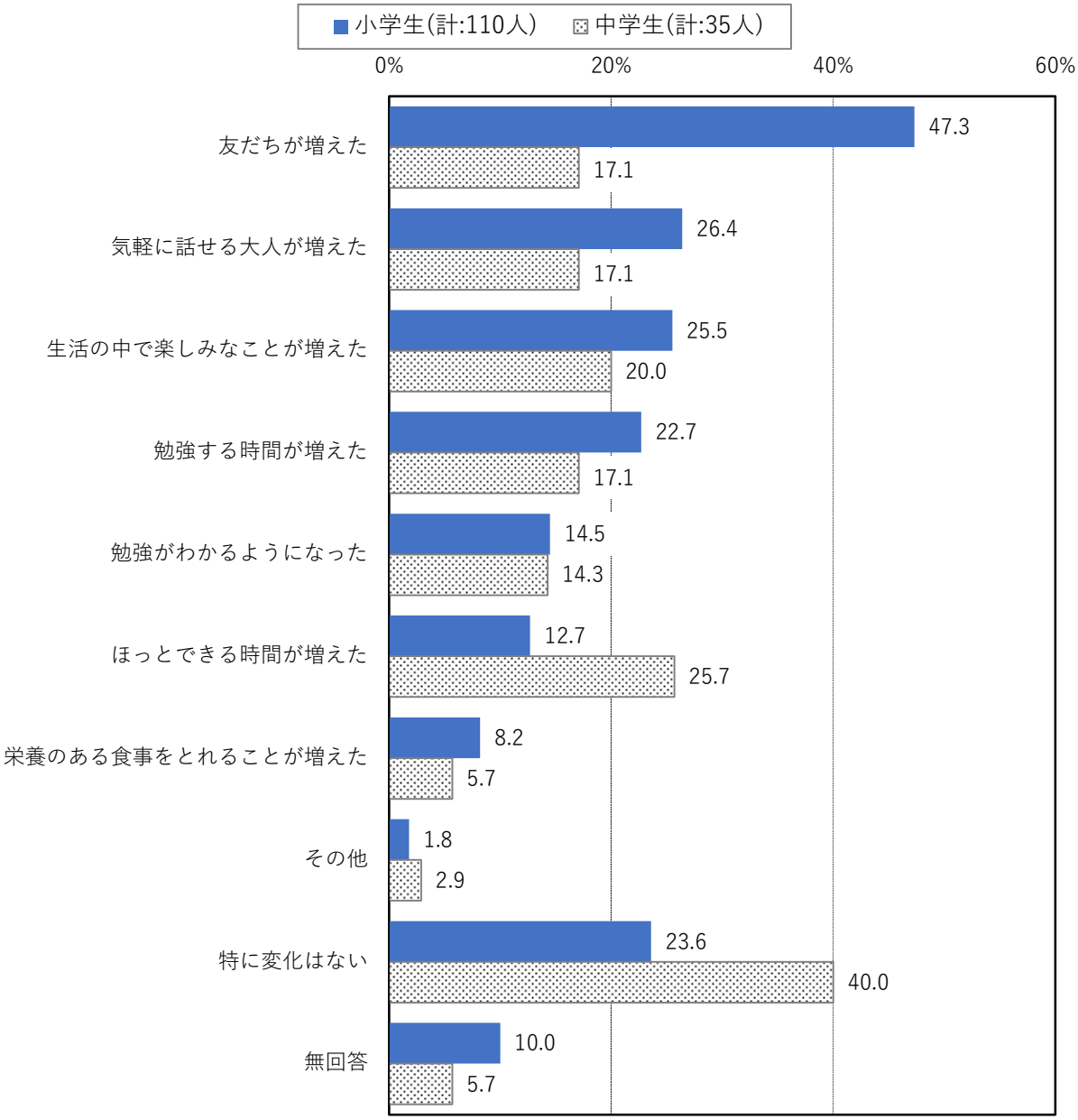
	生理用品の入手に苦労したことがある	生理用品でないものを使ったことがある	生理用品を交換する頻度を減らしたことがある	特にあてはまるものはない	無回答
中学生・女(計:120人)	0.8	1.7	5.8	79.2	14.2
相対的貧困世帯(計:20人)	0.0	0.0	10.0	75.0	15.0
準相対的貧困世帯(計:18人)	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
生活困難世帯(計:20人)	5.0	5.0	5.0	85.0	5.0
ひとり親世帯(計:9人)	0.0	0.0	11.1	77.8	11.1

問２４　あなたは、次の①～④のような場所を利用したことがありますか。また、利用したことはない場合、今後利用したいと思いますか。



１つでも「利用したことがある」と答えた方にお聞きします。

問２５　そこを利用したことで、以下のような変化がありましたか。



●①～④の場所の利用経験のある人に、利用によってどのような変化があったかとたずねたところ、小学生では、「友だちが増えた」と回答した人が最も多く、47.3%となっています。次いで、「気軽に話せる大人が増えた」（26.4%）、「生活の中で楽しみなことが増えた」（25.5%）と続いています。一方、中学生では、「ほっとできる時間が増えた」と回答した人が最も多く、25.7%となっています。次いで、「生活の中で楽しみなことが増えた」（20.0%）、「友だちが増えた」「気軽に話せる大人が増えた」「勉強する時間が増えた」（17.1%）と続いています。